
魔法の世界【改定前版】

MP5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の世界【改定前版】

【Nコード】

N5272J

【作者名】

MP5

【あらすじ】

西暦一七〇〇年、七月。二人の男女の間に、子供が産まれた。その翌年、子供が不思議な力……『魔法』を使うようになった。そしてその年から、人類は飛躍的な進歩を遂げた。

更に、二〇〇年後。

不思議な子供を軸に、人類の六割が『魔法』という力を使える様になった。この早さは異常であった。

そして更に一〇〇年後。人類は魔法という力に慣れきっていた。だが、それと同時に様々な問題が起きた。

魔法が使えない人類はどう生きるのか……。

あらすじ(2)

西暦一七〇〇年、七月。二人の男女の間に、子供が産まれた。

その翌年、子供が不思議な力……『魔法』を使うようになった。

そしてその年から、人類は飛躍的な進歩を遂げた。

更に、二〇〇年後。

不思議な子供を軸に、人類の六割が『魔法』という力を使える様になった。この早さは異常であった。

そして更に一〇〇年後。人類は魔法という力に慣れきっていた。

だが、それと同時に様々な問題が起きた。

魔法が使えない人類はどう生きるのか……。

仲間が、死んだ。

サミが死に、オトウヒが逃走した。

そんな状況下で、ベスウエル計画の全てを知らされる。全ては、地球のために。

そして旧人類を殺したとされる『魔王』の三人の部下、エクヴスイ、シュヴィティ、ルヴァとたいじする。

オリを失うも、勝利を納める。

そして、生き残ったフティにもその計画を知らされる。

学校での授業

「今から数年前『新人類』が『旧人類』を滅ぼしました。この事を……」

その言葉に、『白坂サトル』は目を覚まし、顔を上げた。

今は二時限目の、歴史の時間だった。白坂は眼を擦り教師の方を見た。

小さく欠伸をし、彼は周りを見回した。

斜め前に座っている男子生徒は、不快そうな顔で教師の話聞いていた。どうやら、歴史の授業は嫌いらしい、と彼は予想した。他の生徒たちも、その眠そうな顔をしていた。

確かに、この様な授業は退屈である。当然、実技の方が退屈はないのだ。

そう考えながら、彼は教科書の頁をめくった。

だが、新人類が旧人類を滅ぼした……。

その話には、興味があつた。

学校での授業（2）

だが、どうやら完全に魔法を使えない『旧人類』を滅ぼしたわけじゃないらしい。

更に、白坂は教科書の頁をめくった。

教科書では、完全に滅ぼした事になっているが、以前本で読んだ内容とは違っていた。

その本に書かれていた内容では、旧人類の九割を滅ぼした、と書かれており、残り一割の旧人類は行方不明と書かれていた。だが、当然魔法が使えずしてこの世界では生きていけない。恐らく、残り一割も既に滅亡しているだろう、と彼は思っていた。

更に、頁をめくろうとした時、チャイムが鳴った。授業の終わりを示すチャイムだ。

教師は二言三言告げると、教室を出ていった。

彼が大欠伸をしたとき、後ろから声を掛けられた。

「随分、お疲れの様な」

先ほど、教師の話を不快そうな顔をして聞いていた生徒だ。

「竹芝か。そっちこそ、教師の話を不快そうな顔をして聞いてたじゃないか」

彼は苦笑しながらいった。

学校での授業(3)

竹芝は一瞬戸惑った顔を見せた後、頭を掻いた。

「え、ああ。歴史は好みじゃ無いんだ」

その言葉は急遽取り繕った風に感じたが、彼は気にせず、続けた。
「俺もだよ」彼は教科書を手にした。「だけど、面白い話もあるよな」

「旧人類の話か？」

「そうだ。力無き者はこの世に不要、とでも思った集団が暴れた話だよ」

その言葉を竹芝は、不快そうな顔をして聞いていた。「何とも、恐ろしい話だ。それに、その集団もまだ捕まっていない」

「まあ、魔法が使える人にとって、旧人類の存在は迷惑何だろう？」

そう取れば、奴等を捕まえる必要がない」

「まあ、そうかも知れないが」竹芝は額を掻いた。「だが、生き残った人たちにとっては迷惑だろ。その集団がまだ自分たちを狙っている可能性があるから、うかつに表に出れない。それに、この件で旧人類に対する批判の聲が高まったんだ。集団が捕まったって……」

竹芝は彼が首を傾げているのに気付き、言葉を止めた。

「どうした？」

学校での授業（4）

「いや、お前も旧人類が全て滅んだと思ってないんだな、と思っただけだよ」

「え？ あ、ああ。前に何処かで聞いた事があるんだよ」

竹芝は苦笑した。

「まあ、だからってどうしようも無いんだけどさ」彼はいった。「取り合えず、次は実技だ。行こうぜ」

「ああ、そうだな」

そういい、彼は教室を出ていった。

数分後、小さな教室に着いた。教師の近くに座り、話を聞いた。どうやら、今日は治療による実技で、死にかけの生物を治療するらしい。

教師の話を聞いていた時、竹芝が横から話かけてきた。

「死んだ生物を生き返らせるのって、違法じゃ無かったのか？」小聲で、話掛けてきた。

「いや、今回はあくまで死にかけの生物を生き返らせるだけだ。まだ、死んで無いから合法何だろう」

学校での授業(5)

「ふーん、そうか」そういい、竹芝は教師の方を向いた。「にしても、急に難しくなったな。今まではすり傷とかを治療しただけなのに」

「この手の授業は、日数が少ないからな」彼は小声でいった。

現代、魔法による治療は資格を持っている人間、或いは資格を持つている人間の許可が無いと出来ないのだ。当然、治療系の授業を担当するには資格が無いといけない。だが、その手の資格を持つ人間は病院等で働く場合が多いので、担当出来る教師が少ない。よって、自然と治療系の授業日数が少なくなっている。

だが、所詮この手の授業など受けても仕方がない、と彼は思っていた。資格などを手に入れるつもりが無いからだ。

だが、真面目に受け、テストも合格しなければ点数が取れない。どうせ、真面目にやるしか無いのだ。彼は渋面を作り、教師の話を聞いていた。

学校での授業(6)

「では、これからテストの説明を行います」教師は黒板を杖で叩いた。「時間内に、死にかけの虫を治療して下さい。治療出来なかった場合は不合格とし、減点します。尚、『リング』による補助力を使い合格した場合も一、二点程減点されます。何か、質問はありますか？」

教師は、生徒の方に振り向き、周りを見回した。

「無いようなので、テストを開始します。名を呼ばれた人、前に出てきて下さい」

そういい、教師は椅子に腰をおろした。

「なあ、白坂」

一人目の名が呼ばれた時、竹芝が話しかけてきた。

「ん、どうかしたか？」

「いや、お前は『リング』を使うのかな、と聞きたかったただけなんだけどさ」

そういい、竹芝は頭を掻いた。

学校での授業（7）

「リング……か」

白坂は不快そうな顔で呟いた。

人々は、『リング』を使う事により、魔力を倍増させる事が出来る。

しかし強力な魔法を使う場合、リングを使うのは違法とされている。人が倍増した魔力に負けてしまうからだ。以前、強力な魔法を使うときに『リング』をしようとした男性が暴走し、一つの村を滅ぼすという大惨事があった。その、男性が白坂の父親だった。

そんな大惨事があっても、学校でのリング使用は許可されている。学生の力は大した事無いから、大丈夫だろう。という理由があったからだ。

「あ……、その、すまない」

竹芝は申し訳なさそうに頭を下げた。

「いや、いいんだ。過去の事なんて、どうでも」

そういい、白坂は微笑した。

作り笑いだという事は、竹芝にもよく分かった。

学校での授業（8）

「では次、白坂サトル君」

彼の名が呼ばれた。椅子から腰を上げ、彼は前に向かった。

竹芝は目を見開き、前を見た。半数の生徒は近くの友人と話をしており白坂の事には注目していなかった。

教師が白坂に一言告げた後、彼は教卓に振り向いた。

死にかけの虫の上で手を広げ、彼は目を瞑った。

数秒後、彼は目を見開き、手を握った。

その直後、虫の周りが光に包まれ、虫の活動が活発化した。

「白坂サトル君、合格です。では、次は……」

教師は素晴らしい、新しい虫を隣に置いてある箱から取り出した。

合格までの異常な早さ、そして集中力の高さ、竹芝は、素直に感服した。

学校での授業(9)

白坂が席に着き、腰を降ろした時に竹芝は凄いな、と呟いた。

「危なかった、けどさ」

白坂は苦笑した。

それから暫く、彼らは他の生徒を見ていた。

大抵の生徒は、時間が掛かっているが、合格していた。

だが、リングを使っている生徒ばかりだった。

「全く、補助力を使って何が楽しいのかねえ」

白坂は吐息交じりに言った。

竹芝はその言葉に反応し、周りを見回した。幸い、他の人には聞かれてなかったらしい。

こんな言葉、他のクラスメイトに聞かれたら不味い、と竹芝は考えていた。

「えー、では次、竹芝君」

竹芝の名が呼ばれ、彼は前に向かった。

そして彼は教卓に向かい、虫の上で手を広げた。

学校での授業（10）

放課後、教室は静まりかえっていた。一つの机の上で、男子生徒がうつ伏せになっていた。竹芝だ。

「……あまり、気にしない事だ」

一人の男子生徒が、竹芝の肩に軽く手を乗せた。

「奈三川、今はそっとしてやれ」

白坂が教室のドアの前で言った。

奈三川は静かに頷き、白坂の居る方に向かった。

「どうせ、俺は駄目なんだ……」

竹芝がうつ伏せになりながら呟いていたが、気にせずに彼らは教室を後にした。

「まあ、リングを使ってあの程度だったんだ、仕方がない……よな」
奈三川はげた箱の前で言った。

竹芝はリングを使い、テストに挑んだ。だか、結局何も起こらず、リング使用のテストは失敗に終わった。

竹芝(1)

「でもさ」白坂は上履きから外靴に履き変えている時に言った。「今までだって、そうだったじゃないか。今回だけ、あんなに落ち込まなくても良いのに」

「確かに。今回の難易度が高すぎた。失敗して当たり前だ」

「それ、言い訳に聞こえるが」

白坂は苦笑した。今回のテストは奈三川を含む十七人が不合格だった。しかし、何れもリング未使用でなかなかの所までいった。「まあ、良いじゃ無いか。それより、此から何か用事とかあるか？」

奈三川が話題を変え、白坂に聞いた。

「急に、話題を変えるんだな。まあ、此から暇だから、何も無いが」
「なら、これから買い物にでも行かないか？ 買いたい物があるんだが」

「別に良いが、何を買いたいんだ？」

白坂は首を傾げた。

竹芝（2）

「ああ、魔法に関する本を買いだ。どうだ、来るか？」

奈三川は素晴らしい、靴を履き変えた。

それなら、といい白坂は買い物に付き合う事にした。

「うわ、随分寒いな。雪まで降ってる」

外は寒く、雪が降り積もっていた。

「まあ、もう一月中旬だからな。無理もない」

白坂は手をポケットに入れ、手袋を取り出した。

「これじゃあ、スーパ―行くのに一苦労だな」

そういい、奈三川は身を黒いコートに包んだ。

「まあ、買いに行かないという手段も無くは無いぞ」

「いや、明日授業で扱う魔法に関する本なんだ。今日買わなければ意味がない」

「冗談で、言ったのにさ」白坂は苦笑した。「それより、明日授業で使うのって、何か有ったつけ？」

白坂は首を傾げ、奈三川を見つめた。

「今日、不合格だった人だけの補修授業だよ」

ああ、と白坂は頷いた。今回、不合格者が異常なまでに多かった
ので、教師が急いで補修授業をする事にしたのでだろう、と彼は考えた。

竹芝(3)

「にしても補修、面倒だな」

奈三川は欠伸をし、腕を前に伸ばした。

「まあ、確かに。どうせ、社会に出てからじゃ資格無いと使えないのにさ」

「そうだよ。俺は絶対その資格が必要な職なんかには就かない。意味が無いのにさ」

「まあ、合格して点数稼がないと、次のテスト受けられないしな」

「いいよなあ、そういうのが得意な奴は」

そう奈三川が言い掛けた時、目的のスーパーに着いた。

中に入ると、暖房の暖かさが彼らの身を包んだ。

「うお、随分暖かいな」

奈三川は言った。それに白坂は頷いた。

「にしても」白坂は手袋を脱ぎながら周りを見回した。「客が少ないな。多く見積もって百人弱かな」

「まあ、この寒さだ。無理も無い。それより、早く買いに行こうぜ」
「そういい、奈三川は書店へと向かった。白坂はそれを見て、何だかおかしくなった。」

竹芝（４）

暫く、スーパーを歩いていて白坂は気付いた。

「書店の場所、何処だ……？」

元々、スーパーに行く回数が少ないので、この場所には詳しく無かった。

白坂は周りを見回し、近くにあるベンチに腰を降ろした。

周りにいる客は、大抵が女性、子供であった。

白坂は眼を閉じ、眠りについた。

暫くし、誰かの声が聞こえた。

「おい、白坂。起きろ」

奈三川の声だ。白坂は目覚めたばかりの眼を擦り、奈三川をみつめた。

「ああ、もう終わったのか？」

白坂は大欠伸をし、腕を前に伸ばした。

「スーパーに来てから、二時間経っているがな」奈三川は苦笑した。
「さあ、もう帰ろうぜ」

竹芝(5)

白坂はベンチから腰を上げた。

「それにしても二時間か。随分掛かったな」

外に出ようと足を向けた時、白坂は言った。

「ああ、他にも色々見ていたんだ。まさか、君が寝ているとは思わなかったが」

奈三川は苦笑した。

外に出ると、やはり寒かった。彼らはコートに身を包み、歩き始めた。

暫く、二人は話さないまま時が過ぎた。

「そういや、修学旅行まで残り僅かだよな」

奈三川は口火を切った。

「後、一ヶ月ちょっとだよな。長いんだか短いんだか」

竹芝（6）

「まあ、経ってみれば短いと思えるさ」

「そんなものかね」

白坂はポケットから手袋を取り出した。

「そういうもんだ」

奈三川は信号で立ち止まった。それに続き、白坂も立ち止まった。

「それより、お前は補習の事を先に……」

白坂は周りを見回し、ある一点の場所を見つめ、目を見開いた。

「ん、どうした？」

奈三川も白坂が見つめている方に目を向けた。そこに居たのは、

竹芝だった。

「あれ、竹芝だよな？」 奈三川は言った。「家とは違う方向、だな」

「家とは違う方向？ それは、確かか？」

その言葉に、白坂は頷いた。

奈三川はその言葉を聞き、唇をなめた。

竹芝（7）

「恐らく、女だろうな」

奈三川は頭を掻いた。

「どうして？」白坂は首を傾げた。

「よく考えてみる」奈三川は信号で立ち止まっている竹芝を見た。

「教室であれだけ落ち込んでいた竹芝があれだけ元気になっている。その理由は、彼女ぐらいしか考えられない」

「どんな、思考回路だ」信号が赤から青に変わり、白坂は足を動かそうと、奈三川を見た。

奈三川は動こうとせず、ゆっくりと歩いている竹芝を見つめていた。

「どうした、帰らないのか？」

奈三川は振り返った。「知りたくは無いか」

その言葉に、白坂は首を傾げた。

「竹芝をあれだけ元気にさせた理由をだ」

「まあ、知りたくない、と言えば嘘になるが」白坂は頭を掻いた。

「それより、もし竹芝に彼女が居たらどうするんだ？」

「その言葉、知りたいと受け取っておこうか」

「質問、答えてないが？」

「はは、決まってるだろう」奈三川は手を強く握った。「竹芝の醜態を彼女に晒す……！」

そういい、奈三川は歩き始めた。それを見て、白坂は哀れに思えた。

竹芝（8）

白い息を吐き、白坂は奈三川の後ろを歩いた。そうは言うが、あの竹芝をあれだけ元気にさせる理由を、白坂も知りたかった。

「あの方角、何か良い建物とか有ったか？」奈三川は竹芝に離れた位置から呟いた。

調べろ、という意味だと白坂は悟った。「ちよっと待ってろ」彼はポケットから地図を取り出した。

「現在地から左に二百メートル行つた所にちよつとした食事処。さらに五百メートル行つた所に図書館。そして更に二百メートル行つた所に……」白坂は息を飲み込んだ。

「どうした？」

「図書館から二百メートル行つた所に、宿がある」

決まりだ、奈三川は目を細め、微笑した。

「しかし、宿ともなると俺たちが行くのは……」白坂が言い終わる前に、奈三川が口を手をやった。

「入る所を見るだけでいい、そうすれば竹芝に彼女が居る、というのはほぼ確定的になる」

奈三川は再び歩きはじめた。

竹芝（9）

白坂は渋面を作り、奈三川に着いて行った。

やはり竹芝は、左に向かった。当然、食事処には入らなかった。

そして、更に二百メートル程歩いた所で、竹芝は足を止めた。それを見て彼らは、急いで物陰に隠れた。

こちらの存在に気付いたのか……。白坂は胸に手をやった。何故だか、心臓の鼓動がはやまっていた。

数秒後、物陰から奈三川が竹芝の事を覗いた。普段通り、歩いていた。どうやらバレていないらしい。

奈三川は白坂にアイ・コンタクトをし、再び歩き始めた。

食事処からさらに約五百メートル行った所にある図書館で、竹芝は足を止めた。

「おい、あいつ図書館に入ろうとしている」

白坂は小声でいった。竹芝は静かに図書館の外見を見つめている。

「見れば分かる。馬鹿にするな」

奈三川は額に手をやった。

どうなっている、奈三川は考えた。竹芝は最初から図書館に行くか。うとしていたのか。それとも、尾行に気付いて急遽進路を変えたのか。

考えている内に、竹芝は図書館に入ってしまった。

「これじゃあ、彼女という線は無くなったな」

「いや、図書館で彼女と待ち合わせしているかも知れない。まあ、何れにせよ」奈三川は物陰から姿を表した。

竹芝（10）

「見つけて、吐かせれば良いだけだ。問題は無い」
そういい、奈三川は数十メートルある距離を全力疾走で駆け抜けた。

「何が、問題無いんだか」

白坂はため息をつき、渋々足を向かわせた。

数分後、奈三川は図書館の前で彼のことを待っていた。

何故走ったのだろう、と彼は思った。

「さあ、行こうぜ」奈三川は続けた。「図書館は、静かにな」

「こっちの台詞だ」

そういい、彼らは図書館に入った。

彼らはさっと周りを見回した。竹芝の姿は無い。奥に居るのか、と彼は奥に向かおうとした時、奈三川は彼の肩を掴んだ。「その必要は無い」小声で言った。

彼は再度、周りを見回した。先ほどでは物陰で見えなかったが、そこには竹芝の姿があった。

竹芝（11）

「だが、彼女の姿が見えない。やっぱり、彼女が居るという話は……」

白坂は小声で言った。だが、言い終わる前に奈三川は動き始めていた。

「竹芝、こんな所で何をしている？」

椅子に座って読書をしている竹芝に話掛けた。

「ん、奈三川か？ お前こそ、こんな所で何を？」

竹芝は突然の出来事に動揺していた。

「とぼけるのか？ 吐いたらどうだ、こんな……」

奈三川が言い終わる前に、白坂は彼の頭を叩いた。

「白坂まで？ 一体、何の話を？」

竹芝は首を傾げた。

「ああ、実はさ」

白坂は、理由を話した。

「つまり、自分に彼女が居ると思って、尾行したと？」

白坂は頷いた。奈三川も、頭を押さえながら頷いた。

竹芝（12）

「随分、暇みたいだな」

竹芝は頭を掻いた。

「言っておくけど、言い出したのは俺じゃないからな」白坂はいった。

奈三川は椅子に腰を降ろした。「仕方がない。一人で、図書館に来るのが悪いんだ」

竹芝は苦笑した。意味が不明だったのだった。

「でも、何でこんな場所に一人で？」白坂は椅子に腰を降ろした。

「ああ、実はさ」

竹芝は机に置いてある本を開いた。魔法に関する本だ。

「何だ、その本？」白坂は首を傾げた。

「魔法に関する本だよ。魔法を無力化にするのって、知ってるか？」

その言葉に、奈三川は首を傾げた。

「知っているが、それがどうかしたのか」白坂は答えた。

「その魔法について、学んでいるんだ」

「そういい、竹芝は頁をめくった。

「学んでる？　どうして、そんな珍しいのを。そんな魔法、英雄である『ベズウェル』だって……」

白坂が言い終わる前に、竹芝は口を開いた。「だからだよ」

「誰も知らない魔法を覚えるなんて、いいじゃ無いか」

「どういう、動機だ」白坂は苦笑した。

竹芝（13）

「まあ、動機なんて何でもいいよ。それより、本当に使えるようになるのが心配だよ」

「それ、何時から学んでるんだ？」白坂は聞いた。

「大体……」竹芝は頭を抱えた。「十年ぐらい前かな」

「十年前というと、丁度旧人類が滅んだ時だな」

「まあ、大体それぐらいだよ」

白坂は苦笑した。「十年間やって、使えるようになっていないのか」

「仕方がない。もうすぐ何だが、後一步が出来ない」

「使えるようになるさ」

今まで口を開かなかった奈三川が言った。

一瞬、竹芝は驚いた顔をした後、頷いた。「ああ、ありがとう」

そして、奈三川は白坂を見た。そちらも何か言え、という顔をしたら。

「俺は、無理だと思う」

白坂は奈三川の視線を気にせず、そう答えた。

竹芝（14）

「え？」

竹芝は首を傾げた

「だって、数年間やってまだ使えるようになってない。それに、今日の日を見た限りじゃ使えるようにはならないと思うが」

「そんなはつきり言うなよ。痛い傷つく」竹芝は落ち込んだ。

「まあ、努力次第だろ」白坂は椅子から立ち上がった。「俺、もう帰るよ」

俺もといい、奈三川も立ち上がった。

「それじゃ。まあ、頑張れよ」

奈三川は手を振った。それに続き、竹芝も手を振った。

「はあ、何で尾行なんかしたんだろう」外に出てから、奈三川は吐息まじりにいった。

「奈三川のせいじゃ無いか」

「まあ、そうなんだけどさ」そういい、奈三川は自分の手を見た。

「あれ？」

「どうした？」

「買った本、スーパーに忘れちゃった……」奈三川は周りを見回した。「すまない、物を取りに行ってくる。先に帰ってくれ」

そういい、奈三川はスーパーへと走っていった。

「……どっちも、頑張れ」誰に言うのでもなく、白坂は呟いた。

治療資格（1）

歩きながら、白坂は考えた。竹芝はあの魔法を何に使うのか、を。誰も使えない魔法を覚える……。動機としては薄いと思っ

た。そして、その魔法の使い道は一つしか無いと思っていた。

まさか、竹芝は……。彼は頭を抱えた。だが、そんな筈は無いと、彼は頭を振った。

休み明けの月曜日、白坂は何時もの様に通学した。

家に、家族は居ない。一人暮らしだ。その為、食事や家事も、彼一人で行っている。だが、一人の方が生活しやすいと思っ

た。何時もの道を何時も通り歩いた。

そして、数十分後、学校に着いた。

げた箱に向かおうとしていた時、前に一人の男子生徒が立っ

た。竹芝だ。

「おはよう」彼は小さく手を挙げた。

彼の存在に気付き、竹芝も手を小さく挙げた。「ああ、おはよう」少し、疲れてる様子だった。

「どうした、大丈夫か？」

「正直大丈夫じゃないよ」竹芝は欠伸をした。

「何か、あったのか？」

白坂は聞いた。

治療資格（2）

「ああ昨日、補習があったからさ」竹芝は靴を履き変えた。

「治療のか？ 折角の休日なのに、大変だな」

「大変だよ」そういい、竹芝は校舎の階段を上った。それに続き、白坂も階段を上った。

『魔法を無力化にする魔法』の事を聞きたかったが、喋れないまま階段をゆっくり上った。

教室に着き、ドアを開けた時、男子生徒が飛び出してきた。

「やあ、お二人とも！ おはよう！」

異様にテンションの高い奈三川だった。何が彼を変えたのか、白坂は目を細めた。

「どうした？ テンション高いけど」

白坂は教室に入った。数人の生徒が、ヒソヒソと何かを話していた。内容については、予想がついていた。

「そうか、白坂は知らなかったね。実はさ」竹芝はテンションが高い理由を話した。

その内容は、昨日補習の後に奈三川は怪我をし、竹芝と共に病院に行った。

その時、奈三川は一人の女性と会ったらしい。その女性に奈三川は一目惚れし、告白したらしい。

そして女性はある条件を出し、それを満たしていれば付き合う、と言ったらしい。

奈三川らしいな、と白坂は苦笑した。「それで、その条件って？」
「治療資格だよ」竹芝は答えた。

治療資格（3）

「え？」白坂は声を漏らした。「奈三川って資格……持って無いよな？」

「持ってたなら、補習なんか受けないよ。合格する筈だしね」

「じゃあ、ふられたって事か」白坂は自分の机の椅子に腰をおろした。

「いや、付き合うらしいよ」竹芝も自分の椅子に腰をおろした。

「はあ？」

「来週、資格を持っている証明書を見せるとか何とか言ってたけど？」

何を考えているんだ、と白坂は思った。それより……。彼は唇をなめた。

「何で、資格持ちじゃ無いと駄目なんだ？」

「彼女、数年前の事故で心臓が悪いみたい。魔法治療無しじゃ、生きていけないらしい」

なるほど、と白坂は思った。病院に居た理由も納得出来た。

「でも、資格無しじゃあ、どうにも成らないな。次の資格試験、明後日だしな」

「何を言っているんだ？」後ろから、奈三川が話掛けてきた。「その明後日の試験で、資格を取ればいい」

白坂は目を細めた。「試験、どれだけ難しいか……」

白坂が言い終わる前に、奈三川は教室から出ようとしていた。

「おい、どうした？」

「帰るんだよ。こんな所で勉強したって意味がない」

奈三川は手を振りながら教室から出た。

治療資格（4）

「奈三川大丈夫かな？」

「いや、無理だろう」白坂は続けた。「治療の資格試験っていうのは、才能がある人でも最低二年勉強しないと合格できないと言われる程難しいんだ。才能もなく、二日間しか時間がないんだ」

竹芝は鞆の中身を机に入れた。「そんなに難しいと、奈三川じゃ無理だよな……」

「まあ、全ては終わるまで分からない」白坂はにやりと笑った。

治療なんか、将来使うわけ無い……。そう言っていた奈三川が、あれほどに燃え上がっている。恋とは恐ろしい、と白坂は改めて思った。

「恋の力っての、見せてもらおうじゃ無いか」

白坂は呟いた。彼は心底、奈三川が合格すると信じていた。

校舎の階段をくだりながら、奈三川は思った。本当に合格出来るのか……。

だが、そんな事は考えていても意味がないと彼は思った。

「取りあえず、全力を尽くそうか」

奈三川はゆっくりと階段をおりた。

治療資格（5）

授業中、竹芝と白坂は奈三川について話をしていた。席が近く、話易い状態だった。

主に、『本当に治療資格取れるのか？』という話題だった。

話ながら、竹芝は周りを気にしていた。白坂は他にも話している人居るから目立たない、というが、正直不安だった。授業中に話している事がバレればいろいろと面倒なのだ。

「白坂くんは竹芝くん。随分楽しそうに話している様だが……そんなに私の授業がつまらないかね？」

案の定、男性教師にバレた。

「いや、白坂くんは百歩譲っていいだろう。君は優秀だからな。だが」男性教師はいった。「君はどうだ、竹芝くん」矛先が竹芝に向けられた。

授業を中断されたせい、真面目に勉強していた生徒が竹芝を睨みつけた。元々不真面目な生徒は、変わらず話を続けている。

「君は過去に二、三回しかテストに合格したことが無いと聞く。授業ぐらい、真面目に受けないと危ないんじゃないのかな？」男性教師は教卓を軽く叩いた。

「はい、すみません……」

竹芝は頭を下げた。

治療資格（6）

「分かればよろしい」

そういい、男性教師は教科書を開いた。

「では、竹芝くん。この頁を和訳して下さい」

竹芝は教科書に目を落とした。今の彼には読めない文ばかりだ。魔法語など、全く分からない。

「分からないです」彼は答えた。

「仕方がないですね。では、白坂くん」

白坂は教科書を手にし、文を和訳した。内容は魔法に関する事だった。

「さすがですね。では、次は……」

男性教師がそう言い掛けた時、チャイムが鳴った。授業終了を示すチャイムだ。

「今日は此処までです。次回は続きをやった後、テストがあるので、しっかり練習しておきましょう」

そういい、男性教師は足早に教室から出ていった。

「はー、やっと終わった。これから、どうする？」白坂が欠伸をしてから言った。

「普通に帰るだけだよ。することも無いし」

そうか、と彼は言った。少しした後、帰りのホームルームが始まった。

治療資格（7）

「えー、これから帰りのホームルームを始めたいのですが、日直である奈三川くんが今日は居ません」この教室の担任である、山久はいった。「ですので、帰りのホームルームは学級委員の柳原さん、頼みます」

はい、と柳原はいい、席を立った。

帰りのホームルームは明日の予定確認、今日の活動報告、そして教師からの話で終わる。

「では、今日はここまで。帰りが早いといって、寄り道はしないように。以上」

山久はそういい、さようならの挨拶をした。皆もそれに続き、挨拶をした。

「午前中に下校なんて、楽でいいよな」

斜め前に居た白坂が話掛けてきた。

今日は修学旅行に関して、職員会議があるらしく、帰りが早くなくていい。

修学旅行まで残り一ヶ月を切っており、準備も進められている。

「まあ、楽なのに変わりは無いね」竹芝は鞆を肩に掛けた。

彼らはゆつくりと、教室から出た。

「奈三川、どうなんだろう」竹芝がいった。

「既に、諦めているかも知れないな」白坂は苦笑した。

「そういえば、治療資格って何歳から受けられるんだ？」竹芝は首を傾げた。

治療資格（8）

「何だ、知らないのか？」白坂は階段を降りた。竹芝もそれに続いて階段を降りた。「確か、小学校卒業したら参加出来る筈だ。俺たちは高二だから参加出来る」

「へえ。要するに中学生からか」竹芝は頷いた。

「まあ、俺には関係ないけどな。竹芝だって、そうだろう？」
当たり前だ、と竹芝は笑った。

彼らは階段を降り、げた箱で靴を履き変えた。

「そういや、修学旅行の日って二月十五日だよな？」

白坂が竹芝に聞いた。

「そうだよと竹芝はいった。

「そうか。まあ、それより奈三川の事だよな。資格取らなきゃふられるなんて、何か悲しいよな」

「仕方がないよ。治療資格無かったら、彼女が幾ら愛した人でも付き合う事が出来ないんだから」

「世の中、厳しいねえ」白坂はいった。

彼らは学校の門から出た。

治療資格（9）

「それじゃ、また明日」

白坂は手を振りながら、自分の家の方向へと歩いていった。

「それじゃ」竹芝も急いで手を振った。

奈三川は机に向かい、頭を抱えた。資格試験の内容が難しすぎるのだ。

過去問を見てみるが、全てが魔法語で書かれており、問題を読むだけでも一苦勞である。

彼はため息をつき、椅子の背もたれにもたれ掛かった。

どう考えても、現時点で合格など夢のまた夢だ。

彼は仕方がないと思い、近くに置いてある携帯電話を手にした。

電池は魔法である。

メモリからある人物を呼び出した。画面には『魔法バカ』と書かれていた。

数秒し、通話がつながりそうな気配があった。

「もしもし」通話がつながり、数秒遅れで返事がきた。

治療資格（10）

「ああ、白坂。今暇か？」

「暇っていうか、今下校途中何だけど。それより、授業サボって良いか？ 山久、怒ってたぞ」

その言葉に、奈三川は唾を飲み込んだ。山久が怒るとどれだけ恐ろしいのか知っていたからだ。

「いや、それより」奈三川は唇をなめた。「白坂って魔法語、読めるよな？」

「読めるは読めるが……」その言葉で、白坂は全てを悟った。「はあ、なるほど。治療資格試験の問題が魔法語で書かれているのか」白坂が笑っているのが、電話越しでも分かった。

「そうなんだよ。それで、教えてもらいたいんだけど、良いかな？」

「構わないが、その代わり条件がある」白坂はいった。

「何だ？」奈三川は首を傾げた。

「必ず、合格しろ。折角教えるんだ。不合格なんて無様な結果は出すなよ」

その言葉に、奈三川は噴き出した。

「……笑い過ぎだ。それで、どうなんだ？」

「ああ、分かっている。やるからには、結果を出す」奈三川は笑いながらいった。

「それじゃ、すぐそちらに向かうよ」

白坂はそういい、通話を切った。

奈三川は笑みを浮かべながら、携帯電話を机に置いた。

治療資格（11）

数分後、玄関のチャイムが鳴った。奈三川は玄関に向かい、ドアを開けた。

外に立っていたのは黒いコートを着た白坂だった。

「おお、よく来てくれたな。上がってくれ」

白坂は軽く会釈しながら、家へと入っていった。

「それで、魔法語が読めないんだって？」白坂は玄関のドアを閉め、鍵をした。

「そうなんだよ。魔法語が読めなきゃ話にならないのに」奈三川は奥の部屋から、茶菓子を持ってきていた。

「何だ、別にいいのに」

「魔法語教えて貰うっていうのに、何にも無しっていうのも失礼かと思って」奈三川は部屋のドアを開けた。

白坂は黒いコートを脱ぎ、玄関に置いた。

「それで、何が分からないんだ？」白坂は奈三川の部屋へと入っていった。

「まあ……全部かな？」

その言葉に、白坂はため息をついた。「なあ、どうしても試験、受けるのか？」

白坂は置いてある茶を啜りながらいった。

治療資格（12）

「当たり前だよ。これに合格しなかったら、つき合えないんだからさ」

奈三川は机の上に散乱しているプリントをまとめ、床に腰を降ろした。

「よく考えてみる。今現在、君は魔法語を全く理解出来ていない。それを理解し、治療資格の勉強をするのにどれだけ掛かる？」

「それが、簡単じゃないのは承知しているよ。でも、やれるところまでやってみようと思う」

「二日間か。一つ思ったんだが理由を素直に話、半年後にある試験でやるっていうのは出来ないのか？」

「俺が嘘付いてたって知ったら、どうなるか分からない」

奈三川は茶菓子を口にし、茶を啜った。

「どうしても、二日後の試験で合格するしか無いのか。全く、嘘を付くから」白坂はため息をついた。

「状況が状況だったんだ。それより、一つ凄い事を思いついたんだけど、聞いてくれるか」

聞こう、と白坂茶を手にしていった。

「白坂が魔法で、俺に答えを教えてくださいればいけるんじゃないのか？」

白坂は口に含んでいた茶を噴き出した。「呼んだ理由はそれか」

「今、思いついた。なあ、これならいけるだろう？ 試験中、白坂が問題の答えを魔法で教えるんだよ」

白坂はポケットからハンカチを取り出し、口を拭った。

治療資格（13）

「その計画、穴がありすぎるぞ」

「何処がだ？」奈三川は首を傾げた。

「確かに、俺はそういう魔法を使える。だが、肝心の問題はどうかやって教えるんだ？」

あつ、と奈三川は声を漏らした。

「お前が俺に資格試験の問題を教えられない限り、こっちだって答えの教えようがない」

それに、と白坂は付け加えた。

「それに、資格試験会場では魔法を無力化にする魔法磁場がある。魔法使用禁止というより、魔法使用不可なんだよ」

「随分、詳しいな」奈三川は頭を掻いた。「そういや、その魔法を無力化にする魔法磁場と、竹芝がいった魔法を無力化にする魔法とどう違うんだ？」

「俺もあまり詳しくないが、魔法磁場はその場に居る時だけ、魔法を無力化にする。だけど、竹芝の言う奴は一度その魔法に掛かったら、その魔法を無力化にしない限り、永遠に魔法を無力化される。」

要は、竹芝の言う奴は範囲に限りが無いんだ。理論上、全世界に散布出来るからな」

ふーん、と奈三川は頷いた。

治療資格（14）

「興味無いなら聞くなよ。それより、早く勉強しないと」

「ああ。というより、何で問題が魔法語で書かれてるのかな」

白坂はその言葉に敢えて反応しなかった。これ以上の雑談は合格を絶望的にさせるだけだと思っていた。

「取り敢えず、基本から教えていかないと駄目だよな？」

「そうしてもらえると助かる」　　「そういい、奈三川はまとめてあるプリントを手にした。

そこには、魔法語の基礎知識が書かれていた。

白坂はそれを取り、魔法語を奈三川に教えた。

「えー、つまりこの文はなんて書かれているんだ？」　奈三川は首を傾げた。

「『私は魔法使いです』だ。いい加減覚えろ」

「私は魔法使いです……か。はあ、もう駄目だ」　奈三川は床に寝そべった。

「現時刻は午後八時か。六時間弱勉強して、成果無しか」　白坂はため息を吐いた。

「問題なんか、旧人類が使ってた『英語』とかでいいのにさ」

「今時、英語何か使っている人居ないんじゃないか？」　白坂は壁に寄り掛かった。

治療資格（15）

「あーもう、駄目だ」

奈三川は激しく頭を描いた。

「そんな事してる暇あるんだったら、単語を一つでも多く覚えろよ」
「そもそも、白坂の教え方がおかしいんだよ。しっかり基本から教えてくれよ」

「うるさいな、時間が無いんだよ」

白坂はプリントを叩いた。

「治療資格試験の勉強も含めたら……」奈三川ははっとした。「そうだ、良いことを思いついた」

「何だ、試験会場の魔法磁場でも無効化にする策でも思いついたか？」

白坂はさほど興味が無く、プリントに目を通していた。

「そんな事じゃ無い。勉強しなくても、点数を二割とる方法だよ」
ふーん、と白坂はプリントに赤ペンで線を引いた。

「試験って、選択問題だろ？ なら、問題が読めなくても、答えが分からなくても二割はいける。まあ、合格ラインには遠く届かないけどさ」

「よく、そんな悪知恵ばかり働くな」

白坂は日の沈む太陽を窓から見上げた。

治療資格（16）

「仕方がないだろ。これぐらいしかもう策が無いんだ」

「残念だけど、それも無理」

何でだ、と奈三川はいった。

「この選択問題、答えて間違った場合、配点分が引かれるんだ」

「どういう意味だ？」奈三川は首を傾げた。

「簡単に言えば、百問ある問題全てに答えて五十問有っていて、五十問間違えていた。その場合はゼロ点だ」

「つまり、問題に答えて間違えたらマイナス点になるのか？」

「そう。お前みたいな奴が居るからな」

「くっそ、雁字搦めじゃないか」奈三川は机を軽く叩いた。

「雁字搦めじゃない。お前にはまだ『真面目に勉強』という行動が出来るんだ」

白坂は立ち上がり、奈三川の肩に手を置いた。

「それじゃあ、俺はもう帰る」白坂はドアノブに手を掛けた。

「え、もう帰るのか？ ずいぶん早いな」

「何時間居たと思ってやがる。それじゃ、頑張れ」

白坂はゆっくりとドアを開け、手を振りながら部屋から出た。

治療資格（17）

玄関のドアの閉まる音が聞こえてから、奈三川は大きなため息を吐いた。

この時点で資格試験合格など、夢のまた夢であった。暫く、壁にもたれてこれからどうすればいいかを考えた。そして暫くして、ある事を思いついた。

「勘で、全部当てればいいんだ」

間違った場合、マイナス点となるが、勘でも間違わなければ、マイナスになる事は無いのだ。

奈三川は早速準備に取り掛かった。

白坂は日の沈んだ寒空の中を、急いで歩いた。夕飯の支度をしていなかったからだ。

どうせ合格出来ないのに、変なことに巻き込まれた……。

白坂はそう思いながら、家へと向かった。

「そういえば……」

白坂はある事に気付き、声を漏らした。

「合格出来なかった場合、彼女になんて説明するんだろう」

少しの間立ち止まり、考えた。だがやがて、考えても無駄だと分かり、考えるのを止めた。

治療資格（18）

それから二日後、奈三川は試験会場へと向かった。

会場はさほど遠く無く、徒歩でも十分と掛からない場所にあった。奈三川は手提げ鞆から証明書類を取り出した。どうやら、これが無いと試験に受けられないらしい。一昨日、白坂から教えてもらい、急遽受け付けを済ましたのだ。

白坂は「やっぱり」と笑いながら教えてくれた。

街を歩いていると、周りにも自分と同じ場所に向かっていている人が確認出来た。その人たちは、向かいながらも試験勉強に勤しんでいる。

彼はそれを見て、笑みを浮かべた。彼には秘策があるからだ。

数分後、予定より早く会場に着いた。これから何をすればいいかわからなかったため、彼は先ほどの人たちについていくことにした。その人たちは、証明書を受け付け嬢に渡し、中へと入っていった。すかさず彼も、かしこまった感じの受け付け嬢に証明書を見せ、中へと入っていった。

試験会場は意外と大きく、詰めれば三百人は入る程だった。彼は左側の席に腰を降ろした。

まだ、試験開始まで余裕がある。彼は手提げ鞆から魔法語の資料を取り出し、それで時間を潰した。

治療資格（19）

数分後、チャイムが鳴り、問題用紙が配られた。奈三川は手提げ鞆をしまい、試験に備えた。

そしてすぐに、解答用紙が配られた。彼はペンの準備をし、『鉛筆』と呼ばれる旧人類が利用していた文房具を机の上で何回か転がした。

そして数分後、試験がチャイムと共に開始された。試験時間は五十分、合格ラインは百点中、八十五点だ。

彼は問題用紙を広げ、解答用紙をその上に置いた。

そして彼は魔法語で書かれた問題文を読み、問題用紙の一部に丸を付け、机の上に置いてある鉛筆を転がした。それが、彼の秘策だった。

彼は以前、本で読んだ内容を思いだし、この策を思いついた。その内容は選択問題の選択肢には、大抵答えとは大きく違っているものが一つはある、という事だった。そのため、彼は最初に答えとして有り得ないものに、印を付けていた。魔法語が少し読めれば、どうってこと無かった。

そして後は鉛筆に四つの番号を書き、それを転がして答えを書くという、運任せだった。

無論、一問でもミスは避けたい。そのため、新人類が営なむ寺に行き、お守り用の鉛筆を買った。

もはや正しい策とはいえないが、今の彼にはそれしか策が無かった。

治療資格（20）

午前十時半。白坂は携帯電話の着信音で目を覚ました。目覚め眼を擦り、彼は携帯電話の画面を見た。竹芝からの着信だった。

恐らく奈三川の事だろうと思い、彼は通話ボタンを押し、携帯電話を耳に当てた。

「もしもし」彼は大欠伸をしながら言った。

「ああ、御免。まだ、寝てたかな？」電話越しでも申し訳なさそうにしているのが分かった。

「折角の休日だ。寝ない手は無い」

「そりゃあ、白坂に取ってはそうだと思うけど。それで、奈三川のことだけどさ」

やっぱり、と彼は唇をなめた。

「今丁度、試験が終わったみたいなんだ。今から一緒に、迎えに行かないか？」

「行っても、無駄だと思うが？」彼は布団から出た。

「まあまあ、そう言わずにさ。どうだ？」

「まあ……面白そうだから行こうかな。それで、今からか？」

「うん。今から、白坂の家に行くよ。それまでに、準備しといてくれ」

そういい、竹芝は通話を切った。

治療資格（21）

数分後、白坂は身支度を済ませてから家を出た。彼は黒いコート身を包み、外で待機していた。

それから数分後、竹芝がゆっくりと歩いているのが見えた。

「それじゃあ、行こうか」彼は素晴らしい、竹芝と共に試験会場に向かった。

歩いてから暫く経ち、竹芝が口を開いた。

「奈三川、合格したかな？」

「さあ？ 今は誰も分からないんじゃないか？」

「え、何で？」竹芝は首を傾げた。

「いや、だってさ……」白坂はそう言い掛けて止めた。もう試験会場に着いたからだだった。

彼は周りを見回した。パツと見では、奈三川の姿は確認出来なかった。

「あれ、迎えに行くって連絡したのか？」

その言葉に竹芝は首を振った。

治療資格（22）

「何だよ、それじゃあ先に帰ったのかも知れないな」

そういい、白坂は後ろに振り向いた。周りでは試験を終えた人たちが楽しそうに歩いていた。

もう一度周りを見回すが、奈三川の姿は無かった。

「そうかも知れないけど……」竹芝は周りを見回した。「取りあえず試験会場に行かない？」

「俺たちが行くのは違反なんじゃ……」白坂はそう言い掛けて、言葉を止めた。

試験会場の出入口に落ち込んでいる奈三川が歩いていた。

「何だ、まだ居るじゃないか」白坂はそういい、奈三川の方に向かって歩いた。

距離が縮まった所で、奈三川が彼の存在に気付き、顔を上げた。

「奈三川、どうだった？」

少し離れた所から竹芝は話しかけた。

暫くの間、奈三川は声を発しなかった。しかし、数秒後、奈三川は重い唇をひらいた。

「試験結果、二週間後だって……さ」

治療資格（23）

「どうするんだよ、会うの来週なんだぞ？」

奈三川は竹芝に近づき、襟首を掴み、激しく左右に振った。

「試験結果が二週間後って知らなかったのか？」白坂はいった。

「何だよ、お前は知ってたのかよ」奈三川は襟首を掴むのを止め、彼を睨んだ。

「常識、何だと思ってたよ」

「そんなの、常識じゃ無いよ」竹芝は激しく咳込んだ。何故襟首を掴まれたか理解出来なかった。

「あー、もう。そんな事言っても仕方がない。取りあえず、彼女にどうやって話すか考えないと……」

奈三川はその場に座り込んだ。周りの試験を終えた人たちが、不思議そうに見ていた。

「やっぱり、素直に話した方がいいんじゃない？」

「治療資格無いのをバラすのか？ 冗談じゃない。絶対に振られるだろ」

それから暫く、その場で『彼女にどう話すか？』の話し合いをしていた。

様々な意見を出し合った結果、『治療資格持ってくるの忘れた』と会った時に言い、何とか結果が出るまで保たせる、という策になった。

その会うときに、白坂、竹芝が同席する事になった。

治療資格（24）

当日、白坂は何で俺まで、と思いながら身支度を済ませ、家を出た。

集合場所は学校であり、それから病院に向かうらしい。

暫く歩き、学校の校舎が見えた。休日とあり、門は閉まっていたが、門の前に人影が確認出来た。

少し近付き、もう一度門の前を見てみると、そこには私服の竹芝が立っていた。彼の存在に気付いている様子は無い。彼は故意に足音を大きくし、竹芝に近付いた。

すると竹芝は彼の存在に気付き、手を振った。

「よお、随分早いな」彼も手を振った。

「ああ、何だか緊張しちゃってさ」竹芝は照れくさくいった。

「何でお前が緊張するんだ？」

「いや、だって可愛いんだろう？ 美人に会うのに緊張しない訳がないよ」

竹芝はごまかす事無くいった。実際、彼も彼女には興味が有った。奈三川が人目惚れしたのだから、相当なのだろう、と考えていた。

治療資格（25）

それから、彼らは無言でその場に立っていた。

暫くし、竹芝は腕に付けている時計を見おろした。

「奈三川、遅くない？」

彼は横から竹芝の時計を覗き込んだ。現時刻は集合時間を大きく過ぎていた。

「あいつ、時間にルーズ何だ。何時も通りだ」彼は慣れた口調で言った。

「彼女に会う日も？」

竹芝は周りを見回した。そこには、二、三人の子供が無邪気に遊んでいる以外、確認出来なかった。

「集合時間、場所を間違えたか、先に行ったか」そして彼は、又はと付け加えた。「又は、怖くて逃げ出した、とかな」彼は微笑みながらいった。

仕方が無く、彼らはその無邪気に遊んでいる子供、を見ることにした。

その子供達は、追いかけてこらしきものをしていた。

だが暫くし、遊びが変わったらしく、一人の子供が近くに落ちている石を拾った。

「ねえねえ、これを魔法で砕いてみようよ」

三人の中でまとめ役らしき子供が言った。

それに対し二人の子供は「うん」と高い声で返事をした。

「じゃあ、僕からね」

まとめ役らしき子が、石を手のひらに置き、石を一、二回軽く叩いた。すると石が手のひらで砕け散った。

彼女（1）

「次は僕ねー！」

先ほどの魔法にはコメントせず、他の子供が近くから石を拾った。そして同じように、手のひらに石を置き、魔法で手を使わず、それを砕いた。

「次はお前ねー！」

魔法で石を砕いた子供たちがひ弱そうな子供を指さした。

「ああそうだ旧人類だから魔法使えないんだあ」

一人の子供がそういった。その言葉に、上の空だった竹芝が子供を見つめた。

今の時代、旧人類が表で生きていけるわけがない。恐らくハーフなのだろう、と彼は考えていた。

だがハーフとはいえ、旧人類の血がまざっているのには変わり無い。為まともな生活など出来るわけがない。

ハーフも、旧人類と見なされ撲滅されたからだ。

「僕だって使えるもん！」

ひ弱そうな子供が泣きながら叫んだ。

彼女(2)

「きゅうじんるい！ きゅうじんるーい！」

二人の子供が、同時にいった。

「ぼくだって使えるもん！」

冬の乾いた空気の中、ひ弱そうな子供は泣きながら叫んだ。

二人の子は「きゅうじんるーい！ きゅうじんるーい！」と叫びながら、その場から走り去った。

ひ弱そうな子も泣きながら、その場を後にした。竹芝は悲しげな目をして、それを見ていた。

「奈三川、遅いな……」

彼は少し苛立ちながら、誰とも無く呟いた。

竹芝は時計を見た。あれから二十分が経っているが、奈三川が来る心配がない。

「あいつ、会う直前に臆病風にでも吹かれたか」白坂はポケットから携帯電話を取り出した。

白坂はメモリから『奈三川』と書かれた覧をクリックし、携帯電話を耳に当てた。

彼女（3）

別に、旧人類やハーフが表に出ているのは珍しくはあるが、おかしくは無いのだ。

撲滅させたのは一部の新人類だけであり、今更旧人類を殺そうとする人は先ず居ないはずなのだ。

彼は携帯電話を耳に当てながら、そう思った。間もなく、通話がつながりそうな気配があった。

しかし、通話がつながる前に彼は通話を中止した。目的の相手が目の前に表れたからだ。

「すまんすまん。遅れてしまった」

新品の黒いスーツに身を包んだ奈三川が謝りながら走ってきた。

「よお、遅かったな」

彼は軽く手を挙げて言った。それに続き、竹芝も同じ様な台詞をいった。

「いやあ、すまん。身支度に時間掛けすぎた」

彼は目の前にいる奈三川の黒いスーツに目をやった。黒いシートは新品にも関わらず、一部の場所に土やら砂が付着していた。時間掛けてこれか。彼はそう思った。

彼女（４）

「さあ、行こうぜ」奈三川はそういい歩き始めた。彼らもそれに続き、病院へと向かった。

暫く歩き続け、彼が口を開けた。「なあ、彼女の名前って何なんだ？」

「それは見てからの楽しみだ」奈三川は振り向かず、いった。

「何だよ、勿体ぶるなよ」

彼は苛立ちを抑えながらいった。

「良いだろ、別にすぐ会うんだから」奈三川は病院とは違う方向に向かった。

「どうしたの？」竹芝が首を傾げた。

「いやあ、果物ぐらい買っていった方が良いと思ってね。白坂達は先に行ってていいよ」

「そんな事言ったって道分らないし……」

彼がそう言うのと、竹芝が後ろから肩をつつき、僕が分かる。といった。

仕方が無く、彼は竹芝に着いていく事にした。

「先に行くが、逃げるなよ」

「逃げるわけが無い。それより、先に彼女に会うなよ」奈三川は手を振りながら暗闇に消えていった。

彼女の事知らないのに会えるわけ無いだろ、と彼は呟きながら、竹芝に着いていった。

暫く歩き、病院に着いた。病院はまだ新しく、外装が綺麗であり、白く輝いていた。

中に入り、彼らは待合い所に座り、奈三川が来るのを待っていた。病院は広く、薬品の臭いなど全くしなかった。

彼女(5)

恐らく、治療は魔法で済ませているのだろう。現在、そういう病院の方が多いのだ。

広い待合い所の片隅に、子供でも楽しめる娯楽場が有った。

奈三川がまだ来ていなかった為、竹芝はそこに向かい、一つの本を手にした。

その本の表紙一人の男性が青い地球の上に立っている絵と『世界を救った英雄』とかかれていた。

竹芝は小学生の様な透き通った瞳でその本を開いた。

世界を救った英雄といえば、『ベスウェル』しか居ない。

彼は数十年前、世界を滅ぼそうとした俗にいう『魔物』から一人で世界を救ったのだ。

彼の経歴を知っている者は誰も居ない。無論、親族を確認されてはいない。

そしてその『ベスウェル』は数年前、突然行方不明となっている。行方不明になったのが、旧人類が殺された付近だったので、一部では『旧人類が殺された事に責任を感じた』から失踪したのだ、という噂が出てきている。

無論、真実を知っている者は誰も居ないのだ。

暫く、彼は椅子に座りながら目の前に置いてある壁掛け時計を見ていた。此処に来てから既に数十分が経過している。竹芝も、様々な本を読みながら時間を潰していた。

彼女（6）

今、奈三川が何処に居るのか知りたい為、彼は通話をしようと椅子から腰を上げた。

「竹芝、奈三川に電話してくる。少し外に出るな」
分かった、竹芝は本を読みながら受け答えた。

彼は外へと通じる大きなドアを開け、ポケットから携帯を取り出した。

画面を見て、ボタンを押そうとした時、前に大きな籠を持ち、黒いスーツを着た人物が現れた。

「よお、どうしたんだ？」奈三川だった。

又か、と彼は携帯をポケットにしまった。

「おまえが遅いから、連絡しようとしたんだよ」

「そんなに、遅かったか？」奈三川は大きな籠を彼に持たせ、大きなドアに手を掛けた。

「にしても最近、通話しようとした相手が通話する前に現れるんだよな」彼は大きな籠を両手で持ちながらいった。

「ああ、僕もだよ。竹芝に通話しようとしたら何時も竹芝が目の前に現れる」

何かの呪いかな、彼らは笑った。

彼女（7）

奈三川はドアを開け、彼から籠を受け取った。

「そーいやこの籠、中身何だ？」

彼は籠を見て首を傾げた。それには白い布がかぶさっており、中身が分からなかった。

「魔法で作ったフルーツの詰め合わせだ。これ、高かったんだぞ。幾らだと思う？」

「十マホ」彼は興味が無かった為、適当に答えた。

「何だよマホって、そんなのは……」

病院に入り、奈三川は喋るのを中断した。周りの客や受付の女性があからさまな軽蔑行為を示していたからだ。恐らく、騒がしかったのだろう。

「うん、じゃあ、行こうか」奈三川はさほど気にせず、受付に向かった。

竹芝も本棚に本を戻し、奈三川に着いていった。

奈三川と受付の女性は二言位話、奈三川は左にある階段に向かった。

会話は無しか。彼らはそう思い、奈三川に着いていった。

彼女（8）

奈三川は三階で足を止め、方向転換をし、長く広い廊下を歩き始めた。

この階に彼女が居るのか、と彼は思った。

それから暫く歩いた時、奈三川はああ、と奇声を発し、フルーツ箆を片手で持ち、空いている方の手で腹押さえた。

「ん、どうした？」彼は首を傾げた。

「ふ、腹痛が……。すまん、すぐに戻るから先に行ってくれ」

奈三川はフルーツ箆を呆然としていた竹芝に渡し、その場を去ろうとした。

「おい、彼女何処にいるか分からないじゃ……」

奈三川はそんな事は分かっている、という表情を見せ「彼女は三〇五号室だ」といった。

彼女（9）

「それで、どうしろってんだ？」

彼は頭を掻いた。

「取り敢えず、行かない？ 待ってても仕方がないよ」

そうか、と彼は頷き、竹芝とともに歩いた。

数分後、目的の場所に着いた。未だに奈三川は戻って来ない。暫く号室の前で待っていたが、現れる気配が無かったので、渋々号室のドアを開ける事にした。

「……どちらが開ける？」当然、その話が出てきた。

どうせ竹芝が開ける筈が無い。これ以上時間を無駄にたく無かつたので、彼が自ら開ける事にした。

ゆっくりとドアノブに手を掛ける。そして数秒の間をあげ、彼はドアノブを下にさげ、ドアを静かに押した。

ドアをあけるとその中には、甘い香水の匂いが漂っていた。

室内を良く見ると、一つの小さなベッドの上に、黒髪で長髪な女性が座って窓の外を見ていた。

彼女が、竹芝の……？ 彼らは互いに顔をみやった。後ろ姿でも

彼女が美しいというのは充分想像できた。これ程美しい女性が、奈三川と付き合うのか？ というのが彼らの本音だった。

それから、人形の世界の様な時間が流れた。誰も動けず、話せない。ただ、その場に存在している、そんな時間だ。

しかし、不意に彼女がこちらの存在に気付いたのか、振り返り、彼らの顔を交互に見た。

そして、彼女の顔を見た。

後ろ姿から想像したのを超えている程、美人だった。

海のように透けた綺麗な瞳。そして綺麗な白色の肌。更に、体型は痩せている、女性なら誰もが欲しがるスタイルだった。

「誰……、ですか？」

少し怯えた、高く美しい声だった。これを、美声というのか、と彼は改めて思う。

「あ、いえ、別に悪い人ってわけでは……」

竹芝は困った様に、苦笑を浮かべ、手を左右に振った。

「ああ、俺たちは奈三川の友人だよ。奈三川の事は……知ってるよね？」

彼は竹芝に救済の手を差し伸べた。竹芝は助かった、というように胸を撫で下ろした。

「あら、奈三川さんの？」 彼女は首を傾げ、此が奈三川さんの友人なんだ、という様に再度、彼らの姿を見た。

彼女(10)

「それで、あの……奈三川さんは？」

「え、ああ。そういえば……。ゴメン、ちょっと捜してくる」

実際、捜す気は無かったが、早くこの場から抜け出したいが為の口実だった。

「捜すって、一人で？ 待って、僕も……」

室内から抜け出そうとする白坂の腕を、竹芝が掴んだ。

「いや、お前は此処にいる。捜すのは俺だけで充分だ」

彼は竹芝の事を突き返し、彼は室内から飛び出した。室内からは、慌ただしい足音が響いていた。

仕方が無く竹芝は、フルーツ籠を近くの棚に置いた。

「まったく、何で逃げるかな……」

彼は奈三川の腕を掴みながら廊下を静かに歩いた。

結局、奈三川は待合い所で時間を潰していた。奈三川を見つけると、抵抗せず、素直に着いてきた。

「いや、だってさあ……。それより、どうだった？ 可愛いだろ？」

彼女（11）

「それより、早く会いに言って事情話せよな」彼はため息まじりに言った。

「全く、気が重いよ。嘘なんか付かなきゃ良かった」

「そんな事言ったって……」

そんな話しをしている内、三〇五号室に着いた。今度は手慣れた手付きで、ドアを開けた。

相変わらず、中は静まりかえっていた。彼女は窓の外を見ており、竹芝は壁に寄り掛かっていた。

しかし彼女はドアを開けてすぐに振り返った。「あら、奈三川さん」

「あ、ああ。元気だった？」奈三川は若干困り気味に言った。

「はい、元気です。それで、資格証の事なんですが……」

すると奈三川は服のポケットなどをパンパンと叩き始めた。演技が下手だな、と彼は思った。

「あ、ごめん。資格証、忘れちゃったみたい……。また来週で良いかな？」

「何で……」彼女は息を呑んだ。「何で、嘘を付くんですか？」

「嘘？ 何の……」奈三川が言い終わる前に、彼女が突っ込んだ。

「さっき、竹芝さんに聞きました。本当は資格など持っていない、と」

彼女（12）

「なっ……」奈三川は憤怒の形相に変え、竹芝の襟首を掴んだ。「何してんだよ！ お前のせいで……」

彼はそれを見てられず、奈三川を止めようとした。「落ち着け、奈三川！」

掴んでいる手を離そうとするが、簡単には離れなかった。

「……止めて下さい」

彼女は先ほどの様子からは想像出来ない程、低く怒りこもった声だった。

「いや、でも……」

そういうつつも、奈三川は手を離れた。竹芝は激しく咳込んだ。

「あの、奈三川さんと二人っきりで話がしたので……」

すると彼は言いたい事を察した様に、「分かった」といい、竹芝の腕を掴み、部屋を後にした。

「これから奈三川、どうなるんだろ」竹芝は不安そうに言った。

「さあ、ね」彼は首を傾げた。

「僕、余計な事しちゃったかな？」

竹芝は壁に寄り掛かった。

「それは無い。結局、何れはバレることだ。その日を早めたただけだ」
そういうと、彼も壁に寄り掛かった。

修学旅行（1）

結局、彼女は「資格なんて何時でも取れる」といい、奈三川の嘘を許した。

それまで、奈三川を愛しているのか、と彼は思った。

そして一週間後、試験結果が届いた。奈三川は見事、合格していた。

こうして、奈三川は笑顔で彼女に会いに行った。

結局、彼女の名前は分からずじまいなので、彼らにとって後味の良く無いものを残した。

「バレンタイン！」小さな寒い教室の中で、一人の男子生徒がハート型のチョコを持ちながら叫んだ。青い上下のジャージに少し長めの髪、奈三川だ。

「分かった、分かったから。朝から何回目だ」

白坂は机の上で鞆に荷物を積みながら興味なさそうに言った。

「今日で、50回は聞いたよ」近くの席で竹芝が言った。

「何だよ、妬いてんの？ 妬いてるのか」彼はチョコを白坂の額に突きつけた。

「うるさいな」白坂は手のひらでチョコを叩いた。「お前には彼女が居るんだから、チョコ貰えて当たり前だろうが」

修学旅行（2）

「君たちにはその彼女が居ないんだ。どうだ、羨ましいか？」

「馬鹿馬鹿しい」白坂は鞆を肩に掛け、席を立った。「じゃあ竹芝、行こうか」

「何だよ、それ。酷いなあ」奈三川がそういうと同時に、竹芝が席から立った。

白坂は奈三川を指さした。「それより、明日は修学旅行だろ？折角早く帰れるんだ、家に帰って準備でもしろよ」

「何だよ、修学旅行ぐらいでテンション上がっちゃって」

「一番楽しみにしてたの、お前だろ」白坂はそういい、教室のドアを重そうに開け、竹芝と共に出ていった。

「テンション、上がってねえよ」

誰も居ない教室の中で、奈三川は呟いた。静かな教室の中では、外の騒がしい声が一層大きく聞こえた。

「そういえば、宿泊場所って何処だっけか？」

校舎内の階段を降りてる時、白坂が竹芝が聞いた。

ああ、それは、と竹芝はその場所の説明をした。

その場所はこの場所から車で四時間の場所にあるホテルだった。

修学旅行（3）

「そうか。随分、詳しいな」白坂は何気なく呟いた。

「そんな事はないよ。しおりを見れば分かる事だし」

「まあ、それもそうか」

白坂は笑い、信号の前で立ち止まった。

「それより、何で冬の寒い時期に修学旅行なんか……」

「まあ、最近はずっと寒いしね。空がどうのこうのとか、前テレビでやってたよ」

テレビの内容によると、近年、空が何物かに塞がれており、太陽の光が地球に届いていないらしい。その為、現在は魔法で太陽の光を補っている。冬は冬並みの寒さを表現し、夏は夏並みの暑さを表現している。なので、人々はさほど違和感が無いらしい。

「まあ、俺たちが心配する事じゃないよな。魔法があればやっていける」

「そうかな？」竹芝はそういい、青になった信号を渡った。

「ん？ それ、どういう意味だ？」竹芝に続き、彼も渡り始めた。

「世の中、魔法に頼り過ぎている」

修学旅行（4）

「……確かに、そうかも知れないが、それがどうかしたのか？」

少し間をあげ、彼は言った。

「もし魔法が無くなったらどうする？　僕たちは生きていけるの？」

急に何を言い出すんだ、と彼は思った。図書館での一件以来、竹芝は何処かおかしかった。

「生きていけるだろ」彼は左右に道がわかる場所で、立ち止まった。「旧人類は……いや、昔は魔法無しでも苦無く生活していた筈だ。だから魔法が無くても生きていける。ただ……」

「今まで通りの生活は出来ないし、魔法によって支えられ、生きている人は居きられない、だよな」

彼が言う前に、竹芝は言おうとしていた事を全て話した。彼は一瞬、目を細めて竹芝の眼を見た。その眼は何時もの竹芝であったが、何処かが違っていた。それはまるで『俺が世界を変えてやる』と言わんばかりの眼だった。

「それで、何でこんな話を？」彼は思い切って、その疑問を投げ掛けた。

「ああ、いや。もし魔法が無くなっても人は生きていけるのかな、と思ったただだよ。ほら、最近物騒だし」

修学旅行（5）

「ああ、そういう事か」彼は納得出来なかったが、仕方が無くそう答えた。

「それじゃあ、僕の家はこっちだから、さようなら」竹芝は手を大きく振りながら、左の道へ歩いていった。

「あ、ああ。それじゃあ」彼も手を大きく振り、自分の家へと向かっていった。

修学旅行当日、白坂は何時もより少し早く家を出、学校へと向かった。

登校中、彼はしおりを見ていた。そこには必要な持ち物、日にち別の予定が書かれていた。

今日はバスに乗り、目的地へと向かう。そこで暫くの自由時間、その後夕食をし、共同体育館でのレクらしい。この予定で、一体何を学ぼうというのか、と彼は思った。

彼は肩に掛けていた大きいバックにしおりをしまい、学校へと向かった。

数分後、彼は学校に着いた。黒い長袖の上着に同色のズボンを穿いていたが冬とあり、寒かった。

「よお、白坂。随分重そうだな」緑色の服を着た奈三川が荷物を何も持たず、手を振りながらバスの近くから向かってきた。

「何だ、手ぶらか？ 何をしにきてんだよ」

「いや、バスに荷物を置いてきたんだよ。お前も置いてきたらどうだ？」

「結局、荷物多いんじゃないか」

修学旅行（6）

彼は荷物置き場に荷物をしまい、しおりに書いてあった座席に腰を降ろした。窓側の席で、隣には同じクラスだが、喋った事の無い女子生徒が座っていた。

彼は窓の外を見て、バスが出発するまで時間を潰していた。窓の外には校舎が見えていた。

暫くし、バスガイドの声と共にバスはゆっくりと動きだした。

バスガイドは目的地に関する情報を詳しく話していた。だが、見た感じそれを真面目に聞いている生徒は少ない。彼も聞く気が無かったので、窓に寄り掛かりながら眼を閉じ、寝ようとした。

バスに揺られながら、彼は眼を覚ました。どうやら、駐車場に着いたらしい。窓の外には車が並んでいた。

彼は目覚め眼を擦り、車内を見回す。付近の生徒は疲れたのか、眠っていた。さすがに車で数時間は堪えるのだろう。それから暫くし、バスはある位置で止まった。バスガイドの声で皆は眼を覚まし、バスからゆっくりと降りていった。

外では久しぶりの綺麗な外の空気が眼の前に広がっていた。彼は大きく深呼吸をし、集会場へと向かった。

バスの荷物は係員が運んでくれるらしい。

修学旅行（7）

集会場ではこれといって面白い話もなく、ホテルの係員が注意事項を告げたり、校長の長い話があっただけだった。式が終わり、集会場から出ようとした時、後ろから竹芝が話掛けてきた。

「ねえ、これからどうする？」

「どうするって……。これから、自由時間だろ？ のんびり過ごすけど」

「それならさ、温泉に行かない？ 前に調べたけど、結構大きいらしいよ。魔法を使ってない温泉とか」

最近では、殆どの温泉が魔法を使って沸いている。魔法を為、様々な健康に良い効果がある。その状況下で、敢えて魔法を使わないというのは、経営者のプライドが感じられた。

「まあ、それもいい……かな」彼は面白そうだ、とその温泉に入ることにした。

彼らはしおりに示されていた部屋に向かっていた。どうやら部屋は、竹芝や奈三川たちと同じらしい。とはいっても、元々人数が少なく、部屋数も少ない。奇跡や偶然などではない、必然だった。

部屋に着き、彼はドアノブに手を掛けた。すると何故か、数週間前の病院での事を思い出した。

彼は笑いつつ、静かにドアを開けた。室内は意外と広く、一人二畳ぐらいのスペース配分だった。室内を見回すが、そこには誰もいなかった。

修学旅行（8）

彼らは荷物から入浴用具を取り出し、部屋から出た。

この部屋は四階にあり、入浴施設は三階にあり、女子等の部屋は二階にあるらしい。どうやら、階段などでの異性とのすれ違いを防ぐためらしい。

歩いてく内に、周りには男子生徒が増えていった。しかし、入浴しようとしている人は居なかった。

三階に着き、彼らは入浴施設に入っていった。着替えの場所は大きく、人数分より箱が多く置いてあった。

入浴用具から石鹸などを取り出し、衣服を箱に入れ、タオルを腰に巻いた。

ガラス扉を開け、彼らは入浴施設に入った。周りは石垣で囲まれており、女子風呂との境目にも石垣があった。室内の真ん中に、円上の大浴場があった。

彼らは周りに置いてあるシャワーで体を軽く洗い、大浴場に入った。周りには二、三名の男子生徒がいた。

「そういえばさ、白坂って将来の夢とかってある？」
湯を肩まで浸かった竹芝が突然に聞いてきた。

「え、俺の？ 俺は特に何もない。強いていうなら、普通の生活がしたい、かな」

「そっか」竹芝は頷いた。「でも、白坂は既に魔法が平均以上に使えるから、普通じゃ無いのかもね」

「俺は魔法を使い、武器を具現化させるのが得意なだけだ」

修学旅行（9）

彼は素晴らしい、笑った。

「それで」彼は竹芝の目を見た。「それで、竹芝の将来の夢は何なんだ？」

彼がそういうと、竹芝は視線をそらし湯の中をのぞき込んだ。「僕は将来なんて考えない様になっている」

えっ？ と彼が首を傾げると、竹芝は続けた。

「だって今から十秒後に隕石が落ちてきて死ぬかもしれない。それなのに将来を考えたって意味がないよ」

「いや」彼は手を竹芝に向け、暫く沈黙した。「十秒経ったが、何も起こらない」

「例えばよ、それは」竹芝は笑いながら手で湯をすくった。「皆、明日が当然訪れるものだと思いついてる。そうじゃないのに、人は……」竹芝は掬った水を手で握った。隙間から、湯がゆっくりと垂れた。

「いやいや、待て。又、厄介な話になる。せっかくの旅行なんだ、そういうのは無しで楽しもうぜ」

「……そうだね、ごめん。楽しもう。最後の修学旅行なんだから」

彼は一瞬首を傾げたが、仕方が無く頷いた。

「ああ、そうだな」

修学旅行（10）

暫く湯に浸かっていると、背後から騒がしい物音がした。どうやら、他の男子生徒が来たらしい。

騒がしいとゆっくりしてられないので、彼らは温泉から出た。

それから夕食を食べ、共同体育館でレクをしたが、その時何を食べたのか、何をしたのか、竹芝の事が気になって覚えていない。興味が無かった。

彼が部屋に戻った時、部屋には竹芝と他の男子生徒二名が敷いた布団の上に座っていた。

奈三川たちはどうしたのか、と男子生徒に聞くと、浴場で女子風呂覗こうとしたのがばれ、今日は教師と寝るらしい、と返ってきた。覗きか。何を考えているんだ、と彼は思いながら、布団に入った。それから特に何も無く、彼は布団の中で眠りについた。

魔法が無くなる日（1）

朝、彼は物音で目が覚めた。上半身を起こそうと周りを見た時、彼は息を殺した。

そこには丁度、部屋を出ようとしている竹芝の姿があった。

竹芝の顔は何故か険しい顔をしていた。

竹芝は静かにドアを開け、静かにドアを閉めた。足音が消えてから彼は布団から出た。

竹芝は何をしに行くのか？ 彼は首を傾げた。

少し追ってみよう、と彼も部屋から出た。それは決して面白半分とかでは無かった。

明け方なのか、廊下は静まり返っていた。彼は足音をたてぬ様、すり足で階段を降りていった。

一階に着き、彼は玄関に向かった。そこに、竹芝の姿は無かった。恐らくもう外に出たのだろう、と彼は思い、外に出た。

外には白い霧が出ていた。目を細め、前を見た。おぼろ気に竹芝の姿が見えた。

バレぬよう、彼は道の端を歩き、竹芝のことを追った。

魔法が無くなる日（2）

暫く追っていると、『飛行場』の看板が見えた。

飛行場で何をしようというのか、彼は考えを巡らせた。しかし、答えは分からなかった。

竹芝は飛行場にある飛行機に乗った。魔法が動力じゃ無い、古いタイプで、小さい飛行機だ。

彼は竹芝を追うため、その飛行機に乗り込んだ。

乗った直後、入り口が閉まった。彼は目の前にある扉を開けようとドアノブに手を掛けた。その時だった。飛行機が揺れ始め、彼は腰を壁にぶつけた。

壁に寄り掛かりながら彼は立とうとした。その時、目の前の扉が開いた。

「白坂……」扉の奥に居たのは竹芝だった。

「竹芝？ これは一体……」

竹芝の居る方に向かおうと足を踏み出した時、竹芝はポケットから何かを出し、それを彼に向けた。

「まさか此処まで来るとは……」向けていた物。それは銃だった。

魔法が無くなる日（3）

「なっ……」彼を目を大きく見開いた。「何やってんだよ、お前……」

「計画の為なんだ。許してくれ」竹芝は引き金に指を掛け、発砲した。

弾は近くの壁に当たった。

「冗談なんかじゃ無いさ。此を見ろ」

竹芝は目の前にある扉を開けた。そこには、大きい黄色の袋があった。

「魔法を無力化にする魔法の完成系である粉だ。これを使えば全世界の魔法が無力化になる」

「お前……！」彼は竹芝のことを睨んだ。「何で……」

「何でこんな事をするかって？ それは僕がハーフだからだ」

それを聞き、彼ははっとした。思い返すと竹芝はやけにハーフや旧人類の話を嫌っていた。そういう事だったのか。彼は理解した。

「だから魔法を使うのが苦手だった。だけど、それも今日で終わる」

「こんな事をしてどうなる。それで誰かが救われるのか！」

「僕が救われる。他の、ハーフの人も」彼は扉に手を掛けた。

魔法が無くなる日（4）

「だが、それで幾つかの人が死ぬ。魔法によって支えられている人が」

彼は奈三川の彼女を思い出した。

「それでも、良いんだ」

「ただの自己満足で……」彼は拳に力をいれた。だが、何も起こらない。

「無駄だよ。この空間は既に魔法が使えなくなっている。量を調節すれば、簡単な事だよ」

竹芝は中に入り、扉を閉めた。彼は立ち上がり、その扉を叩いた。

どのぐらいの時間が経ったのか、どのぐらいの高度に居るのか分からない。

彼は壁に寄り掛かり、時が過ぎるのを待った。

恐らく、一定の高度に達した後その魔法を無力化にする粉を散布するのだろう。地上でも可能だが、少しでも成功率を上げたかったのだろう。

暫くし、奥の扉から騒がしい音が聞こえるようになった。

そして勢いよく扉が開き、竹芝はある一点を見つめていた。

魔法が無くなる日（5）

「しまった、燃料が……」

竹芝は思わず、手に持っていた銃をその場に落とした。

どうやら先ほどの発砲のせいで燃料タンクに穴が開いたらしい。このサイズならすぐ燃料が尽きるはずだ。

「くそ、こうなったら……」

竹芝は扉を開けたまま、黄色い袋に手を掛けた。この高度から粉を散布するらしい。

彼は落ちている銃を拾い、銃口を竹芝に向けた。

「魔法を無力化にされ、人類が死に追いやられるぐらいなら、ここでお前を終わらせる」

「そんな事をしていいのか？ 生きて帰れなくなるぞ」

「それは、元々だろうが……」 彼が引き金に手を掛けた時だった。飛行機が激しく左右に傾いた。

「しまった、エンジントラブルか！」

竹芝は必死に黄色の袋を開けようとしていた。しかしそうはさせまいと、壁に体を打ちながらも彼は銃口を竹芝に向け、引き金をひいた。

竹芝には当たらなかったが、黄色い袋に直撃し、中の粉が出始めた。

「この……馬鹿野郎が！」 彼はもう一度竹芝に銃口を向けた。

しかしその直後、飛行機は大きくバランスを崩し、墜落していった。

始まり(1)

広い草むらで、竹芝は目を覚ました。上半身を起こし、周りを見渡した。

飛行機の残骸が散乱していた。一瞬、激しい頭痛がし、頭をおさえた。

何故、自分が此処に居るのか理解できなかった。あの高度から墜落し、無事で済まされる訳がない。

それに。彼は自分の服をみた。傷一つついてなく、新品のようだった。

そういえば、ともう一度周りを見渡すが、白坂の姿は無かった。全ては夢だったのか？ 脳裏にその考えが浮かんだ。

しかし、そしたら何故飛行機が墜落しているのか。

取りあえず周りを探索しようと、立ち上がった時だった。後ろから声がした。

「目、覚めたか？」

振り返るとそこには見たの事のない黒服の中年男性が立っていた。

「……貴男は？」

「たく……責任、取って貰うぞ」

中年男性は近付きながらそういった。

始まり(2)

「責任……？」彼は首を傾げた。

「お前のせいで、俺の計画が台無しになったんだよ。協力、してもらうからな」

「計画……？」再度、彼は首を傾げた。

「それは教えられないねえ。言っておくが、お前に拒否権は無い。拒否したって、魔法で無理矢理にでも協力させる」中年男性は平然と言った。

「大体、僕がなにをしたんだ？」

中年男性の話を聞き、魔法無力化の件は失敗したのか、と彼は落ち込んだ。しかし、その他に何かした記憶は彼になく、そう聞いた。

「ああ？ 何とぼけてやがる。お前、魔法を無力化させただろ？」

「え？」彼は目を細めた。

「何だ、都合よく記憶喪失かい？」

「いや……」状況が理解出来ず、頭を抱えた。「じゃあ、アンタは何で魔法を使えるんだ？ さっき、魔法使って無理矢理にでもって言ってただろ」

「さあ、何でだろうねえ。強いていうなら英雄だからさ」

「英雄？」

「俺は過去に世界を救った英雄、ベスウェルだ」

始まり(3)

ベスウエル……。言うまでもない、世界を救った英雄だ。

しかし、その英雄が何故こんな所に？　そして何をしようとしているのか？

様々な考えが頭をよぎる。しかし……。

「しかし、英雄だから魔法を使えるなんて意味が分からない話だ」

「まだ、言える話じゃ無いんだよ。それで、どうする。協力するか
い？」

「最初っから選択肢は無いも当然だろ」彼はため息を吐いた。

「協力する、という意味だと受け取ろう。それで……」

ベスウエルは何か知りたそうな目をし、コチラを見つめていた。

名を知りたいのだろうと「僕の名は竹芝だ」と言おうとした。だが、その前にベスウエルは言った。

「今日から君の名は『er ti』だ。本名など、関係なしにだ」

「『エルティ』……？　意味は？」

「君は記念すべき一人目の協力者だ」そういうと、ベスウエルは歩き始めた。

何処に行くんだ？　と聞くと、「拠点にだよ」と返事がきた。

彼がベスウエルだという証拠は無い。だが少なからず、強力な魔法使いであることには変わり無い。生きて行くには彼に着いていくしかないのだ。

彼はベスウエルの後ろを歩き続けた。

その時には、白坂の事などすっかり忘れていた。

始まり(4)

「そういえばエルティ、アンタは何でこんな事をしたんだ？」

道中、ベスウェルが聞いてきた。暇だから何となく、という口調だった。

「……僕はハーフなんだ」彼は目線を下にして重い口調で答えた。

「ああ、なるほどね」それだけで、ベスウェルは彼の意図を察した。「分かったのか？」

「他のハーフや旧人類を救おうとしたんだろ？　しかし、面倒な事をしてくれたな」

「……？」彼は首を傾げた。

「魔法を無力化したから、世界は混乱状態だ。今まで魔法で補っていたものが使用出来なくなっているんだから、当然だ。まあ、一応俺の魔法でその辺は補っているが、さすがに今まで通りにする事は出来ないが」

「……すまない」

「謝るぐらいなら、その分働いてくれよ？」
分かった、と彼は頷いた。

白いコートに身を包み、奈三川は病院の前に立っていた。

結局、旅行は中断され、生徒は古い系統のバスで帰された。

どうやら、魔法が無力化になったらしい。だが、混乱に包まれたのは一日だけで、次の日からは何の不便もなく生活出来ている。しかし人々が魔法を使う事は出来ない為旧人類が使っているような物で生活している。

始まり(5)

一体何が起こったのか？ 世界はその話題で持ち切りだ。一部の人は、『魔法を無力化にさせる魔法だ』だの『旧人類の呪いだ』だのと言っている。

魔法を無力化にさせる……。脳裏に、ある人物が浮かんだ。竹芝だ。

以前、竹芝はそのような魔法を学んでいる、といていた。もしや、それが完成したのか？ そういう考えが浮かんだ。

しかし、その竹芝は白坂と共に旅行先で行方不明になっている。搜索しようにも、手がかりが少ないため捜査は難航しているらしい。よって、事実は今現在不明だ。

彼は病院の扉を開け、室内へと入っていった。院内に人影は無い。魔法無力化……。通称MI事件から三日ぐらいしか経ってないのに、酷く荒れていた。まるで、戦争が起きた様だった。

階段を上がり、長い廊下を歩く。そしてある部屋で立ち止まり、ドアを開けた。

「元気だった？ 夏恋」手を挙げ、彼は明るくいった。

「うん……。元気……。」明らかに元氣のない声で答えたのは彼の彼女である『タカハシカレン』だった。

彼女はこの病院が潰れても尚、此处で過ごしている。二、三日前、院長から退去命令が出された。

始まり(6)

しかし、彼女はそれに応じなかった。『此処は私の家だから』と命令を無視したのだ。

院長はそれを無言で承諾した。普段なら承諾するはずは無いが、心にゆとりが無かったのだろう。それほど、追い込まれていたのだろう。

それを聞いた時、彼は何も言わなかった。せめて最後ぐらいは夏恋の望むままにさせようと思ったのだ。

夏恋の寝ている横に座り、彼はそっと白く綺麗な手を優しく握った。冷たかった。

「ねえ、奈三川さん……」握った直後、夏恋はか弱い声で言った。

「なに？」彼は首を小さく傾げた。

「竹芝さんの事、恨まないであげてね……」

その言葉に、彼は一瞬動揺した。暫くし、彼は昨日話した事を思い出した。

昨日、彼はこういった。竹芝が魔法を無力化にする魔法を学んでいる事、そして今回のM I事件の犯人は竹芝では無いかと。

「……何を言っているんだ。昨日のは、冗談だよ」

彼はベットのシーツを強く握った。涙を堪えていたのだ。

「そう。それなら、いいけど……」

始まり（7）

しかし、実際どうなのだろうか。彼は思った。M1事件の犯人が竹芝であろうがなかろうが、恨むのかも知れない。恨む所か殺してしまうのかも知れない。それが本音だった。

直後、夏恋は掴んでいた手を祓い、床に転げ落ちた。

「夏恋？」彼は何が起きたか分からず、問いかけた。しかし返事がない。

ベットの上に座り、下を覗いた。そこには夏恋が苦しそうに倒れていた。

「どうした！」彼はベットから降り、夏恋の手を握った。先ほど以上に冷たくなっていた。

「ゴメンね……奈三川さん。もう無理みたい……」

「さ……」涙を堪え、彼はいった。「最後なんていうなよ！　まだ、大丈夫だって……！」

彼は机の上に置いてある緊急用の薬を差し出した。

「でも、良かった……。最後にアナタの顔を見て……」夏恋は薬を受け付けなかった。

「最後なんかじゃ無い……。まだ、最後なんかじゃ……！」彼は夏恋の手を強く握った。薬を渡すことは無意味だと思ったからだ。

「奈三川さん……今まで有り難う……」

そういい、夏恋は静かに息を引き取った。しかし、それでもずっと手を握り続けていた。

魔法が使えればこんな事にはならなかったのに……！

始まり(8)

彼はその場で叫んだ。周りの小鳥が飛び立つ音が聞こえた。

ベスウェルに着いて歩いていると、ベスウェルは足を止めた。

「此処が拠点だ」

ベスウェルは小さな小屋を見た。

「……此処が？」

「地味ってか？ 馬鹿が。派手だと困るんだよ。周りにバレる。これぐらいが丁度いい」

「……そうか、成るほど」

確かに、仲間にさえない言えない計画を、周りの市民にバレてしまつては意味がない。……しかし、実際は予算が無かったのではないか？ しかし、それなら魔法を使えば良い話なのだが。

「さて、中に入って話をしよう。これからしてもらう事のだ」

ベスウェルは小屋の中に入った。彼もそれに続き小屋に入った。

小屋の中には小さな木製の机、椅子が置いてあるだけだった。下には絨毯がひいてあった。

「さて、これから俺は仲間を集めようと思う。さすがに一人や二人じゃあ、限界がある」

始まり(9)

「それはそうだろう……しかし、そんな協力的な奴居るかな」

「居るさ。お前みたいな旧人類がな」

ベスウェルは椅子に座った。

「確かにそうだけど、どうやって探すんだ？」

現在、新人類でも魔法が使えない状況になっている。その為、新旧人類を見分けるのは難しい。

「魔法を使うんだよ」ベスウェルは椅子の背もたれに寄り掛かった。魔法を使って見分ける。確かに、ベスウェルなら可能かもしれない。

だが、彼には二つ気になる事があった。

何故、ベスウェルは魔法を使えるのか？ 何故、計画を魔法で達成させようしないのか？

ベスウェルは英雄だから、と言ったが、それで納得出来る筈がなかった。そして、それ程の力を持つベスウェルが何故彼みたいな旧人類と協力するのか。

「という訳だ、早速始めよう、エルティ」

「始めるって、仲間集めを？」

「当たり前だ。さあ、行こうぜ」

そういうとベスウェルは椅子から立ち、小屋から出た。

始まり(10)

外に出、近くの町に向かった。

町は、今まで彼が見てきた風景と、何等変わり無かった。無論、表側だけは。

彼らは町の中を歩いた。ベスウエルは目を細め、周りを見回す。しかし、これといった反応は無かった。

暫く歩き、ベスウエルは言った。

「……やはり、旧人類は見当たらないな」ベスウエルは立ち止まった。

「この際、旧人類じゃ無くても良いんじゃない？」

「確かにそうだが、どうやってさがすんだよ。魔法か？」

彼は頷いた。すると、ベスウエルはため息を漏らした。

「確かに可能ではあるが、そこまで体力を使ったらな……。まあいい。エルティ、お前は先に帰っている」

ベスウエルは手を降りながらその場を後にした。

帰っている、といっても彼はあの小屋をよく知らない。その為、何度か迷子になり、小屋に着いた。

着いた頃、空は黒ずんでいた。彼は小屋の中に入り、椅子に座った。

机に肘を付き、周りを見回す。周りには何もない。その為、時間潰しのために小屋の木板の数を数えていた。しかし数えている途中、睡魔が彼を襲い、何処まで数えたのか覚えていなかった。

始まり（11）

椅子から立ち、背を伸ばした時、小屋のドアが開いた。数人の人物の影が見えた。

目を細め、それらを見つめたが、誰なのかわからなかった。

「どうした、エルティ。こんな部屋を暗くして」

その声主はベスウエルだった。そして、近くにあるスイッチを押した。すると天井にある蛍光灯が付いた。

「ベスウエル……」

暗夜に慣れた目で、光をみたせいか、何かが貫いた様な感覚がした。

目を擦っている途中、ベスウエルの他に複数の足音が聞こえた。例の協力者だろうか。

「さて、エルティに紹介したい人物が居る」

その言葉を聞いた後、目を擦るのを止め、小屋を見回した。そこにはベスウエルの他に二人の男性が立っていた。体格が良い、中年男性。もう一人も中年男性らしかったが、体格が良いとは言えなかった。

始まり(12)

「紹介しよう、『林和政』に『田中健二』だ」

「どうやら、体格の良い方が『ハヤシカズマサ』と言うらしい。」

二人は静かに礼をした。そして、ベスウェルは続けた。

「林和政は『Ori』、田中健二は『sami』と呼んでくれ、エルティ」

彼は静かに頷いた。

それにしても……、ベスウェルが付けた『エルティ』、『オリ』、『サミ』はどういう意味なのだろうと、彼は思った。恐らく、彼らもそう思っている筈だ。

「さて、今日はもう夜遅い。活動は明日からにしようか」

ベスウェルはそういい、小屋のドアノブに手を掛けた。

「あれ、何処に行くんだ？」彼は首を傾げた。

「ああ、ちょっとした用事だ。気にしないで良いぜ」

「そういい、ベスウェルは外に出た。」

オリとサミはその場に立ち尽くしたままだった。

これ以上空気が悪くなったら困ると、彼はその場に横たわり、目を閉じた。

横になりながら彼は思った。

本当に上手くやっていけるのか……？

仲間（1）

朝、彼は目が覚めた。

目覚め眼を擦り、辺りを見回す。しかし、ベスウェルにオリ、サミの姿は無かった。

外に出て、辺りを見回しても答えは同じだった。

彼が首を傾げ、辺りを探索しようと足を踏み出した時、背後から足音が聞こえた。

即座に振り返り、彼は足音の主を見た。体型がよく、上下茶色と地味な服装。何処かで見た記憶があった。

「やあ。確か……エルティと言ったか」

足音の主はオリだった。

「どうして此処に？」彼は首を傾げた。

「いやあ、少しお手洗いにな。此の小屋、風呂が無ければ便所も無いからな」

確かに、この小屋には風呂や便所はない。外に小さな水道がある程度だった。

「そういう君はどうして此処に？」

「朝起きたら、皆が居なくて。それで、探しに行こうとしたんだ」それを聞き、オリは何やら考え込んだ。

「皆……？ サミは俺と一緒に居るが、ベスウェルは何故？」

「昨夜、何か用事が有るとか言っていたけど？」

仲間（2）

「用事？　こんな時に女かよ」

「それは無い」彼は手を左右に振った。

「どうだろうな。それで……」

オリが何か喋ろうとした時、近くから足音が聞こえた。

「よお、早い御目覚めだな」

ベスウェルだった。

「ベスウェル……アンタ、今まで何処に行っていた」

オリがベスウェルに問いかけた。

「何処に行こうが、俺の勝手だ。それより、俺は又仲間探しに行ってくる。お前等は小屋でのんびりしてな」

それだけを告げ、ベスウェルはその場を後にした。

「何しに帰ってきたんだ？」

彼は首を傾げた。

「何なんだよ、アイツ……！」

オリは怒り狂った口調でそういい、山の奥へと消えていった。

仲間(3)

それから、彼は小屋で寝、一日を過ごした。途中オリやサミが小屋に居たかどうかは分からなかったが、夜になるとオリやサミは小屋の中に居た。

喉が渴き、外で水を飲もうと小屋を出ようとした時、オリが口を開いた。

「なあ、エルティ。アンタに紹介したい場所がある」

「紹介したい場所？」

彼はドアノブを握ったままいった。

「ああ、そうだ、ついてきてくれ」

オリは立ち上がり、エルティを軽く押しながら外に出た。サミもそれに続いた。

オリはこの小屋から西に五百メートル程歩いた所で止まった。

周りは木々だらけなのに対して、その場には何もなく、真ん中に焚き火の後があるだけだった。

「此処は？」彼は首を傾げた。

「紹介しよう、此処が俺たちの拠点だ」

オリはそういい、真ん中にある焚き火後に持参したらしきライターで火をつけた。

すると、暗闇に埋もれていた森が光で溢れた。

仲間（4）

「拠点？ それなら、彼処の小屋で良いんじゃない？」

「いや、駄目だ。小屋だとベスウエルにバレるからな。アイツ、あまり信用出来ない」

オリとサミは地面に腰を降ろした。

「此処なら、ベスウエルにはバレない。まあ、此処は雑談場だ」

サミはその場で、足を伸ばした。

「そうそう。ま、アイツに聞かれたら不味い内容のとな。此処なら、火とか木に隠れて見えない」

そして、オリは「まあ、座れよ」と付け加えた。

「……まあ、それなら」

彼は地面に腰を降ろした。確かに、ベスウエルは信用出来ない。魔法といい計画といい、隠し事が多いのだ。それには、オリとサミの話に共感出来た。

「だけど、ベスウエルが帰ってきて僕たちが居なかったらすぐにバレない？」

「それは大丈夫」オリは指で『OK』のサインを出した。「今朝君に試したけど君は何も疑わなかっただろ？」

「今朝？ 試した？」彼は首を傾げた。

「今朝、俺はお手洗いにいったとかいっていたが、本当は此処に居たんだよ」

あっ、と彼は声を漏らした。

「物音がしたから小屋に向かった。まあ、こんな要領でやれば大丈夫だよ」

仲間(5)

「しかし、それが長続きしたら疑われるんじゃないのか？」

「大丈夫だ。どうせ彼奴、夜は居ないみたいだしな。まあ、それより本題に入ろうか」

「本題？」彼は首を傾げた。恐らく、ベスウエルの事についてだろうと予想はしていたが。

「君たちがどうして、ベスウエル何かに協力したか、だ。皆、気になるだろ？」

そう言うのと、オリは彼の顔を見つめ始めた。お前から話せ、という事らしい。

「僕はベスウエルに……」

ML事件の事などは言える筈は無く、『ベスウエルに魔法で脅されて仕方が無く入った』と言おうとした。だが、そこまで喋ってから彼は有ることに気が付いた。

ベスウエルが魔法を使えると話して良いのか？

今までの会話、行動で彼がML事件後にベスウエルの仲間になった、というのは明白だろう。マジック・ロスト後にベスウエルが魔法を使えると知れば、敵対心が更に強くなる可能性があった。無論、彼らがその事を知っている可能性も否定出来なかった。

「僕は、ベスウエルに脅されて入った」仕方が無く、魔法の事は伏せて置いた。

「脅された？　なんて？」オリは問いかけた。

「もし入らなくても、どんな手を使ってでも仲間にさせてやる、って」

仲間（6）

「脅迫か。汚いな」

オリはそれだけを告げると、サミの方をみた。

「君は確か、金がどうのこうのだったよな」

サミは頷き、口を開いた。

「ああ、俺は産まれも育ちも貧乏だった。途中で、旧人類撲滅なんてされたから、なおさらだ。最近になって表へ出られるようになったが、相変わらずの金欠。行き先も、継る相手も居ない。俺は死を決意した。橋の下で、死のうとしたんだ。そんな時、ベスウェルが現れた。月収で一千万やるからその命をくれないかって。最初は耳を疑った。そしたら、それを見通したかの様に前金五百万を渡してくれた。そして今に至る。これが俺が協力する理由だ。まあ、傭兵みたいなものだろう」

そう言うと、サミはため息を吐き、ただし、と付け加えた。

「ただし、別にベスウェルを信じた訳ではない。金が欲しいから、協力しているだけさ。……それでオリ、貴方が協力する理由は？」

「そうか、昨夜は話忘れてたな。俺は暇だったからベスウェルに協力している。まあ、これは二つ有る理由の内の一つなんだがな」

もう一つの理由は？ と彼は尋ねた。時間にゆとりが有るとは言えなかったからだ。

仲間（7）

「もう一つの理由は、旧人類を殺した奴等を殺す事だ」

その言葉に、彼らは驚いたり動揺したりはしなかった。

旧人類なら、当たり前といってもいい程だった。

「ふーん……」

何と反応していいか分からず、適当に相づちを打った。

「しかしまあ、こうして皆の話を聞くと別に皆、ベスウエルを信用してる訳では無いみたいだな」

オリは笑いながらいった。

「まあ、そうだな……」

サミは欠伸をしながらいった。

「今日はもう寝よう。夜、遅いからな」オリは立ち上がった。「明日から忙しくなりそうだな……」

オリはそう呟きながら、その場を去っていった。

サミと彼はで火の始末をし、その場を後にした。

小屋の中にはオリしか居らず、ベスウエルの姿は無かった。

仲間（8）

朝、誰かの声で目覚めた。暫くし、オリである事が分かった。

「……どうかした？」

小屋には布団等はない。その為、床で寝るか、テーブルで座って寝るしか無い。

彼は床に横たわり寝ていた為、身体が痛かった。

「ベスウェルから呼び出した。外で待機しているらしい」

そういうと、オリはサミにも声を掛けた。何でこんな朝に、とサミは愚痴をこぼしていた。

彼は立ち上がり、二人より先に外に出た。

外には、ベスウェルの他に二人の男性が立っていた。

一人は金髪サングラスの外人。もう一人はオリと体格が似ていた。

「協力者か？」

遅れて出てきたオリが不満あり気に呟いた。

「そうだ、悪いか？」

オリは否定的に頭を振った。

仲間（9）

「まあいい。紹介しよう、左から『otkhi』、『khuti』だ」

左の金髪サングラスが『オトウヒ』、少し体格良い中年男性が『フティ』……。

例の、ベスウェルが協力者に付ける名だ。しかし……彼は唇をなめた。

「二人の本名は？」

「本名？ ああ、忘れていたな。『ムスリカ』と『丘雅人』だ」

ムスリカとオカマサト……ムスリカ、珍しい名だ。

「しかし、俺の協力者である以上、本名など関係無い」

ベスウェルはそういうと、小屋のドアノブに手を掛けた。

「これから、会議を行う。これから先どうするか、そろそろ決めようじゃ無いか」

ベスウェルは小屋の中に入っていった。フティは彼らに対し会釈したが、オトウヒは彼らに見向きもせず、小屋の中に入っていった。オリは軽く舌打ちをし、小屋の中に入っていった。

サミと彼は、お互いに一度顔を見合わせ、小屋の中に入っていた。

仲間（10）

小屋の中に入ると、ベスウェル達は床に座っていた。テーブルは端にどけられていた。

彼とサミは床に座った。

「さて、此から先どうする？」

「どうするって……、どうせまた仲間集めだろ？」

オリは頬杖を突き、退屈そうにいった。

「いや、もう仲間集めは行わん。仲間が増えたとリスクがでかい」

「リスクって？」彼は首を傾げた。

「仲間が無駄に増えたと周囲にバレる危険性があるし、裏切られたら元の子もない。それに、食糧だってゆとりが無いんだ」

「食糧？　そういえば、此処に来てから何も食べていないな」

サミが不満そうにいった。

「食べてない？　何を言っている、下に食糧庫と武器庫があるだろ？」

「食糧庫？　何だ、それは。聞いてないぞ」

オリが頬杖を止め、ベスウェルを睨んだ。

「言い忘れていたか。まあ、仕方があるまい」

ベスウェルは立ち上がり、床に敷いてある絨毯をどかした。すると、床に小さな扉が姿を表した。

仲間（11）

ベスウエルはその小さな扉のノブを掴み、扉を開けた。
扉の奥には梯子が有った。

ベスウエルは梯子を使わず、地下室に飛び降りた。

彼らは梯子を使い、地下室へと向かった。

地下室には目の前に食糧庫らしきものがあり、奥には銃やら刀やらが確認出来た。恐らく奥は武器庫だろうと彼は予想した。

「成る程、地下なら周囲にバレる事無く、広範囲に渡って自分の領地にする事が出来る」

オリは付近にある米を触りながらいった。

「そうだ。しかし、環境が良くない為米、麦ぐらいしか保管する事しかできないがな」

「にしても、凄いな……」

サミは奥の武器庫で銃火器を触っていた。オトウヒとフティは梯子の前で立っていた。

「これから、俺たちはこの付近の街を支配する」

「支配する？ 街を？」

オリが頭を傾げた。他の者も、同じように首を傾げた。

「そうだ。計画のため、にな」

ベスウエルが壁に寄り掛かった。

支配される街（1）

「……そうか」オリは頷いた。

「計画とは何なのか、聞かないのか」

オリはため息を吐きながらいう。

「聞いたって答えない事ぐらい、分かっている」

ベスウェルはその言葉にはコメントせず、梯子に手を掛けた。

「それじゃあ、俺はこれから用事がある」

「分かった分かった。もう慣れたさ」

その後、ベスウェルは梯子をのぼっていった。

「にしても、腹が減ったな……」オリは米を触りながら呟いた。

「米と麦があるじゃ無いか」彼はいった。

「……料理とか、出来ないんだよ」

「米ぐらい、炊けるだろう……？」

するとオリは、「……道具が無い」

支配される街（2）

結局、道具をかき集めて米を炊いた。

火はライターが有ったため苦労はしなかったが、水と容器には苦
労した。

水は見つけた川から手に入れ、容器は川に落ちているゴミを使用
した。

味は微妙だった。

その夜、オリ、サミ、エルティはオトウヒ、フティにバレないよ
う『雑談場』に向かった。

話題は『あの二人を此処に誘うかどうか』だった。

「今日の様子だけじゃ、あの二人がベスウエルを信用しているかど
うか分からない。暫く様子を見るべきだ」

オリが言った。

「しかし、今の内に仲間にしておいた方が良いんじゃないかな？

後から、ベスウエルを信用する様な事態になったら困る」

「確かにそうだが……。サミ、お前はどうか？」

「フティはともかく、オトウヒは信用できない」

オトウヒだ、とオリは突っ込みたかったが、それを堪えて、何故
だ？ と聞いた。

「金髪グラサンは裏切るって決まっている」

支配される街(3)

「……どういう意味だ？」

「いや、良い。気にしないでくれ」

オリがため息を吐き、続けた。

「とにかく、オトウヒとフティの事は暫く様子見という事にしよう」
「それじゃあ、今日は此処までにしよう。明日、何が起こるかどう
か分からないし」

サミはそう言い、立ち上がった。彼らは火の始末をし、静かに小屋へと戻っていった。

今朝、ベスウエルの声で彼らは目を覚ました。

どうやら、街を支配する計画を始めるらしい。

彼は外に出、ベスウエルの話聞いた。支配というより、電力流通の拠点となる変電所を襲い、電力を使えなくするだけらしい。しかし現在、魔法が使えない状況になっている。そんな中で電力が使えなくなると、何の行動も出来なくなる筈だ。それは恐らく支配と等しくなるだろう、と彼は思った。

しかし、電力をベスウエルはどう使うつもりなのだろう。彼は考えたが、暫くして考えるのを止めた。考えても結局答えは分からないと感じたからだった。

「全く、朝から騒がしいねえ」

ベスウエル話を聞いていたオリが、彼の横で言った。オリはオトウヒやフティの事が気になっている様子だった。

支配される街（4）

「さて、始めよう。車は奥に止めてある」

「車……？　ベスウエル、運転免許なんて持っているのか？」

何故魔法を使える者が車を使うのか彼は不思議に思った。しかし恐らく、オリ達にはまだ魔法が使えるという事を言っていないのだな、と思った。

「運転免許なんて無くても、運転は出来るさ」

ベスウエルはそういい、奥へと進んでいった。

彼らはベスウエルに続き、奥へと進んでいった。

運転席にはベスウエルが乗っており、彼はその隣に座った。しかし軽自動車のせいかな、後部座席には大したスペースがない。ベスウエルの命令で、オリはトランクルームでの移動ということになった。トランクルームには銃類が入っていた。

木々を避けながら、車は道路へと向かった。道は空いていた。現在、燃料がガソリンの車自体少ないのだ。

にしても、此の車は何処から仕入れたのだろう。彼は欠伸をしなから思った。

「参った……」

ベスウエルがハンドルを握りながら唸った。

「どうしたんだ？」

後部座席からサミが顔を覗かせた。

支配される街(5)

「……自動車検問だ」

奥には数名の警察官が立っていた。

「ML事件の後だ。仕方がない、か……」

サミが身を乗り出しながらいった。

「まあ、そうだな……。それで、どうするんだ？」

「どうするも何も、此処を通るしか無いだろう」

「……強行突破？」

彼が助手席で首を傾げた。

「まあ、心配するな」ベスウェルは服のポケットから一枚の紙切れを取り出した。

「にしても、何で自動車検問だけなんだ？」サミがいった。

「こんな時期だ。警官だって人員不足の筈だ。どれか一つに検問を絞るとしたら、自動車が一番だろう。ML事件の犯人なら、魔法が使えなくなる事は当然分かっている。移動手段として古い自動車を使おうと警官は睨んだんだろう。……というより、身を乗り出すのは止める、狭い」

「後ろだって狭いんだよ……！ 軽自動車で六人移動は無謀過ぎだ」

サミは腰を少し浮かせながら身を乗り出していた。そして後ろには無口なオトウヒとフティが居た。空氣的にもキツかった。

支配される街（6）

「検問の時ぐらい、我慢しろ」

ベスウエルはゆっくりと車を走らせた。

「その車、止まって免許を見せろ」

助手席で、彼は思った。随分、乱暴なものだと。それだけ、ML事件は人類に対して驚異を与えたのだ。だが、罪悪感などは抱かなかった。

ベスウエルは車を止め、窓を開けた。止めたと同時に、もう一人の警官がトランク・ルームに手を掛けた。

「早く運転免許を……」

警官がそういった瞬間、ベスウエルは紙切れを警官に見せつけた。

「よし、通って良いぞ」

トランク・ルームに手を掛けていた警官が引き下がった。

車を走らせ、暫く経った後、サミが言った。

「驚いた。どんな手品を？」

「さあ、な」素晴らしい、ベスウエルは窓から紙切れを投げ捨てた。そこには何も書かれてなかった。

支配される街（7）

変電所に着いた。

とはいっても、近くで車を止める訳にはいかなないので、数十メートル離れた場所で車から降りた。

「警備員は居ない、な」ベスウエルが言った。

「確かに、誰もいないな……」

彼はトランク・ルームを開けながら言った。開けた途端、オリが息を荒げながら出てきた。

「好都合だ。今の内に開始するぞ」ベスウエルはトランク・ルームの中を漁っていた。

「とはいえ、油断禁物だ。これを各自持っておけ」

ベスウエルは何やら黒い物体を投げた。どうやら、銃らしい。

キャッチした瞬間、「何だ、これは」とオリが呟いた。

「一九〇〇年代に作られた銃だ。魔法を持たぬ者が、魔法を持つ者に対抗するべく作られた銃の一つだ。名前は知らないがな」

その銃は丸びおびたフレームが特徴的だった。

「しかしまあ、相手だって『魔法銃』とか開発してたんだ。無意味だったと思うが」

オリがいった。魔法銃とは魔法を弾にした銃だ。主に魔法を上手く使えない児童や老人、更には攻撃系魔法を持たぬ者の間に多く普及した。

支配される街（8）

「銃、か。使った事がないな」

オリが銃に触りながら呟いた。

「念のためだ。さあ、行こうか」

ベスウエルは一枚の紙切れを渡し、オトウヒとフティと共に他の場所に向かった。

どうやら電力制御やら何やらを変換するらしい。よく分からなかったが、メモに書いてある通り、機械をいじくった。

「ベスウエル、アイツ等と一緒に何処かに行ったな」

オリが銃をクルクルと回転させながら退屈そうに言った。

「他の変電所にでも行ったんじゃないのかな？」サミがいった。

「他のにねえ……。で、どうする？ アイツ等、雑談場に誘うか？」

「さあ……。さっきのだけじゃあ、何とも。無口だったし」

「まあ、な……。エルティ、お前はどうか？」

返答は無い。

「おい、エル……」

オリがそこまで言った所で、エルティが「静かにしてくれ……」と呟いた。

「何だ、ご機嫌ナナメだな」

オリが笑いながら言った。

支配される街（9）

「こっちは機械いじりで忙しいんだ。そういうなら交代してくれ……」

彼は疲れきった顔でぼやいた。

「俺たち、機械は苦手なんだよ」

「にしても、こんな事して何をしたいんだ……？」

僕だって、と呟きたかったがそれを堪えていった。面倒事は避けたかった。

「世界征服とか？」

オリがにやりと笑いながらいった。

「世界征服にしては範囲が狭いけども」サミが欠伸をしながらいった。

「何れは全世界の変電所でも襲うんだろうか」

またもや、にやりと笑いながらオリが言う。どうやらそれ程、暇らしい。

「そんな事になるんなら、僕は此処を抜けるな」

無論、ベスウエルの魔法の事もあり、抜ける事は出来ない。しかし、彼は雰囲気任せる事にした。

「違いねえ」オリが笑った。

何だかんだで、最初はまだ高印象では無かったこの二人とも、苦無く普通に話せている。もしかしたら、オトウヒやフティもそうなんじゃ無いのかな……？

彼はそう思いながら作業を進めた。

支配される街（10）

「……よし、此で終わりだ」

機械のスイッチを押す。これでメモに書かれてあった作業は終了した。

彼は背伸びをした。すると聞こえてくる寝息。

「……よし、此で終わりだ」

今度は大きな声で言った。しかし、まだ寝息は聞こえた。

「何で寝てるんだ……」

彼はその場に寝ころんだ。地面はかたい。しかしそんな事など関係無かった。

見慣れない機械の操作。『魔法を無効化にする魔法』を覚えるより……。いや、それは言い過ぎだが、疲れたのは確か違った。

どれぐらいの時間が経ったか分からない。彼は誰かの声で目を覚ました。声主はオリだった。

「よお、起きたか？」

「オリ、か……。今何時？」

彼は目覚め眼を擦りながらいった。

「さあ。しかし、俺が起きてから四時間は経ったな。暇だから数を数えていた」

「四時間？　じゃあ、ベスウェルは？」

彼は素早く周りを見回した。しかし、ベスウェルの姿は無かった。

「さあ、見えないな」オリがいった。

「四時間だろ？　それじゃあ……」

見捨てられた。それしか言葉が浮かばなかった。

「まあ、一度車が有った場所に戻ろう。もしかしたらもう戻ってきているのかも」

サミがいった。

支配される街（11）

「……そうだな」

彼は立ち上がった。その瞬間車のエンジン音が聞こえた。オリは手に持っていた銃を音がした方に構えた。

「よお、終わったか？」

声が聞こえる。聞いた事のある声が。

それからすぐに、車が姿を現した。ベスウエルの車だ。

「ベスウエルか……」

オリは構えていた銃を降ろした。

「その調子じゃあ、もう終わったみたいだな。ほら、乗れよ」

「また、あの中に入らなきゃいけないのか……」

愚痴をこぼしながらも、彼らは歩き始めた。車は発電所の外に止まっていた。

「オトウヒとフティはもう小屋に居る。今度は窮屈なんかじゃないぜ？」

彼らは座席に座り、ドアを閉める。それを確認した後、ベスウエルは車を走らせた。

「で、ベスウエルはアイツらと何処に言ってきたんだ？」
後部座席でオリがいう。

「アイツらって、誰だよ」

暫くの間をあけ、ベスウエルがいった。

「……オトウヒとフティだ。発音が面倒なんだ、言わせるなよ」
ため息を吐きながらいう。

「ああ。他の発電所に行ってきた。この辺となり街のな」

支配される街（12）

「行ってきただけなのか？」

「いや、電力制御系をいじってきた。後は、このスイッチ一つで電力を支配する事が出来る」

ベスウエルはポケットからスイッチらしき物を取り出した。

「何だよ、それ……。俺たちは居なくても良かったのかよ」

オリがため息まじりにいった。

「いやいや、結構助かったぜ？」

ベスウエルが笑いながらいった。

それから、一週間と経たずに彼らは他の発電所を襲った。時間が経てば警備も厳しくなる可能性があり、のんびりゆったりしている暇など無かった。

しかし結局、発電所が計画にどう関わるのかなどは分からなかった。

そして発電所の件も一段落ついた頃、彼らはオトウヒとフティを雑談場に誘った。

話してみると、オトウヒたちは意外と良い奴だった。

此処に来た理由こそ話してはくれなかったが、話は通じる人たちで、何か有ったらベスウエルを裏切るという話にも、笑いながら賛同してくれた。

魔法の薬（1）

発電所の件が終わってから数日後、小屋の中で食事をしている時だった。

オリが米を口に運びながら呟いた。

「そーいや最近、妙な組織が存在しているみたいだな」

「妙な組織？ 俺たちの事か？」

オトウヒが箸を机の上に置きながら首を傾げた。

「いや、何でも、魔法を使えるようになる薬を製造しているとか……」

「薬？ おい、それってまさか……」

違法な薬物類だろう。彼は食事をしながら思った。

「にしても、耳が早いな。何処からそんな情報を？」

オトウヒがいった。

「それでも、昔は……いや、今する話では無いな。さっき、川で食事支度をしていた時に新聞が落ちていたんだよ。そこに書いてあった」

「へえ……そうか」

過去の話が気になったが、取りあえずオトウヒはそう答えた。

「で、実際どうなんだろうな。本当に魔法が使えるようになるのかな」

サミがいった。

魔法の薬（2）

「それは無いだろ。もし本当に魔法が使えるようになっていたら、今ごろそいつ等はワイウキ状態だろう」

オリが言った。

「まあ、確かにそうだ」

この状況下だ。ちょっとした魔法でも使えれば、軽く一つの村を滅ぼすことが出来るだろう。

……じゃあ、ベスウェルは？

脳裏にその疑問が浮かぶ。

どうしてかは不明だが、ベスウェルは魔法を使える。なのに、変電所の事など、魔法を使わずに対処している。というより、魔法が使えるなら変電所をいじらなくても、目的を達成することは容易な筈だ。なのに。ベスウェル、本当は魔法を……。いや、そんな筈は無かった。実際、偶にだがベスウェルは魔法でしか説明の出来ない事をやってのける。使えない、というより故意に使わないという感じだ。

「……か？」

じゃあ、どうして……、

そこまで考えた所で、彼は頭を振った。考えても答えは出ないと悟ったのだ。

「……気だよ」

オリの声が聞こえた。近くに居たのに、全く気が付かなかった。

「何の話？」

暫く……といっても長めの瞬きを数回した程度の時間だったが、考えごとをしていた為に話に付いていけなかった。

魔法の薬（3）

「聞いてなかったのか？ ……オリが、その組織を潰そうとか言い出したんだよ」

オトウヒがサングラスを右手中指で触りながらいった。

「どうだ？ 面白そうだろう？」

オリが笑みを浮かべながらいった。

「……それは無理だ。ベスウェルがそれを許すわけ無いだろう」

フティが箸を茶碗の上に置きながら、冷静にそういった。

「それじゃあ、ベスウェルに黙って行けば良いんじゃないのか？」

オリは引き下がらなかった。

「大体、何でそんな事をする必要が？ それに、相手の位置だって分からないんだ。無茶だ」

又もや、フティが冷静にいう。

「それは……」

オリがそこまでいったところで、フティが椅子から腰を上げ、小屋の出入り口のドアノブに手を掛けた。

「まあ、人生諦めが肝心だ」

フティが片手でドアを開けた。すると小屋の中にいる全員が、外にいる男性を見つめた。

「何だ、面白そうな話をしているな」

ベスウェルだ。ベスウェルは笑いながらいった。

魔法の薬（4）

「ベスウェルか。珍しいな、こんな時間に」

何故かは知らぬが、ベスウェルは一日の大半を外で過ごしている。こういう時間にベスウェルがこの小屋に来ることは今まで無かったという程では無かったが、珍しい事ではあった。

「で、何の話をしていたんだ？」

渋々、彼らは話していた内容を話した。

「成る程。その組織を、か」

「別に、本気で言ったわけでは無いが……」

オリは申し訳なさそうにいった。

「では、その組織を潰すか」

ベスウェルがいった。何時もと変わらぬ口調で。

「本当か？」

オリが椅子から腰をあげながらいった。椅子は激しく後ろに倒れ込んだ。

「ああ、本当だ」

「何故？」

フティが首を傾げた。

「その組織が計画の妨げになるからだ」

そう言われたら、返答のしようがない。計画の内容を知らないからだ。

魔法の薬（5）

「そうか……」

納得できないようだったが、仕方がなくフティが頷いた。

「そういう訳だ。明日、襲撃を開始する」

そう言い残すと、ベスウェルは小屋の中から出ていった。

暫くし、彼は小屋の中から出ていった。ベスウェルに質問したい事が有ったからだった。

「計画って、何なんだ？ そろそろ、教えてくれたって良いんじゃないのか？」

心なしか、何時もより口調が悪いような気がした。だが、それ程気にはならなかった。

「何れ、知ることになるさ」

ベスウェルは振り向かず、足を止めずに、そう答えた。

「あの組織は本当に計画の妨げになるのか？」

その言葉に反応したのか、ベスウェルは足を止め、振り返った。

「それも、何れ知ることになるさ」

そういい、ベスウェルは再び歩き始めた。

「では、出発しよう」

車内に、ベスウェルの言葉が響きわたる。

昨夜、彼らは雑談場に向かうことなく、小屋の中で静かに寝た。組織を襲撃するとなると、そんな余裕は無かった。

魔法の薬（6）

「にしても、よく組織の居場所が分かったな」

オリが頬杖を突きながらそういった。

前回とは違い、車が大きい為、六人座っても尚空きスペースがある程だった。

その為か、余分に銃器が置いてあった。

「何を言っているんだ？ 巷じゃあ、結構話題になっているぜ？」
ベスウェルがハンドルを握りならそう答えた。

「ふーん。じゃあ、他の奴等も来てるかも知れないな」
オリが言った。

「こんな時期に、そんな事するのは俺たち位なもんだろ」
後部座席で、オトウヒが呟いた。

「それで、その組織の拠点は何処？」

助手席で、彼がいった。

「病院だ」

「病院？」

彼は首を傾げた。

「そうだ、病院だ」

それっきり、ベスウェルは喋らなくなった。

魔法の薬（7）

「さて、行こうか」

ベスウェルが言った。

その言葉を聞き、彼は太欠伸をした。どうやら、寝ていたらしい。
「着いたのか。意外と遠かったな」

オリが欠伸をしながら言った。どうやらオリも寝ていたらしい。

「皆、早く降りろ。銃を渡す」

ベスウェルがトランク・ルームを開けながらいった。

「銃か。どんなのが有るんだ？ 武器庫には色々有ったが」

オリが車から降りながらそう言った。皆も車から降りた。

「対・魔法用の銃だ。三十八口径の拳銃で使いやすいはずだ」

ベスウェルがトランク・ルームから拳銃を取り出した。

「対・魔法用って何が違うんだ？」

サミが拳銃を受け取りながら首を傾げた。一度使った事があるからか、慣れた手付きで触り始めた。

「魔法を吸収する力があるみたいだ。とはいえ、あまり使われなかったがな」

「へえ、そうなのか。しかし、何故今使う必要が有るんだ？」

「銃そのものが少ないんだから仕方が無かろう」

魔法の薬（8）

銃その物が作られるように成った時から、既に魔法が存在していた。魔法が使えぬ者も突然多かったが、銃類を作る人は多くなかった。その為、種類も少なければ数も少ない。

「無駄話は此処までだ。さっさと行くぞ。オトウヒ、オリ、サミ、フティは一階と二階を制圧。俺とエルティはその他の階を担当する」
ベスウエルは全員に銃と予備弾倉を渡し、静かにトランク・ルームを閉めた。

「二人だけでいいのか？」

オリが首を傾げた。その口調からして、人を殺すのに抵抗は無いらしい。

「ああ、充分だ。さて行こうか、エルティ」

ベスウエルはそういい、歩き始めた。ベスウエルの思惑は分からなかった。

暫く歩き、病院の姿が見えた。

病院の姿を見て、彼は目を疑った。見覚えのある姿だった。

奈三川の彼女が入院していた病院だった。

その姿を見、彼は奈三川の彼女のことを思い出した。確か、奈三川の彼女は心臓が悪く、魔法で支えないと生きていく事ができない筈だった。

という事は、今回のML事件で命を落としてしまった筈だ。

魔法の薬（9）

しかし、もし生きていたら？

もしかしたら……

「どうした、さっさと行くぞ」

考えが遮られた。彼らは病院内に入っていた。

院内は汚かった。薬品やら家具やらが散乱していた。

どうやら、此処にその組織が居るのは間違いないらしい。

にしても……、

「人の気配がしないな……」

彼は周りを見回しながら呟いた。薬品の入っていたらしき容器や、待合室の椅子などが散乱してあっても、人の気配などはしなかった。

「取りあえず、三階に行くのでしょうか」

そういうと、ベスウェルは階段をのぼっていった。

「三階、か……」

三階といえば、奈三川の彼女が入院していた階だ。

もしかしたらしている、かも知れないが……。

魔法の薬（10）

天井が所々崩れており、上るのに苦勞した。よく、経った数週間
でここまでなったものだ。

「なあ、此処から何処に？」

「喋るな。敵に気付かれる」

彼が喋り終わる前に、ベスウェルがそういった。

何を恐れているんだ、と彼は思った。魔法を使える人間として、
魔法が使えない人間など、虫……いや、蟻当然だというのに。やは
り、魔法が……？

そう考えながら足を踏み出した時だった。後ろから、今まで感じ
なかった人間の気配がした。最初はオリ達かと思ったが、どうやら
違うらしい。四人以上の気配がした。

「来たか。想像以上に早かったな」

ベスウェルがそう言いながら、微笑む。

「その人間、手を壁に付けろ！」

騒がしい足音と共に、叫び声が聞こえた。

「どうする……？」

彼が小声で話しかける。

しかしそんな事はどうでもいいというようにベスウェルは、
「嫌だ。といったら？」

魔法の薬（11）

そういい、ベスウエルは振り返った。そこには、複数の男性が銃を構えていた。

ベスウエルがそれを確認したのとはほぼ同時に、男達が構えていた銃の引き金を引いた。微笑みながら。

「エルティ、伏せてろよ！」

ベスウエルはそう叫ぶと、右手を前に伸ばす。

そして、銃口から発射された銃弾がベスウエルに当た……、いや、違う。銃弾はベスウエルの目の前で弾けた飛んだ。

「チッ、対・魔法用銃かよ」

よくそんな物を用意出来たな、と付け足し、ベスウエルは腕を真上に伸ばす。

「な、何なんだよお前……」

一部の男が、腰を抜かしながら、弾倉が空になった銃の引き金を引き続ける。

聞こえるのは、男達の叫び声と、引き金を引く音だけだった。

「たくっ、無駄に力、使わせるなよ」

しかし、そこにベスウエルの声と指をならす音が交わり……、いや、違う。ベスウエルが指をならした時には、男達の叫び声や引き金を引く音は聞こえなくなっていた。

どすん、と鈍い音がする。男達の方を見ると、男達はその場に倒れ込んでいた。

銃を、虚空に向けながら。

魔法の薬（12）

「さて、行こうか」

ベスウェルは微笑みながら、死体を邪魔にならない位置にどかす。此奴は、人を殺すのを躊躇わない。それどころか、人殺しを楽しんでいる様にさえ見えた。

ベスウェルが、ある病室の前で足を止めた。そこには、『三〇五号室』と書かれていた。

奈三川の彼女が入院していた病室……。もしかしたら、此奴は奈三川達の事を知っているのか……？

しかし、それが思い違いである事にすぐ気付く。そのドアだけが閉まっていたのだ。

「此処が、拠点なのかねえ」

そう言いながら、ベスウェルが『三〇五号室』のドアを開ける。

———中には何も無い。通常ある筈の、ベッドさえも。

「空振り、か」

ベスウェルは残念そうな素振りを見せながら、その号室のドアを閉めた。

「拠点を探しているのか？」

彼が問いかける。するとベスウェルは、

「あたり前だ。何の為に此処に来たんだ」

笑いながら言う。

「そもそも、拠点が一、二階に無いとは断言出来ない筈だ」

「いや、必ず此の階か———四階に拠点がある筈だ」

何を根拠に———そこまで言った所で言葉を止める。そう、根拠はあるのだ。

———ベスウェルは魔法が使える。それが、根拠だ。
しかし……、

彼は頭を掻く。

しかし、魔法が使えるなら正確な位置も割り出せば良いのに……。

魔法の薬（13）

そう思いながら、彼はベスウエルの後を追った。

四階を探索していた時だった。又もや、怪しい部屋があった。

『四〇五号室』。この号室のドアが閉まっていた。

「どうする、開ける？」

彼がドアの右側に腰を降ろしながらいう。

「開けるさ。銃を構えろ」

反論せず、彼は銃をポケットから取り出し、安全装置を外す。

それを確認してから、ベスウエルはドアを静かに、そして勢いよく開ける。

「……どう？」

一拍の間をあけ、彼はベスウエルにたずねる。

「……」

しかし、室内に入ったベスウエルは沈黙を保ったままだった。

その反応を見、彼は銃を構えながら立ち上がり、室内を見回す。

そこにはベッドが一つと、多数の注射器が落ちていた。

魔法の薬（13）（後書き）

七月中旬には終わる予定です。

魔法の薬（14）

「……何もないな」

部屋の中を見渡すが、他には何もなかった。

ベスウェルも号室に入り、周りを見渡していた。

にしても、殺風景な部屋だ。何せ、ベッド以外に何も置いてないのだから、当然といわれればそれまでだ。

「にしても、又空振り……」

そこまでいった所で、彼は言葉を失った。

前言撤回。

此処には何もないといったが、それは違った。

ベッドが……否、ベッドの布団が、膨らんでいたのだ。人型に。

彼は銃をポケットに仕舞い、その布団をどかそうとした。

その時だった。

激しい音と共に、何かが、彼の横を通り抜け、壁に当たった。

壁の様子を見るに、それは……、

銃弾。間違いなかった。今横を通り抜けたのは、銃弾だった。

魔法の薬（15）

勢いよく振り返ると、そこには長髪の男性が拳銃を片手で構えながら立っていた。

何処か見覚えがあった。

「……お前、竹芝か？」

穏やかな声。男性は銃を構えながらいった。

……その男性は、奈三川だった。

「奈三川……！」

そういつて足を踏み出した時だった、

「何故お前が此処にいる！」

銃声とともに、その声が号室内に響きわたる。銃弾は、再度壁に当たった。

その質問に戸惑っていると、奈三川が銃のトリガーに指を掛ける。「どうして居るか聞いて……」

そこまでいった所で奈三川が口を紡ぎ、銃を投げ捨て、ベッドの方へ駆けだした。

「夏恋！ 今、今眉が動いたね……！」

『夏恋』。確か、奈三川の彼女……という事は、そこにいるのは……。

魔法の薬（16）

生きていたのか？ あの、ML事件があったのに。
いや、違う。

その台詞から察するに、彼女は……死んでいる。

……いや、待て。なら、何故奈三川は此処に？

その時、床に落ちている注射器に目が向いた。此処は病院だ。注射器が落ちているのは考えようによつては不思議では無いのかも知れない。

しかし、何故こうも無造作に？

これは明らかに職員がやった事ではない。すると、奈三川が？
何のために？

治療する為の薬は魔法で作られる。だが今はそんな薬を使えない。
使うことが出来ない。そもそも、彼女は死んでいる。

その時、何故自分たちが此処に来たのか。その理由を思い出す。

「奈三川！ まさか、お前っ！」

そうだ、普通に考えれば分かる。奈三川は、『魔法の薬』を使い、
彼女のことを……。

「今、お前が何故此処にいるのか、もう聞かないでやる。……帰れ」

「お前、分かっているんだよね？ 今、お前がやっている事は……、

」

その時、ハツとする。彼は、ML事件の犯人だ。自己中心的な考えで、沢山の人が苦しみ、死んでいった。

そんな彼が、『それは駄目な事だ』などと……言えない。

魔法の薬（17）

「聞こえなかったのか？ 帰れ」

今度はコチラに振り返り、怒りがまじった声。

明らかに、以前とは様子が違っていた。これも、薬のせいなのだろうか。

その思惑を察したのか、奈三川は『お前もだろうか？』と嘲笑う。

「……まあ、そういう事だ。帰ろうぜ。……『ML事件の犯人さん』

」

「ベスウェル……！」

その言葉にどういう意味が込められていたのか分からない。だが、それを奈三川の前で言うのは……。

「ML事件の犯人？ お前が？ ……やっぱりお前かッ！」

怒り狂った様な形相で奈三川が彼を睨む。その眼のせいで、暫く動くことが出来なかった。動いたら殺される。そんな気がした。いや、動かなくても……殺される。

「そうかそうか……言ってたもんなあ、前に！ そんな事！」

奈三川がポケットから何かを取り出す。それは黒く、デカイ物。

……銃だ。二丁、持っていたのだ。

魔法の薬（18）

火薬の破裂音と、空を裂くような音が耳を襲う。耳を塞ぎたくないほど、耳障りな音。

……銃声だ。

その銃弾は彼の左肩に当たり、傷口に熱湯をかけられた様な痛みが身体を襲う。

「うっ……」

思わず、声が漏れる。撃たれるのが、此ほどにまで痛いとは……思いもしなかった。

右手で、撃たれた部分を押さえる。指の間から、血が流れる。

「お前が悪いだ、お前が……！」

奈三川がゆっくりと近付いてくる。

そして、彼との距離が残り数センチメートルになった地点で、奈三川が銃を構える。銃口は、頭に向けられていた。

「さあ、死んでくれよッ！」

動きたかった。だけれど、動けなかった。肩が痛かったからじゃない。足が、震えていた。

指がトリガーに触れる音がした。眼を瞑り、被弾した肩を強く握る。そうする事で、痛みに耐えられる気がした。

暫くして聞こえてきたのは銃声……、じゃ無かった。何かが落ちる音が聞こえただけだった。頭に、痛みも感じなかった。

ゆっくりと眼を開け、奈三川をみる。奈三川は銃を取り落とし、虚空をじっと見つめていた。

「夏恋……？」

そういうと奈三川は彼のことを蹴り飛ばし、ドアの前に駆け出した。

魔法の薬（19）

壁にぶつかり、背中に激痛が走る。

「夏恋……やっと、やっと会えたね……！」

奈三川がドアの前に膝をつき、救いを求める様に手を動かしていた。

「夏恋？ 何を……、」

夏恋は今現在、此の室内にあるベッドで深い眠りにについている。だから、そこに居るはずがない。

ならば、どうして……、

『魔法の薬』。

その時、その言葉が脳裏をよぎる。

魔法が使えるようになる薬……『魔法の薬』。

だが、それは実際金商売を目的とした違法な薬物だろう。こんな状況だ。魔法が使えなくなり、路頭に迷った人間が混乱に陥り、こういう薬を使用する者も少なくないだろう。

そして勿論、違法な薬物には中毒症状や幻覚症状があるだろう。

だから、つまり……、

奈三川は、幻覚を見ている。

「夏恋、夏恋……」

奈三川は尚も、救いを求めるように手を動かしていた。目の前に居るのに、届かない。手が。

「よく見ておけ、エルティ。これが、魔法の力に踊らされた人間の末路だ」

ベスウエルが、哀れんだ目で奈三川を見ていた。

魔法の薬（20）

外に出ると共に深呼吸をし、清々しい空気で肺がいっぱいにする。
あんな血にまみれた空気では、気分が悪くなる。

結局、奈三川はあの場に倒れ込み……死んだ。恐らく、過度に使用した違法な薬物のせいだろう。

こうなったのが全て彼のせいだというのは、知っていた。だけど、後悔はしなかった。

後悔しても意味がないから……。そう、自分に言い聞かせた。

外に出てから数分後、オリたちが銃を握りながら病院から出てきた。

「よう、終わったのか？」

ベスウェルがいう。

「……終わったなら、助けに来てくれよ。銃声、聞こえてただろ……？」

オリが左腕を押さえながら片息をついていた。

「銃声が聞こえてるって事はまだアンタらが生きてるって証拠だからな」

不適に笑う。しかしまあ、確かに、その通りだ。

「つたく、銃を使うのがこんなに難しいとは思わなかったぜ。死のやり取りなんかして……頭がオカシクなりそうだ」

「まあ、感覚が麻痺しそうになったな……」

オトウヒが額にかいた脂汗を腕で拭き取る。その横では、サミが銃を握り、身体を震わしていた。

まあ銃撃戦をして、そうならない方が不思議というものだ。

魔法の薬（21）

「それで、どうだった？ 『魔法の薬』はどうしたんだ？」

「今時珍しい古びた機械と共に置いてあった。注射器に入ってたから、取りあえず全部床に叩き付けた。どうせ、使わないんだろう？」

「違法な薬物と決まれば、もう用は無いさ。さて、帰るとしようか」
刹那。ベスウエルが言い終わる前に、背後から激しい音が聞こえる。これは……銃声？

振り返ると、サミが俯きながら、銃口をベスウエルに向けていた。

「……何のつもりだ？ サミ」

ベスウエルが振り返りながらいう。その頬からは血が静かに流れていた。

「こんな事して……一体何をしたいんだ、アンタは！ 答えてみろよ！」

サミがいう。握られていた銃は、小刻みに震えていた。

彼たちが止めようと動く。だが、ベスウエルはそれを静かに制止する。

「何が言いたいんだ？」

「……答えられないんなら、俺は此処を抜ける！」

持っていた銃をベスウエルに投げつける。その銃をベスウエルはキャッチする。

「ほう？ ならば、金是要らないのか？」

ベスウエルが見下すように笑う。

「要らない、要らない……！ 人殺しの金なんか、要らない！」
耐えきれなかったのだ。彼は思った。

人を殺す罪悪感に。

仲間の死（1）

「そうか。じゃあ、君は今から俺の仲間じゃない。……そういう事でいいな」

「ああ、そうだ。今から俺はアンタの仲間じゃない」

そういうと、サミは彼たちを見つ、呟いた。彼にしか聞こえないほどの小さな声で、

……もう少し、違う方法で出会いたかったな、と。

「じゃあな、ベスウェル。安心しろ。アンタの事は誰にも言わない」
それだけを告げると、来た方向とは逆の方向に歩き始めた。

「おい、ベスウェ……、」

オリが何かを言おうとした時に。ベスウェルが持っていた銃をサミに向け……発砲した。

一発。たった一発だった。そのたった一発の弾は……サミの頭に当たりサミは力無くその場に倒れ込んだ。

衝撃的だった。最初は何が起きたのか分からなかった。正直、今も分からない。

ただ分かったのは……、

「死体、片付けてくれるか？」

ベスウェルの性格だけだった。

仲間の死（2）

「……有り得ない」

静夜の中、口火を切ったのはオリだった。

現在、雑談場にいる。内容は勿論……サミの事だった。

「まさか、殺すとは……」

彼が俯いたまま呟く。分かっていた。あのまま見逃すわけがないと。だが、殺すとは思わなかった。オリたちはそう思っていたのかも知れない。けれど、彼は思わなかった。魔法が使えるなら、記憶消去ぐらいできるはずなのに。

「くそっ、何だよこれ……。こんな所にずっと居なければならぬのかよ」

オリが愚痴をこぼす。それは当たり前の事とも言えた。

「嫌なら、此処から抜ければいい」

フティがいう。

「俺に、死ねっていうのかよ！」

オリが立ち上がり、強く地面を蹴る。中心部にある火がゆらりと揺れた。

「今争ったって……」

彼がその争いを止めようとする。今現在は争いでは無いが、後に争いに発展する可能性が充分にあった。

「そうじゃない。今ならベスウェルに見つからず、逃げることできる。だから俺と……、」

それが言い終わる前に。オリは座っていたオトウヒの襟首を掴んだ。

「どうだか。そういつて、逃げた後すぐにベスウェルに報告するかも知れないだろ？」

仲間の死（3）

「ベスウエルの居場所が分からないのに、報告できるかよ！」
掴んでいたオリの手を、フティは手で払う。

「二人とも……いい加減にしろ」

低く、怒りに満ちた声。その声主はオトウヒだった。

「今此処で争って、どうする。無意味な行動は止めろ」

ちっ、とオリが舌打ちをする。謝ろうとする姿勢は無かった。
襟首を直しながらフティが歩き始めた。

「どうした、逃げるのかよ？」

「気分が悪い。小屋に戻る」

それ以上、フティは何も発しなかった。いや、彼以外には発しなかったように思えた。だけど、彼には聞こえていた。「逃げれるのなら逃げたい」と。もしかしたら、それはそら耳だったのかも知れない。もしかしたら……それは自分が発した言葉なのかも知れない。フティが見えなくなった所で心配になったのか、オトウヒが「フティ！」と叫びながらフティの元に駆けていった。

「どこで……道を間違えたのかなあ……」

オリが空を見上げ、呟いた。

道なんて無かったのかも知れない。もしくは、道が暗くて何も分からず、道を選ぶことが出来なかったのかも知れない。……旧人類が襲われた日から、生き残りたちの足元は常に真っ暗だった。

仲間の死（4）

並大抵の光では照らせないぐらいに。

「なあ、エルティ」

オリが顔をあげたまま、いう。

ん？ と首を傾げると、オリがいった。それは当たり前でありながらも当たり前で無いような内容だった。

「俺、此処を抜けるよ」

「え？」

思わず、声が漏れる。そういうのは当たり前の事なのかも知れない。だけど、逃げたら死ぬ、とわかっているのに……。

「逃げるのは多分数週間後だろうな。今だと、ベスウェルにすぐ捕まりそうだ」

「……本当に逃げるのか？」

「ああ。だからどうだ？ おまえも一緒に……来ないか？」

「いや、遠慮しておく」

確かに、ベスウェルの行動は気に喰わない。だが、一応は命の恩人なのだ。

「そうか」

オリが寂しそうに俯く。

その時、オトウヒが帰ってきた。

「全く、参ったよ。ふてくされてたぜ」

愚痴をこぼしながら、腰を降ろす。今や、雑談場には三人しかない。初めての時を思い出した。オトウヒではなく、サミだったが……。

「フティはどうしたんだ？」

「彼奴なら、小屋で寝てるぜ」

「まさかとは思うが……逃げないよな？」

オリが心配そうにいう。フティの事を思ってたのか、自分のこと

を思っ
てな
のか
……
分
から
な
か
つ
た。

仲間の死（5）

「問題ない。ドアには南京錠をしておいた」

南京錠。それは武器庫にあったらしい。

「オトウヒはどうなんだ？」

オリが言う。するとオトウヒは、

「何がだ？」

首を傾げた。話の前後を知らないのだから、無理がない。

「此処を抜けたりはしないのか？」

「……お前やエルティはどうなんだ？」

質問を質問で返す。だが、誰もなにも言わなかった。そんな雰囲気ではなかった。

「俺は抜けるが……エルティは抜けないとさ」

オリがそう言うのと、オトウヒが彼のことを見る。

「そうか。俺も抜けない。目標を達成するまでな」

オトウヒはそういうと、空を見上げた。中心にある火が、まるで天に救いを求めるかのように燃え続ける。空には、幾つもの星が浮かんでいた。

「もうそろそろ、小屋に戻る？」

彼がいう。現時刻は分からないが、もう相当な時間の筈だ。

「そうだな。だけどなあ……」

オリがぼやく。

「どうかしたか？」

オトウヒがサングラスを整えながらいう。

「そうしたいんだけどさ……。ほら、フティともめちゃったし」
戻りにくい、という事なのだろう。

「どうする？ 別に、此処で寝ても構わないが」

「そうか、その手があったか」

仲間の死（6）

オリがぼん、と手を叩く。

「よし、じゃあそうするか」

オトウヒが中心にある火を消す。途端、周りが闇に埋もれる。ころうじで、誰が何処にいるかが分かる。

「別に、オトウヒたちが此処で寝る必要は無いんだぞ？」

オリが言う。表情が分からないから、どういう意味で言ったのかは分からない。

「いいさ。仲間を放って置ける筈がないだろう」

オトウヒはそういうと、その場でごろんと、仰向けになった。

「……そうか。エルティは？」

「えっ？ あ、うん。此処で寝るよ」

正直、小屋に戻りたい気持ちもあった。しかし、『仲間』という単語を言われて、それが出来る筈がない。それに、小屋で寝てもこんな感じだし、外で寝るというのも楽しそうだった。

「そうか。じゃあ、お休み」

オリはそう言うのと、その場に仰向けになる。

彼もそれにつられてその場に仰向けになる。地面に生えている草が身体に触れて、ちょっぴりくすぐたかった。

朝、鳥の鳴き声で目を覚ます。鳥は毎日元気だ。もしかしたら、一番幸せなのは鳥なのかも知れない。魔法があろうが無かろうが、関係ない。

目覚め眼を擦りながらそう思う。

仲間の死（7）

周りを見回すと、まだオリやオトウヒは寝ていた。寝息が気持ちよさそうだった。

立ち上がり、小屋の方に戻ろうとすると、背後から気配を感じた。振り返ると、オリとオトウヒが眠そうに目覚め眼を擦っていた。

「あ……、起こしちゃった？」

彼が申し訳そうに言う。寝息が気持ちよさそうだったから、後ろめたさがあった。

「いや、良いよ構わない。そろそろ、良い時間だろう？」
オトウヒがいう。

「……朝か。意外と、気持ち良く寝れたな」

「どうやら、それほど迷惑では無かったらしい。それはそうと……、
「オトウヒ、フティは？」

「え？」

オトウヒが一瞬どきり、としたように見えた。

「いや、ほら。外から南京錠をしたんだろ？　なら、今ごろ出れなくて困っているんじゃないのか？」

「ああ、確かに。オトウヒ、鍵は？」

「忘れてた。そうだったな。鍵は持っている。さっさと行こうぜ」
オリとオトウヒは同時に立ち上がり、歩き始めた。

仲間の死（8）

「……え……」

小屋の姿を見て、声を漏らす。異常だった。ドアが、周りの壁が、銃で撃たれたようにバラバラに崩れていた。いや、撃たれたように、じゃない。撃たれたのだ。周りに落ちている無数の空やつきょうがそれを物語っていた。

「何だよ、これ……」

オリが小屋の中を覗く。中に、フティは居ない。

……逃げたのだ。

南京錠が掛かっているとはいえ、小屋は木製。力強い人が数発殴っただけでも穴がぽっかり開く程に薄く、脆い。それに、小屋には武器がある。それを使えば、南京錠なんてもはや眼中に無いだろう。足りなかったのだ。南京錠の数。武器庫の扉の方にも、南京錠をしておけば、こうはならなかったのかも知れない。いや、殴る、蹴るだけでも破壊できるのだから、それは無意味だっただろう。

後ろを見ると、オトウヒが微笑みながらその小屋の姿を見ていた。「よう、どうかしたか？」

声がする。ベスウエルの声だ。振り向くと、ベスウエルが立っていた。

「ベスウエル、フティが逃げ出した。……追うか？」

逃げ出したのは昨夜から今日の朝にかけて。そう、遠くには逃げていないだろう。

仲間の死（9）

「いや、いいさエルティ。計画も最終段階。正直、それほど人手も要らない」

ベスウエルはそういうと、オリに向き直る。

「それより、仕事を頼まれてはくれないか？ 『林和政』」

地面を見、彼は思う。地面には、かなりの空やつきょうが散らばっていた。数えれば、軽く二桁はいく。普通、此だけ発砲していたら距離が離れていたとしても、寝ていたとしても、気付くものではないか？

そんな考えを見通したかのように、オトウヒがいう。

「それはだな、エルティ。これのせいさ」

オトウヒが床に落ちていた細長い筒状の物を拾い上げる。

「それは？」

「これは、『減音器』だ。銃の発射音を軽減させる。これを使われたら、距離が少し離れただけでもほぼ無音に感じる」

「そうか……」

彼は俯く。正直、そんな事はどうでも良かった。本当に気になったのは、ベスウエルがオリの事を『林和政』と呼んだ事だった。

またしてもそれを見通したように、オトウヒがいう。

「ベスウエルが最初に言っていた気がする。仲間に対しては『エルティ』や『オトウヒ』の様に呼ぶと。本当の名前など関係ないと。

つまり……今の奴は仲間では無いという事だろう」

仲間の死（10）

「でも、どうして……」

オリは今まで反抗の姿勢をそれほどベスウエルに見せていない。思い当たる節は、昨夜の……。

「今日から、雑談場に行くのは控えた方がいいな。念の為に」

「そうだな……」

そう俯いた時、林……オリが武器庫から出てきた。

オリには、ある仕事を任されていた。武器庫からフティがどれだけの武器、食糧を持ち込んだか調べる仕事だ。

「ベスウエル、終わったぞ」

オリがベスウエルに紙を差し出す。

それを見たベスウエルが、うーん、と唸る。

「どうしたんだ？」

彼がベスウエルの持っている紙を覗き見る。そこには一般の人が見ても解読不能な言葉が並べられていた。

仲間の死（11）

「『丘雅人』が奪った武器の種類や数をまとめた物だ。アイツ、欲張りだな。刀や銃を複数個奪ってやがる。アイツ、こういう武器が少ないって事知らないのか？」

ベスウェルが悪態をつく。どうやら相当数、武器を奪ったらしい。何に使うのかは分からない。

「混乱が醒めてきたとはいえ、まだ完全に醒めた訳ではない。銃があれば、景気良く暴れられるな。まあ良い。今は取りあえず会議だ」
ベスウェルは素晴らしい、バラバラになった壁の破片を足で払い、床に腰を降ろす。

「それは後だ。後。いいから、早く座れ」

ベスウェルに急かされ、彼らは床に腰を降ろす。破片が身体に当たり、痛かった。

「さて……お前ら、旧人類がある程度撲滅された、というのは知っているな？」

「勿論だ。知らない人など居ない」

オトウヒが言う。幼児などを除いて、知らない人は居ない。

「では、その犯人は？ ……誰だか分かるか」

「犯人？ 知らないな……」

彼がそう答えると、ベスウェルは当たり前だ、というように微笑んだ。

「実は、その犯人の居場所が分かったんだ。……どうだ、潰さないか？」

「居場所が分かった？ どういう意味だ？」
オトウヒが言う。

仲間の死（12）

「旧人類を殺した奴等は、今現在『この地』にいる。まあ、潰すなら今しかないというわけだ」

「潰すって……どうやって？」

彼が首を傾げる。

「普通に、だよ。敵は少数だ。どうだ、やるか？」

「……どうせ強制、なんだろう」

オリが目線を反らしながら言う。

「分かっているじゃないか。まあそういう事だ。明日か、明後日の正午から行動を開始するつもりだ。今はゆっくり休め」

ベスウェルが立ち上がる。

「休めって……何処で？」

当然の質問だった。こんな壊れた小屋では、寝ることは勿論、休むことだって厳しい。

「何処でも良い。小屋は明日の朝修理する。今は我慢しろ」

「こんな所で、休まる訳無いだろう……」

オトウヒが悪態をつく。

「んっ……まあ、そうだな。まあ、好都合だ。今の内に銃の使い方も学ぼうか。使ったことがあるとはいえ、無知では役に立たんかな」

魔法の存在、ベスウエルの計画（1）

それから、ベスウエルに銃や刀の扱い方を習った。意外によく知っていた。

しかし学んだとはいえ、それは知識としてのレベルだけだ。実際に発砲したりはしなかった。刀は、実際に小枝を斬ったりしたが。どうやら弾が少なく、只の訓練だけに発砲するのは勿体無いらしい。結局、ぶっつけ本番という事になった。

夜。訓練が終わり、皆が就寝しようとして小屋に戻ろうとしていた時だった。突然ベスウエルに話掛けられた。

「どうやら、何か話したい事があるという。」

「一体何なんだ？」

彼が歩きながらいう。ベスウエルはオトウヒ達に会話の内容は聞かれたくない、小屋から離れた場所で話そうと言い出したのだ。

「そろそろ、話しておくべきだと思ってな」

草木を避け、ベスウエルが言う。

「何をだよ？」

正直、それほど凄い内容では無いと思っていたが、次の一言でその甘い思惑は打ち壊される。

「魔法がどうして存在するのか……俺の計画が何なのか、だよ」

魔法の存在、ベスウエルの計画（2）

中心部にある葉や小枝に火を付け、ベスウエルはその付近に腰を降ろす。

「冬の焚き火って良いよな。いかにも『冬』って感じがする。まあ、最近はそのほど寒くはないが」

「それで、何なんだよ。早く始めてくれ」

先ほどの内容を聞かされたら、そんな雑談など邪魔だった。

ベスウエルが一息吐き、言う。

「先ず、どうして魔法がこの『地球』に存在してるか……分かるか？」

彼は否定的に首を振る。

「それはだな、何と呼べば分からないがこの世界で言う『魔王』が関連している」

「ちょっと待て、魔王が……何だって？」

「おいおい、何だよその顔は。まるで信じちゃい無いな」

「悪いが、『魔王』なんて……信じないぞ？」

魔王。聞いた事はある。だが、それは創作の世界での話だ。現実では、魔王なんて話は聞いた事がない。

だが、ベスウエルもその返答については予想がついていただろう。得意気に口を開いた。

「じゃあ、数十年前に現れた『魔物』についてはどう説明するんだ？」

「んっ……」

忘れていた。そうだ、実際に『魔物』と呼ばれる者は現れたのだ。「その『魔王』と呼ばれる奴は狂っていてな、何れは全惑星を支配しないと気が済まないそうだ」

魔法の存在、ベスウェルの計画（3）

「『魔王』は全惑星を支配しようとした。だが、人が足りない。他の惑星の人種は強力だからな。そこで、『魔王』は地球人に魔法を与えた」

彼がその話を聞き、首を傾げると、ベスウェルが続けた。

「つまり、だ。『魔王』は人手が足りないから地球人に魔法を与え、全体に行き渡った所で支配しようとしている。少しでも戦力を増やすためにな」

「つまり、人々は『魔王』に支配されているって訳か？」

「まあ、そういう事だ」

「何だよ、それ……」

彼は強く頭を掻く。そんな話を聞いて、気分が悪くならない訳が無かった。人々が支配されようとしているのだから、当たり前的事だった。あれ、でも……、

「何で、地球人なんだ？ 他の惑星の人種、強いんだろ？」

それは当たり前ともいえる疑問。話を聞く限り、地球人は他の惑星より弱いのだ。弱い者を協力者にしたって意味がない筈なのだから、普通に強い人種を支配し、協力者にすればいいのだ。

「それは他の人種が強すぎるからだ」

「え？」

彼は首を傾げる。協力者だ。誰だって強者を望むだろう。

魔法の存在、ベスウェルの計画（4）

「いいか、よく考えろ。元々一発殴られただけでも怪我をする地球人に魔法を与え、こんなにも強大な力を手にしているんだ。それを元々身体が強い人種に与えたらどうなる？」

「人々には及ばない、化け物じみた身体になる、な……」

「そう、だからだ。『魔王』は反乱を恐れた。だから、元々弱い地球人に魔法を与えた。そうすれば、力は付いても、それ程強くはない。反乱までには至らない。簡単に支配できる」

「なるほど……」

「それに、誰にでも簡単に魔法を与えられる訳じゃ無いしな」

「そうなのか」

正直、内容がいまいち理解できない。適当に相づちをうつ事しか出来なかった。

「ちなみに、旧人類を滅ぼそうとしたのは『魔王』の部下だぜ」

「え？」

出ると思わなかった単語が出て、一瞬ドキリとする。しかしそうか。普通に考えれば分かる。奴等にとって魔法を持たぬ無力な者など不要なのだ。

「という事は、奴等も魔法を？」

「さあ、な。お前が使った魔法のせいで魔法が使えないのかも知れない。まあ、何たって『魔王』の部下だ。そんな魔法など関係無しに魔法が使えるだろう。まあ何れにしろ、厄介な敵だぜ」

魔法の存在、ベスウエルの計画（5）

「……って事は、これからその部下たちと戦うんだろ？　魔法が使える相手に銃や刀で立ち向かうのか？」

「そうだ。何か文句があるのか？」

「魔法を持たぬ者が魔法を持つ者と争う。同じ人種だって結果は目に見えているんだ。他の人種だったら尚の事だろう？」

「まあ、それはそうだ。だが、魔法だって完璧じゃない。防御魔法だって付け入る隙がある」

ベスウエルが言うならそうなのだろう。使用した者にしか分からない事だってあるのだろう。

「まあ俺が居るんだ。そう、絶望的な雰囲気にはならないだろう」

ベスウエルが微笑む。だが、彼は笑わなかった。……一人でかろう相手なら仲間など集めない。

いや、でもしかし。確かにそうかも知れない。サミを殺し、フテイが逃げても追わない。更にそれ程人手は要らないと言った。確かに、それ程絶望的では無いのかも知れない。

「という訳だ。今夜はお開きにしようか」

ベスウエルが立ち上がる。

「待て、まだベスウエルの計画を聞いていないぞ？」

「ああ、それについては明日、相応の場所で話すさ」

ベスウエルは火を消すと、その場を後にした。

小屋に戻ると、そこに先ほど面影など無く、元の薄汚い小屋に戻っていた。

魔法の存在、ベスウエル計画（6）

朝、目が覚めると、オリたちが小屋の姿を見て驚いていた。一晩のうちに気付かず、この様な姿になっているのだ。誰だって驚くだろう。一応オリたちにはベスウエルと協力して一晩のうちに直したという形にしておいたが、信じてくれたかは怪しかった。だが疑うのは無駄だと分かったのかオリたちは何も言わなかった。

朝食を食べ、暫くのんびりした後、ベスウエルと共に銃と刀の扱いを学んだ。

そして午後、夕方に入った時だった。ベスウエルに昨夜話した場所と呼ばれた。

ベスウエルが「計画について教える」と言い出したのだ。

ベスウエルに誘われ、車に乗る。どうやら、移動先に何かあるらしい。

「何処に向かうんだ？」

暫く経ってから、彼が聞く。徐々に人が少なくなっている。どうやら、町外れの場所にあるらしい。

「まあ、遠くだよ」

それだけを答えた後、それ以上ベスウエルは何も発しなかった。

車のエンジン音が心地よかった。暫く眠っていたのだ。

目を開け、周りを見る。そこにベスウエル以外の人は居なかった。

「此処は？」

急に不安になる。何の根拠も無かったが。

「お目覚めの様だな。後数分で着く」

魔法の存在、ベスウェルの計画（7）

「もうすぐ着くって……」

周りには何もない。何処に行こうというのだろうか……？

「まあそう慌てるなよ。……ほら、着いたぜ」

車が急に止まる。降りるが、そこには何もない。

「……何か、視界が悪いな」

「そりゃあ、霧が出ているからな」

ベスウェルがパチン、と指を鳴らすと、霧が一瞬にして無くなり、視界が良くなる。

「……」

その姿を見て、啞然とする。目の前に……大きな機械が置いてある。立っている、の方が正しいのかも知れない。その大きな装置は細長く、全長は見た限りでも数十メートルはあった。

「どうだ、凄いだろう。『破壊砲』だ。最も、自称だがな」

こんな物目の前があるのに気付かなかったのは霧のせいだろう。

それも、魔法の。

「これを、何に使うんだ？」

「まあ待て。少し移動しようぜ。ここじゃあ、座れないだろう？」

『破壊砲』と呼ばれた機械の周りにも様々な機械が置かれている。何れも、用途が分からない。

彼らは『破壊砲』の周りに付いてある階段を登り、地上から僅かに、三メートルといった場所にある床に腰を降ろす。

『破壊砲』を囲む様に作られた平らで薄い床の近くに、何やらスイッチらしい物が置いてあった。

魔法の存在、ベスウエルの計画（8）

「昨夜話した内容は覚えているな？」

「『魔王』が地球を支配する、だろ？」

「そうだ。それで俺の目的は、」

ベスウエルが『破壊砲』を指さす。

「この『破壊砲』を使って地球を支配しようとする敵を倒す事だ」
意味が分からず、首を傾げる。昨夜もそうだ。……分かり話せばいいのに。

「現在、『魔王』は魔物を使って地球を支配しようとしている。数は一体。そしてその敵の住処は、空だ」

「そういい、ベスウエルが空を指さす。」

「魔物が？ 空に？」

信じられなかった。『魔王』の話は何とか信じられる。だが、空中に魔物が居る話など耳にした事がない。

「そうだ。聞いた事、無いか？ 最近、気象がおかしいと」

「気象が？」

こめかみを右手で押さえる。そんな話は聞いた事が……、

「いや……確か、ある。聞いた事がある」

誰からかは忘れた。だが、ある筈だ。最近気象がおかしい、と。
「今こそ俺が気候を魔法で調整しているが……、魔法を使わなければ、今ごろ真っ暗で荒れてるだろうな」

「ん……」

それほど大した情報では無かったのだが、これは信じなくてはならない。しかしすると、今地球は大変な危機にあっているんじゃない……？

魔法の存在、ベスウェルの計画（9）

「まあ、そうだな。それで、この『破壊砲』はその空中にいる魔物を倒すためにある。動力は魔法や電力だ。まあ、ML事件がなければもう少し順調だったかな」

ベスウェルが肩を揺らしながら笑う。

「……ごめん」

「いや、まあ感謝してるぜ？ 魔法を無力化にしてなかったら、もしかしたら今ごろはもう魔物に支配されていたかも知れない。まあ、過去のことを嘆いても仕方がないぜ」

随分とプラス思考だと思った。

「そういえば、何でこんな兵器を使うんだ？ 魔法使えるんだろ？」

「そんなに俺は強くない。敵は空を覆い尽くす程にでかい。俺だけじゃあ無理だし、この『破壊砲』があったって倒せるかは分からない。襲った変電所、少なかったしな」

「……何でこんな事、しているんだ？」

「はあ？」

『魔王』についての詳しさ、更にこの状況下においての魔法使用など……どう考えてもベスウェルは地球人じゃない。明らかに『魔王側』の人間だ。なら、こんな事をするのに意味なんか無いはずだ。
「ああ、それはだな……、」

少しの間。

「俺が人間だからだ。正確には、魔物よりの人間だな。俺は地球で最初に魔法を手に入れた人間なんだよ」

魔法の存在、ベスウエルの計画（10）

「えっ？」

首を傾げる。例えそれが本当だとしても、魔法が地球に誕生したのは確か二、三百年前の筈だ。生きているはずがない。人間ならば。「俺は最初に魔法を持って生まれたからな。いろいろ、訓練を受けた。だからこんなこんな状況下でも魔法を使えるし……こんなに長く、生きている。そしてだから、魔物を滅ぼそうとしている」

「ん……」

……正直、なんて反応していいか分からなかった。

「そう考えなくてもいいぜ。まあ、此が俺の計画だよ」

しかし、そこでまた疑問が一つ浮かぶ。

「何で、こんな事を一人でやっているんだ？」

別にベスウエルはこの『破壊砲』を使って人を殺そうとしている訳では無い。いたって善良的に使おうとしている。そして、それには魔法が必要だった。それなら、最初っから魔法が必要である事を告げ、皆で協力してその魔物を倒せばいい。なのに何で、こんな一人で戦っていたのだろうか？

言っても信じてもらえないだろうからな、類の理由なのだろうか。しかしかつて人々を滅ぼそうとした魔物から地球を救った英雄の言うことだ。信じない人など居ない筈だ。

魔法の存在、ベスウエル計画（11）

「人々にそれを打ち明け、協力して魔物を倒せばいいのに、だろ？ そうだな、だが俺はその事に最初気付けなかった。どうせまた一人で出来るだろうと、過信してたんだ。そしてそれに気付いたときにお前がML事件を引き起こして全ておしまいだ」

ベスウエルがやれやれと肩をすくめる。だが今回は謝らなかった。謝ったって空気がおかしくなるだけだ。

「さて、それでだ」

ベスウエルが立ち上がる。

「俺とついてくる気はあるか？」

ベスウエルが手を差し出す。

何を今更……：そういう疑問は浮かばなかった。どうして手を差し出しか、その理由が分かっていたからだ。同意が欲しかったのだ。この行為が正しいのか、地球にとって良い事なのか。その、同意を。「当たり前じゃないか」

彼が立ち上がり、手を差しだす。そして、握手する。

「そういつて貰えると、有り難い」

ベスウエルが微笑む。今まで遠い存在であったベスウエルが身近に感じられ、何だかほほえましかった。

「此の事、話すのか？ フティやオ……、」

そこで、言葉を止める。そうだ、ベスウエルはオリの事を仲間と思っていない。

「ああ、別に奴を本名で呼んだのにはそれほど意味がない。ちょっとした脅しさ」

『魔王』の部下（1）

「何れは言うが、今は黙秘だな。取りあえずあの旧人類を殺した奴を始末してからだな」

小屋の中で、ベスウェルが「傾注、傾注」と手を叩く。

「さて、今日が決戦の日だ。奴等を始末するぞ」

「所詮、魔法がなきゃ何も出来ない奴等なんだろう？」

オリが言う。そうだ、無ければ、な。

「ああ、そうだな。無ければ、な。それで林、武器はもう運んだか？」

ベスウェルが皮肉っぽくいう。その皮肉は彼にしか分からない。

「運んだよ。随分持ってくんだな」

昨日あんな事を言っていたが、正直まだオリのことを完全に信じていない感じがした。その証拠に、力仕事ばかりやらせている。

「さて、行こうか。……いや待て、忘れてたぜ」

ベスウェルが小屋の端に畳んであった黒いマントを彼らに投げる。それを触りながら首を傾げていると、ベスウェルが答えた。

「防弾コートだ。常に身につけておけ」

「へえ、まるで怪盗だな」

全身をコートで覆い、フティが言う。更に帽子を被ればその姿はまさしく怪盗だった。

「さて、行こうか」

ベスウェルが行き追ひよく扉を開ける。

『魔王』の部下（2）

出発してから数十分が経つ。

後部座席には林とフティが、助手席にはエルティが座っている。林とフティは先程からそわそわしており、視線が定まっていなかった。それに対し、エルティは落ち着いていた。エルティはこの戦いの相手、そして彼の弱点まで知っている。緊張などしていたら、十中八九死ぬことを知っているのだ。

『破壊砲』の発射には電力だけでは足りず、魔法の補助力も必要なのだ。それも莫大の。つまり彼の弱点は魔法を無駄に使えないという事だ。無駄に魔法を使い、『破壊砲』発射に必要な魔力が残ってなかったら意味が無いのだ。魔力は無限ではない、有限だ。しかし、敵はそんなのは関係ない。彼を倒すために魔力を節約する必要など無い。倒したら終わり。暫く回復するまで休めばいい。だが、彼はそうはいかない。仮に倒したとしても、まだ先があるのだ。

この戦いは分が悪すぎる。

確かに彼はその敵を含めても、この地球において最強の存在なのかも知れない。

だが、敵は複数だ。一気に攻められたら勝ち目は無いに等しい。最強であっても、無敵では無い。

昨夜、この事を話した時のエルティの表情は一言では表せない程複雑だった。

『魔王』の部下（3）

諦めたのか、絶望したのか、希望があったのか……分からない。しかし、こうして戦う覚悟を決めた以上少なくとも諦めてはいない筈だ。

だが諦めていないからなんなのだ。一人の力など脆すぎる。彼がそうであるように、一人で戦況が変わるほど戦いはあまくない。

車が広い平地に出る。周りには大きな木々しか無い。なるべく人との接触を避けるために人通りのない森を進んでいったのだ。

車に付いている時計を見て、ため息が漏れる。現時刻は午後二時十二分。出発してから三時間弱が経つ。この調子じゃ、目的地周辺に付くのは深夜か朝方だ。

魔法があるためガソリンの心配はないが、時間はあまり掛けたくなかった。

車のような小さな密閉空間に長時間居ると、ストレスと疲労が溜まる。しかも戦いの前だ。エルティたちは緊張していて眠ることができない。これでは戦闘に支障が出る。

魔法で車を移動させるか？ 四〇〇キロぐらい出せば……いや、人がそんな速度に耐えきれるのか？ なら、車内に……いや、魔法使用は極力控えるべきだ。

だがこのままでは肉体疲労が……しかし彼らは大して戦力に成らない。なら、別に疲労してようが関係ないのでは……。

『魔王』の部下（4）

「なあベスウエル。あれ、何だ？」

窓側をじっと見つめていた彼にエルティが話しかける。その言葉に、皆が反応する。

「ん？」

何か珍しい物でもあったのだろうか。考え事を止め、フロントガラスに目を向ける。フロントガラスのずっとずっと向こうに、直径数十センチメートル程の丸い物が浮かんでいた。

何かの虫だろうか？ しかし、そんな虫は……、

その直後、背筋が凍ったような現象に陥る。

向かってきている。その丸い物が、コチラに高速で。それは車が動いているからではない。丸い物が動いているのだ。

その丸い物はどんどん大きくなる。だが、まだ距離は離れている。……おかしい。まだその丸い物は数キロ先にある筈だ。なのに、何故此ほど大きい？ ……答えは簡単だ。

「まずい、全員車から離れろ！」

急ブレーキを掛け全ドアのロックを解除し、全員に呼び掛ける。

あの丸い物は大きいのだ。

ベルトを外し、ドアを開け、外に飛び出す。直後、車同士がぶつかった様な鈍い音が耳を襲う。

車を見ると、前部座席と後部座席の一部が何らかの物によって潰されていた。一、二メートル程の丸い物。恐らく、岩石だ。

『魔王』の部下（5）

「エルティ、生きてるか？」

後部座席は一部だけだが、前部座席は全て潰されている。中にいるとしたら、間違いなく死んでいる。

「……ああ。ちょっと足を捻ってしまったけど」

姿は見えなかったが、声が聞こえる。元気がなかったが、命に別状はないらしい。あれをみた時、何処かで覚悟していたのだろうか。素晴らしい身体能力だ。

「二人とも、大丈夫か？」

続いて、後ろを確認する。一部だけとはいえ、中にいたら大怪我をするだろう。

後ろには誰も居なかったが、暫くし、ドアが落ち、車内から林が出てくる。

「くそ、何の冗談だよ……」

悪態がつければ問題はない。フティの安否が気になったが、反対側から何かが落ちる音と足音と声が聞こえる。どうやら生きているらしい。

それより、この岩石の正体を調べなければ成らない。普通に考えて、只転がってきた訳では無いはずだ。それに、これからの移動方法を考えなければならぬ。

立ち上がり、岩石に触れようとしたとき。数十メートル先の所に、人影が見えた。

影は三つ。こんな所に人が居るのは珍しいがおかしくはない。しかし、岩石が飛んできたのだ。今居るのはおかしい。まさか……。

『魔王』の部下（6）

「お久しぶりですね、ベスウエル」

その三つの影が近づいてくる。

セミロング、ロングヘア、セミショート黒髪の女性。見覚えのある顔だ。

『エクヴスイ』、『シュヴィディ』、『ルヴァ』……魔王の部下だ。

「……相変わらずの服装だな」

白のワンピース。以前と変わらない。

正直、予想外だった。此処にあらわれるとは。だが、幸運なのかも知れない。無駄に疲労を溜めずに済む。

「『アスイ』様がお怒りになられています。……魔界にお戻り下さい」
リーダー格である『エクヴスイ』がいう。

「嫌だ、と言ったら？」

彼が笑いながら、車に近づく。

「貴男はもう必要ありませんし、計画の邪魔をされたらたまりません。……殺します」

彼女が腕を前にのばす。……殺る気だ。

「そうかよっ！」

彼が一気に車に駆け寄り、トランクから銃を取り出すのと同時に彼女が微笑みながら指を鳴らす。だが、その表情が一瞬にして凍る。

「そのコート、対・魔法仕様ですか。よくそんな物を」

「相手がお前等と分かって、対策しないでも思ったかよ！」

『魔王』の部下（7）

距離は数十センチぐらいだが、そのコートの周辺では魔法が無力化される。つまり体内に魔法空間を発生させ殺すという彼が魔力を節約のために使用する攻撃方法は彼らには通用しない。そして、彼女らにも通用しない。

取り出した突撃銃を片手で持ち、彼女らに発砲する。それを軽やかな動作で回避する。

「お、おいおい、あの美女は何なんだ？」

林が不安そうにいう。

「あれが標的だ。全員、攻撃を開始しろ！」

そう言いながら、彼は更に発砲する。しかしその攻撃もかわされる。

「ああ。そつ、そうか。なら……」

林がトランクから銃を取り出す。だがそれを、彼が制止する。

「銃は使うな！ 初心者が扱える程易しくは無い！ お前たちは刀や刃物を使用しろ！」

彼らに相手させるのは一人が限界だ。彼は両手で銃を持ち、『エクスィ』で『シュヴィディ』に向かって発砲する。だが跳躍されて回避される。此処までは予想通り。彼はその着地地点に向かって発砲する。

今度は当たった。いや、当たった様に見えた。その銃弾が空中で静止する。

魔法防壁だ。やはり使ってきた。

彼は微笑みながら、銃の弾倉を変える。

ならば、銃弾に魔法を付加させればいい。

『魔王』の部下（8）

エルティがトランクから刀と拳銃と弾倉を取り出す。全長約七〇センチ、重さ約一キロの刀。銃は駄目とベスウェルが言ったが、飛躍的扱いが楽な自動式拳銃なら問題はないはずだ。

コッキングをし、セミショートの子にフルオートで発砲する。数発撃つが、跳躍されて回避される。

舌打ちをする。

この様な遮蔽物が少ない解放的な空間では単純能力の高い方が優位に立てる。明らかにコチラは不利だ。

「おい、エルティ。これからどうするんだ？」

オリがトランクの側で言う。

「取りあえず銃と刀を持って戦え。ああ、それとそのコートは脱ぐなよ」

ベスウェルの話が正しいならこのコートには対・魔法能力があるらしい。なら、これは命綱だ。

オリとフティが銃と刀を取り出す。その瞬間にも、彼は銃を発砲する。しかし、又回避される。彼女は明らかにプロだ。一人だけとはいえ、初心者がかなうような相手ではない。

オリとフティが背後から銃を発射する。しかし、回避される。

ここで、ようやく分かる。彼女は相手の指先を見、撃つ瞬間に斜線をずらして回避している。初心者なら動きは読みやすいのか？

いや、初心者の理解し難い動きを読むのは用意ではないはず。

『魔王』の部下（9）

なら、魔法で？ どちらにしろ、このままでは無駄死にするだけだ。

「オリ、フティ、三方向に分かれて攻撃する。オリは此の場で待機、フティは右側に走ってくれ」

少し下がり、耳打ちをする。理解した様で、二人が静かに頷く。
コチラは三人。相手は一人。なら、一つの優位点を最大まで利用する。

地面を蹴り上げ、敵の左側へと全速力で走る。数秒後、フティも右側に走る。そして、発砲する。

今度は外れまい。何しろ、三方向からの連続攻撃。

真上に跳躍して回避される。

だが、その次にオリとフティがその飛んだ場所に発砲する。

幾ら強かろうが、不意をつけば……。

だが、目を疑うような現象が起こる。当たるはずだった銃弾がその場で静止したのだ。魔法だ。デタラメ過ぎる。

そして着地、跳躍。今度は彼に向かっていて。空中で回転し、足を前に出す。真下には彼が立っている。

冗談じゃない。

銃を発砲する。今度は回避せず、防御する。そして二人の距離が残り数メートルになったところで、銃弾が発射しなくなる。機関部が剥き出しになっている。弾切れだ……！ 弾倉を取り替える暇もなく、歯を食いしぼる。

だがその時、彼女の進路が変わる。

『魔王』の部下（10）

右方向に跳躍し、砂煙をあげて着地する。

「魔法を吸収する銃ですか……」

彼女が舌打ちをしながらオリたちに向き直る。

その瞬間に刀を地面に置き、弾倉を替え、スライドを少し引く。

彼女はオリたちの銃弾を防がず、回避した。つまり、彼女はそれほど魔法能力が高くないはずだ。……勝機はまだある。

刀の鞘を抜き、鞘を投げ捨てる。連続攻撃を加えれば、勝てる。

「少々、遊びすぎたようですね」

彼女が右腕を前に伸ばす。直後、その周囲の空間が歪んだ様な気がした。

「対・魔法コートとはいえ、威力の高い魔法でいけば破る事が出来ます」

彼女が右足を前に踏み出す。高威力といえど、それほど強くはない筈だ。強いのなら、ベスウェルが相手してくれる筈なのだ。

銃を構え、彼女に照準。発砲。

それを彼女は回避しながら、彼の方に駆け出す。

『魔王』の部下（11）

そして彼との距離が残り数メートルになった所で、彼女が高く跳躍する。

銃を投げ捨て、刀を両手で強く握りしめる。ずっしりとした重さが伝わる。

そしてそれを彼女に向かって振り上げる。

しかしその数瞬後、刀が目を疑うような状態になっていた。

刀が、バラバラに砕け散っていた。

そして、身体に大きな衝撃。後ろに吹き飛ばされ、木々にぶつかる。彼女に蹴飛ばされたのだ。

幸い怪我はしなかったが、武器がない。取りに行くとしても、距離が……。

その時だった。何かを突き刺す音と、何かが吹き出す音が聞こえた。

目を音を方向に向ける。

……オリの腹部が小さく斬り裂かれ、その傷口から血が吹き出していた。

だが、今は悲しんでいる場合ではない。彼女を倒さなければ悲しむことさえ出来なくなる。

素早く立ち上がり、足を滑らせて銃を回収し、彼女に向けて照準。発砲。又回避される。

「フティ、彼女に近づかないようにして戦うんだ！」

空弾倉を取り出し、弾倉を変える。残り弾倉は一。そろそろ、きつくなってきた。

『魔王』の部下（12）

拳銃を構え、彼女に向かって発砲する。

しかし、回避され……、

いや、違う。こちらの銃弾が、当たりに行っていない。

使い慣れてない物を過度に使い過ぎたせいか手首が痛い。まともに撃てない。それはフティも同じだった。やがて、彼女は回避行動をしなくなった。無意味だと分かったのだろう。それがムカついた。彼女が彼に向かって突進する。すかさず、発砲する。かろうじて数発当たったが、全て弾かれる。決着をつける気だ。

そう悟り、彼は右方向へと滑り込む。何とか攻撃は回避したが、此以上は……、

そう、立ち上がろうとした時だった。オリと……目があつた。

その目に、怒りや悲しみは無かった。只、策が有ると……コチラに来いと……呼びかけていた。

「フティ、着いてこい！」

銃を発砲しながらオリの方へと駆け出す。勿論、全弾外れた。

オリの側に着き、彼女に向き直る。手周辺の空間が歪んでいる。

「フティ、合図と共に左方向に駆け出してくれ。それと、銃は捨てるんだ」

側にいるフティに小さい声で話しかける。

二人とも同時に銃を投げ捨て、代わりに刀を構える。

「来いよ、化け物。勝負してやる」

『魔王』の部下（13）

彼女は何も言わずに向かってきた。

「フティ！」

刀を片手で持ち、右方向に駆け出す。フティも、左方向に駆け出した。

暫くし、足を止めて振り向く。

刀を両手で持ち、刃先を彼女に向ける。

すかさず彼女も足を止め、コチラに向かってきた。一步目は有った。だけど……二歩目は無かった。

「なっ……」

彼女の腹部から、何かが飛び出していた。それは銀色に輝いていた。

「この……コートは魔法を、無力化にするんだよな……防壁も……魔法なんだろう？」

そうだ、このコートは魔法を無力化にする。つまり、このコートを使えば防壁を無力化に出来る。無論強力な防壁なら無力化に出来ないだろう。だが、今彼女は前方に集中していて後方には微力の防壁しか発生させてなかったはずだ。

銀色に輝いた刀が振り上げられる。同時に彼女はその場に倒れ、そこには血塗れのオリが立っていた。

彼女らが、ルヴァの方向をみる。

何故魔法使用者が未使用者に……？　そう思ってるはずだ。

だが、今は戦闘中だ。一瞬の油断が死につながる。

銃の弾倉を取り替え左手の銃でエクヴスイ、右手の銃でシュヴィティを狙い、交互に発砲する。

だが、すぐに防壁で弾かれる。

『魔王』の部下（14）

さすがに常時、防壁展開中か。

コチラに向き直ったシュヴィティに対し、両手の拳銃を構え、指先に力を込めて発砲する。

防壁を破るほどの力は込めなかったが、シュヴィティはバランスを崩し、その場で後方に倒れ込む。

そのまま駆け出し、シュヴィティが立ち上がる前に腹部に足を置き、拳銃を構える。

「よそ見たのが、命取りになったな！」

力を込め、胸に向かって銃弾を使い果たす勢いで拳銃を交互に連射する。

銃撃が止まり、機関部が剥き出しになっているのに気付く。下を見れば、そこには血塗れの……見るにたえない状態のシュヴィティが横たわっていた。

急ぎで弾倉を取り替えるため、片方の拳銃を投げ捨て、残った拳銃の弾倉を入れ替える。

「どうする？ この状況じゃ、お前に勝ち目は無いぜ。一人二人は殺せるだろうが……もう一人は無理だろ」

拳銃をエクヴスイに向かって構える。

果たして、これで通じるだろうか……。コイツなら、相打ちになっても敵をしとめそうだが……。

エクヴスイがエルティたちの事を見る。今は林の所に居るが合図一つでコチラに加勢する。三対一とはいえ、魔法使用者を倒した奴等だ。この状態で倒せるはずがない。

『魔王』の部下（15）

エクヴスイは舌打ちをすると背を向けずにその場から立ち去った。

「……大丈夫か？ ベスウエル」

彼女が立ち去ってから暫くした後、エルティが話しかけてきた。

「ああ。……それより、まさか奴を魔法未使用で倒すとは……驚いた」

「そんな事より、オリが……！」

彼の方を見る。刀を手に持ちながら、絶命していた。

「魔法使用者に、一人の犠牲だけで勝利を納めたんだ。上等だよ」

シュヴィティの死体を持ち上げる。

「さあ、後始末だ。戦いはまだ終わってないぜ」

シュヴィティとルヴァの死体は森の奥に投げ捨て、彼の死体は木の下に穴を掘り、そこに埋めた。彼と同じ処遇をするのは避けたかった。

「生き返らしたりとか……しないのか」

埋め終わった頃にエルティが話しかけてきた。

「そんな魔力、残っちゃいないさ」

「残ってたら、生き返らせるのか？」

「さあね」

それ以上、エルティは何も発しなかった。

「さあ、行こうぜ。フティが待ってる」

元居た場所へ、歩き始める。

数歩歩いたとことで振り返る。

もうお別れだな。今回、お前がいなかったら勝てなかったかもしれない。有り難う、……オリ。

手を合わせながらベスウエルはそう思った。

『魔王』

「アスイ様」

広い空間の中央部。そこにいる男にエクヴスイはひざまずく。男は背もたれのついた黒椅子に座っている。

「おお……お前か。ベスウエル達はどうした」

「一人、仲間を殺しましたが……ベスウエルは仕留めそこねました」男は二メートル弱ある体を揺らし、驚きの声を漏らしていた。

「何と……シュヴィティとルヴァはどうした。まさか敗れたのか」残念ながら……エクヴスイは呟く。

「我々の部下を殺るとは……些か侮りすぎだな」エクヴスイが立ち上がる。

「どうします？　ヌリやエルティが入れば奴等など……、」

「いや、良い」

それを男は制止する。

「此処で奴等を使うのはあまりにもつたいない。……それに、手下さずとももうすぐあの世界は終わる」

「どういう……意味ですか？」

「何れ、分かるさ」

男はにやりと笑い、黒椅子から立ち上がる。

「さて……、もうすぐ全ての役者が揃う。そうすれば、最高の劇の始まりだ」

最終局面（1）

シュヴィティとルヴァが死んだ。

草原に座りながら、ベスウエルは考える。

しかし、まだエクヴスイはまだ生きている。これから最精鋭の部隊を引き連れて、ベスウエルたちを襲いにこないとは限らない。

なら……早々に計画を実行するしかない。もうあまり時間はない。

「さすがに、やりすぎた……」

エルティが呟く。手足が痛く、上手く動かない。だからこうして小屋の中で横になっているしかない。昨日は生きるか死ぬかの状況だったから、使い慣れてない銃や刀を上手く使えたのかも知れないけど、やはり使い慣れてないものを過度に……しかも拳銃や刀など過激な物を使用したから、全身が痛い。しかも、帰りは徒歩だった。次の日は確実に筋肉痛になっていて不思議はない。

「……ん？」

頭上を大きな黒い影が覆う。

「よお、エルティ。フティは？」

影の正体はベスウエルだった。

「……何だ、ベスウエルか。フティは川じゃないかな」

「そうか、有り難う」

ベスウエルは手を振りながらその場から立ち去ろうとした。

「何か、用でもあるのか？」

ベスウエルは振り返らずに、

「……フティはもう、俺たちの仲間だ。そろそろ、計画の全容を説明するんだよ」

最終局面（2）

ベスウェルが立ち去ってから、数十分が経った。

……空気が悪い。こんな狭い場所に居たって気分が悪くなるだけだ。それに少しは身体を動かさないと、今度何か有った時にまたこうなってしまう。

重い身体を起こし、壁に寄り掛かりながら歩く。言うほど、辛くは無かった。

暫く歩き続けると、川に着いた。

川の近くに座り、身体を休めながら水面を見つめる。

「やあ、エルティ」

暫くした後、後ろから声が聞こえた。振り向くと、そこにはフテイが居た。

「フティ……」

「隣、空いてるか？」

「……ああ、空いてるよ」

隣を手のひらで叩きながら彼は言った。

「知ってたんだな、お前は」

その言葉で、すぐに計画のことだろうと分かった。

「ああ。……まあ、知ったのはつい最近だけだな」

「にしても、びっくりしたよ。まさか、あんな事をしていたとはな」

「まあ……そうだな」

彼も、最初はそうだった。

最終局面（3）

「それで……フティはどうするんだ。参加するのか？」

「まあ、な。別に悪いことをしている訳でも無いからな」

フティは笑いながら答えた。けれどその笑顔は一瞬だけだった。

「でも、なあ……」

フティは溜め息を吐きながら俯いた。

「……ん。どうしたんだ？」

「浮かばれないよな、アイツ」

両手を後ろに置き、上を向きながらフティは言った。

「アイツって……ん？」

声に出して分かった。アイツとは……、

「サミ、だよ」

サミはベスウエルのことを只の殺人鬼だと思い、このグループ……組織を抜け出そうとして、ベスウエルに殺された。……ベスウエルの計画の真偽を知っていたなら、抜け出そうと考えなかったかもしれない。つまり、ベスウエルが計画を皆に話していたらサミは……死ななかった。

「やっぱり、そこらへんはベスウエルが悪いよな。ちゃんと計画のこと、話していたらならサミは死ななかったかもしれない」

フティは手を地面につけたまま握った。

「そう、だけど……うん」

「うん？ どうしたよ」

フティが彼の反応に驚いたのか、首を傾げた。

最終局面（4）

「……正直、サミが死んだからって、悲しんだりはしなかった。そもそもサミのこと自体同じ境遇の人、程度でしか見てなかった。そりゃあベスウェルがサミを殺したとき、なんてことをするんだと思ったが……その程度だな」

まあ、とフティは笑った。

「確かに親しくない他人が死んで悲しんでるんじゃないか、キリがないからな」

「それに……。フティはさ、ML事件の事とか……。ベスウェルに聞いた？」

敢えて遠回しに聞いた。もし真偽を知らなかった場合の対応が面倒だからだ。

「ML……。ああ、マジック・ロスト事件か。お前なんだってな、犯人」

ベスウェル、そこまで喋ったのか……。と一瞬思ったが、これからやっていく……。本当の『仲間』なのだから隠し事は良くないだろう。「少なくともML事件で、数人は確実に殺している。だから……。かな。正直人が死んでもそんなに悲しくなくなった」

それに、彼は一度死んでいる。だから、死に対する恐怖心も薄れている。そういえば、今と昔じゃ随分と性格が変わった。それも一度死んだりしたからだろう。

「そんなもの、かな。確かに俺も何人が殺しているから、そういう心は消えかかっているのかもな」

最終局面（5）

「まあ……。という、そんなに驚かないんだな」

普通、こんな事を聞いたら少しは反応する。驚いたり怒ったり。

「マジック・ロスト事件の事か？ まあ旧人類……。いやハーフならこういう行動したっておかしくはないさ」

「そういうものなのか？ じゃあフティも、もし魔法が使えたらM
L事件みたいな事、したのか？」

「まあ、そりゃあ……。」

フティが何か言おうとした時、背後から聞きなれた声が聞こえた。

「エルティ、フティ、今から『破壊砲』に行くぞ」

「ベスウェルか。破壊砲？ 何しに行くんだ？」

彼が立ち上がりながら質問する。

「最終点検だ。最後の最後でミスしたくないからな」

「そうか。……。というかさ、」

フティが立ち上がりながら不満の声を漏らす。

どうした、とベスウェルが聞く。

「いや、さ。その……。数字で呼ぶの。何とかならないのか？」

「何だ、気に食わないのか？」

「いや、別に……。ちょっと気になったからさ。そういや昨日戦った敵、エクヴスイとか言ったつけ。あれ、六って意味だろ？ ということは敵側にもエルティとか、そういう名前の奴が居るのか？」

最終局面（5）（後書き）

この小説も書き初めてから約九ヶ月になりますね。七月辺りで八月中旬に完結予定なんていって、もう気がつけば九月下旬です。嘘と
いうか何というか、すいません。

さて、もうこの小説も終盤です。山場が終わり、後はもう完結させるだけ、という辺りです。この終盤がキツイのですが。

携帯機器での更新と言うことで、一話一話の内容が薄く、何かもう読みにくくなったりしてすいません。一応高性能PCが手に入ったのですが、途中から変えるのはあれだなー、と思ったので結局更新量は変わらずです。多分次回作は色々変わってると思うので、その時は宜しくお願いします。

最終局面（6）

エクヴスイ、か……。

そういえば、そいつ等が旧人類を滅ぼしたんだよね……？

エルティが思う。

じゃあ、もう復讐は済んだのだ。正確には一人まだ生きているが、それでも終わったと考えてもいいだろう。

でも、何でだろう。前までは旧人類を滅ぼした奴に復讐をしたいと思ってた。だから、『魔法を無力化にする魔法』を使用して旧人類を滅ぼした奴に———新人類に復讐した。

でも……復讐を終えた今では、何でそんなことを？ とさえ思える。復讐した後では、何かが落ちたかのように心が空っぽになった。その空っぽになった理由はわかる。

本当に、あんなことをしてよかったのか？

そう思っているのだ。

あの魔法を使用したせいで、誰かが死んだ。確実に。直接でなくとも、間接的に、二人は。

奈三川と———その彼女。

そして、魔法によって支えられていた人々。

あの魔法を使わなければ……、

その声は、ずっと聞こえていた。でも、まさか自分に対するものでは無いだろうと心のどこかで思い、無視していた。

「エルティ」

目の前に、ベスウエルが立っていた。気づかなかった……。

「ん……、」

「もう行くぞ。準備しろ」

分かった。そう返事をした。

もう何度目かの車に乗る。勿論、運転はベスウエル。エルティは

助手席に、フティは後部座席に乗った。

「『破壊砲』の点検っていったけど、もうすぐ使用するのか？」
走行を始めてから数分が立ったころ、彼が尋ねた。

「ああ。エクヴスイを生かして帰らせてしまったからな。もう『魔王』の耳に入ってるだろう」

「……て事は、あの三人組以上の敵がきたりするのか？」

先ほど、フティが言っていた、『エルティとか、そういう奴もいるのか』という疑問。それにベスウエルは、『居る』と答えた。
敵側には？1の『エルティ』？2の『オリ』などが居るらしく、それよりさらに強力なナンバー0『ヌリ』など居る。？6のエクヴスイで敵わない奴らなら、もっと強力な？1などがきたりするのだろうか……？

最終局面（7）

「いや、それは無い」

ベスウエルが首を振る。

「この『地球』なんかより優先して占領したい場所があるはずだ。そんな時にこんな場所に精鋭部隊を送るはずがない」

そうなのか、とエルティが頷く。それに対しベスウエルは、
そうなんだよ、と返した。

何気ない会話だったが、初めてあったときより親しくなっている、とフティは感じた。

暫く走行し続け、『破壊砲』のある場所に着いた。

「起きろ、二人とも」

運転席にいるベスウエルがエルティとフティに言う。時間が長かったからか、二人は寝ていた。

「ん……あ、ああ。やっと着いたのか」

眠り眼を擦りながらエルティとフティが車から出る。

「全く……魔法が使えるなら瞬間移動でもすればいいのに」
フティが愚痴をこぼす。

それを見たベスウエルが怪訝そうに、

「お前、話聞いてたよな？」

「聞いてたし覚えてるよ。……って、」

中央部にある『破壊砲』を見てフティが驚く。

最終局面（8）

「随分大きいな。……これ、動くのか？」

「問題ないはずだ。まあ、試運転が出来ないから何ともいえないが」
ベスウエルが『破壊砲』に近づいていく。それにエルティたちも続く。

「発射するには電力と魔力が必要何だよな。どうやって送電するんだ？」

エルティが首を傾げる。

「地下に電柱を作ってある。それを使う」

「地下に？ 魔法は何でもありだな……」

ベスウエルは肩を上下に揺らしながら、そうだな、と言った。

「まあ、こんな感じだな」 ベスウエルが『破壊砲』の周りを一周して言った。

「いいのか？ こんなので」

「いいんだよ」

フティの疑問にベスウエルは呆気無く返した。

「別に点検できる場所はもうした。これ以上したって無意味だ。後は本番に賭けるだけだ。さあ、帰ろうぜ」

三人で車に乗り込み、車はゆっくりと動き始めた。

走行開始から数分。異様な空気にベスウエルは気が付いた。

前方数百メートル行ったところに、白いバイク一台と数人の男性がたっていた。服装は青服。警官がよく着るような服だった。

最終局面（9）

「……何だ、あれ？」

別に此処は人の通らない場所、っていう訳でも無い。しかし状況が状況の為、不安を隠せなかった。

「不味いな。バレてしまったか？」

フティが後部座席から言う。『破壊砲』や計画のことではない。この車のことだ。前回、車をエクヴスイたちに破壊されてしまった。魔法で生成するのも今のベスウェルにとっては無理な話な為、新たな車を近くの駐車場から盗んできたのだ。

「どうだかな」

ベスウェルが速度を変えずに呟く。

「しかし、もうそうだとしたら……、」

エルティが言葉を止めた。前に居る男性が旧人類が使うような自動拳銃を構えていたのだ。

そして、銃声。

鳴るより前にエルティとフティは身を屈めていた。左側に吹き飛びそうな衝撃を受け、車は停止した。

「そこの白い車、停車しろ！」

男性が銃を構えながら言う。逃げると思ったのか、止まっているのに男性は叫んだ。

「搭乗者は両手を挙げて出てこい！」

冗談じゃない。エルティは悪態をつく。

何時からこの国は問答無用で発砲する国になったんだ？

最終局面（10）

「仕方がない。外に出るぞ」

ベスウェルが両手を挙げて外に出る。彼らも同じように外に出た。後ろに立っている男性が何やら紙と彼らを見比べる。その紙に何が書かれているか知らないが、恐らくコチラの情報が書かれているのだろう。

その紙を持った男性が付近の男性と話をする。やがて確認が取れたのか、その紙を無造作に地面に捨てた。

そして……、

拳銃を、構えた。発砲した。

ベスウェルは無言で両手を降ろし、前に向ける。

数人の男性が発砲した銃弾が、ベスウェルの前で弾け飛ぶ。

何度か見た、ベスウェルの魔法。防壁。彼らはベスウェルの魔法の存在を知っているから驚かなかった。だが、それを知らない男性等も驚かなかった。

銃弾が止んだ瞬間。

ベスウェルが指をパチン、と鳴らした。

数秒と経たずに、男性等が倒れた。

「へえ、コイツは凄い。……って、おい」

フティが言う。

「逃げられた、な」

視界の奥に、一台の白いバイクの姿があった。恐らくは発砲する前に逃げたのだろう。

「追うか？」

「いや、いい。『魔界』の奴ならともかく、只の人間だ」

ベスウェルは車のドアを開けた。

最終局面（11）

「さて。いよいよ、だ」

朝方四時。まだ陽も完全に昇っていない時刻。ベスウエルが小屋の前で言う。

「『破壊砲』を使い、『魔王』の部下を滅ぼす。……準備は良いな？」

エルティとフティが頷く。彼らは厚い服装の上に、更にコートを着ていた。

「……では、行こう。『魔王』を滅ぼす一歩目だ。ミスはするなよ」
死んでいった仲間たちの為に、この計画は意地でも成功させたかった。

何も知らずに死んだサミ。仲間のために最後まで頑張ったオリ。その仲間たちへの償いのために、成功させなければならぬ。

それだけで、足りるのか？

いや、全然足りていない。

終わったら、ちゃんとした墓に埋めてやろう。

ベスウエルは静かに運転席に乗り込んだ。

塔の上で、エルティは双眼鏡を片手に周りを伺っていた。機械は苦手なため、『破壊砲』の起動、制御はフティが行う事になっていた。

そのため、彼は塔の上で偵察をすることになった。

双眼鏡には対・魔法、暗視装置の効果が付加してある。

あの程度の魔法で、完全に魔法を消すことは出来なかった。無力化は一時的でしかなかった。

つまり、現時点でもベスウエルや『魔王』の部下以外——一般人でも、以前強力な魔法を使用していた者であれば魔法を使用できるのだ。

「準備は良いな。エルティ、フティ」

耳に付けた小型の通信機からベスウエルの声が聞こえる。小型だが、感度は悪く無い。

「ああ、勿論だ」

「問題ない。『破壊砲』は何時でも起動可能だ」

口々に返事をする。フティは現在、『破壊砲』の起動装置のすぐ傍にいた。

「では、始めるぞ」

これから『魔王』の部下を倒すとは思えない、あまりにも抑揚の無い声でベスウエルが言った。

「了解」

フティの声が通信機から聞こえたのと同時に、視界が薄暗くなり、背後からキーン、と金属が擦れるような高い音が聞こえ始める。振り向くと、『破壊砲』の周囲が黄金色に包まれていた。

『破壊砲』の蓄電が始まったのだ。黄金色に包まれているのはベスウエルの魔法のせいだろう。

「さあ、集中しろよ」

発電機で作られた電力が一斉に『破壊砲』に殺到する。つまり、民家には電力が届かない。異変に気付くのも時間の問題だ。

蓄電から数分が経った。双眼鏡を左へ右へ、上へ下へ動かす。いたって変化は無い。

「なあ、蓄電までどれ位掛かるんだ？」

コートに身を包み、エルティが通信機に話しかける。

『魔王』の部下が空中に居るため、光が地上によく届かない。そのため、今まではベスウエルが天気进行操作していた。だが少しでも魔法で『破壊砲』の蓄電を補助したいから、その天気进行操作する魔法は現在、使用していない。つまり、寒いのだ。今になって、今が冬である事を思い出した。

最終局面（12）

「さあ。何せ初起動だ。どれぐらいかは分からんな」

『破壊砲』の周囲で銃を構えて護衛をしているベスウェルが答えた。

「まあ、順調に行けば半日ぐらいだろう」

「半日？」

エルティが首を傾げる。

「そんなに掛かるのか？」

多量の電力と魔法を使用して蓄電しているのに、何故そんなに掛かるのだろうか？

「ただ発射するだけなら半時と掛からない。だが、相手は『魔王』の部下だ。これぐらいで無ければ倒すことは出来ないだろう」

「成るほど。そうなのか」

しかし、そうなると周囲にバレる可能性が大きくなる。だが、後最低でも半時程暇になる。

「そういえばさ、魔法って何かズルイよな」

特に意味は無く呟く。退屈だった。

「そうか？ 何がだ」

ベスウェルが返事をする。

「魔法ってさ、例えば心身が優れて無くとも強くなれるだろ？ ほら、よく創作であるじゃないか。普段は弱虫で心身が優れていなくとも、魔法だけは超一流、とかさ。そういうのって何かずるくないか？」

「まあ、よくある話だ。しかし、実際そうでは無い。まあハーフだから分からなくても仕方が無いか」 え？ と声を漏らす。ただの暇つぶしに、とふった話題だったが、何やら真面目な話になろうとしているような気がした。

「実際、心身が劣っているのに魔法だけ一流、なんて奴は先ず居ない。……医者を見たことあるよな？」

「医者？」

医者には何度か診てもらった事がある。それがどうしたのだろうか。

「医者って華奢で心身ともに優れてるイメージは無いだろう？ だが、実際は違う。人の傷を癒す魔法を習得するのには凄い努力が必要になる。自然と体力もつき、心も鍛えられる」

最終局面（13）

「まあ、簡単に言えば身体能力と魔法能力は比例するって事さ」
ふーん、とエルティは頷く。暇つぶし程度の話で深い意味は無かった。

しかし、それほど時間は稼げなかった。経ったのは数分だった。
念のため双眼鏡で周りの様子を伺う。

異変はなかった。……『破壊砲』以外は。

「……？ どうしたんだよ？」

突然金属の擦れる音が止まり、『破壊砲』には黄金色だけが残された。

「どうしたんだ、フティ！」

通信機に向かって叫ぶ。まさか『破壊砲』が故障したのか？

「さようならだな、ベスウエル。……この人殺しが」

通信機から聞こえる抑揚のないフティの声。

「お前、何言ってる？」

「その『破壊砲』を使って人類を滅ぼすんだろ？」

意味が分からない。『破壊砲』の事も『魔王』の事も話したはずだ。なのに……、

脳裏に、ある日の出来事がよぎる。

オトウヒが武器弾薬を奪い、逃走した。まさか、

「じゃあな、えせ英雄さんよ」

「この裏切り者がっ！」

銃を地面に叩きつける。

いや、正確には裏切っていない。……元々フティはベスウエルのことを仲間だと思っていなかったのだ。

最終局面（14）

「どうした、ベスウエル？」

その通信機から流れる声は、嫌でもエルティの耳に届いていた。ただ内容は今一良く分からなかった。しかし、『滅ぼす』だの『裏切り』だの……穏やかな話で無いのは明らかだった。

「フティが裏切った！」

あの、フティが？ サミの事など、よく考えている良い奴だと思っていたのに……。

いや、それより。

何故、裏切る？

フティはベスウエルの計画のことや『破壊砲』の使い道も聞いているはずだ。それは世界のため。なのに何故……、

「俺はこれから丘雅人と……恐らく居るだろうムスリカを潰す。お前は、エルティは『破壊砲』の再起動をしてくれ」

「無茶だ！」

エルティが叫ぶ。彼とて、異変に気付いていない訳ではなかった。双眼鏡が、何かを捉えていた。静かに動く黒い影。見た感じ、三十以上はある。

「大丈夫だ。それより、『破壊砲』の事は頼んだぞ。あれが『魔王』の部下を倒す最後の切り札なんだ」

「おい、ベスウエル！ ベスウエ……、」

それきり、ベスウエルとの通信は途切れてしまった。

彼は隣に置いてあった刀一本と自動拳銃二丁、そして予備弾倉を服のポケット等に仕舞い、『破壊砲』へと向かった。

最終局面（15）

高く跳躍し、ベスウェルは敵を……丘雅人とムスリカを探していた。

……結局、彼には二人しか信用できる仲間が居なかった。周囲を見渡し、着地。

それをつけ、敵を探していた。魔法を使えば容易なのだが、生憎無駄に使用するほどの魔力もない。

そうして、数回跳躍と着地を繰り返した後。

横から、突然何かが飛来してきた。

「っ！」

防壁を生成し、その何かを弾き返す。刹那、不思議な感覚に襲われた。身体の底から、エネルギーを吸い取られる様な感覚。前に一度体験している。これは……、

「やれやれ」

と、横から聞こえる声。

「魔力を吸収する銃弾。旧人類もなかなかどうしてやってくれる」
「貴様は……！」

「あの時殺しておくべきだった、かな？」

両手に銃を持った男が言う。

「白坂、サトル……！」

助けてやった恩も忘れやがって。彼は舌打ちした。

エルティが、竹芝が魔法を無力化にする魔法をばらまくために乗った飛行機。それは墜落した。あの高度からの墜落。普通なら死んでいる。しかし、白坂は魔法によって身を守った。無論、魔法を無力化にする魔法を使用した為、強大な魔法は使用できなかったが、それでも即死は免れた。

最終局面（16）

死者を生き返らすには莫大な魔力を使うが、重体でも死んでなければその治癒はベスウェルにとって朝飯前だった。その為エルティを、ML事件の犯人を生き返らすついでに白坂を助けたのだ。なのに……、

集中し、白坂を見る。まあいい、此处で殺せば……。

刹那。

夥しい銃声と共に銃弾が飛んできた。防壁を生成して守ったが、

『集中』は途切れた。

「アンタの弱点は知っている」

白坂が右手に持った銃を連射する。その度に、彼は防壁を生成した。

左手の銃を連射し、右手の銃の弾倉を変えながら、

「防壁使用中は攻撃できないんだろ？ 流石に確証は無かったが、

前日アンタに送った人員から良いことが聞けたよ」

前日。恐らくはあの青い服をきた奴等だろう。

しかし、どうして自分に人員を送るような真似を？

「以前病院を襲撃しただろ？ それで間違はなくアンタだと思ったよ。今ならともかく、あの時に魔法を使えるのはアンタぐらいなものだからな」

白坂は今もなお、銃を連射していた。

「さて、もう終わりにしよう。ベスウェル。人殺しの英雄」

白坂が銃を降ろし、代わりに右手を挙げた。

すると周囲からギリスーツを着、突撃銃を持った男性が現れた。

最終局面（17）

恐らくは草原に隠れていたのだろう。二十人程居た。

「やれ」

白坂が腕を振り降ろす。合図だった。男性等が突撃銃を一斉に発砲しだした。

ベスウェルはそれを防壁で守るしか出来なかった。回避する余裕など無かった。

「攻撃、止めろ」

男性等が突撃銃の弾倉一つ半を発砲し終えた所で言った。

白坂が両手に自動拳銃を持ちながらベスウェルに近付く。

もう魔力は切れ、防壁など生成出来る様子では無かった。

「さて、死ぬ前に何か、言いたい事はあるか？」

銃口を頭部に向ける。

ベスウェルは右膝を地面に付けながら、

「いいのかい。そんな……余裕ぶって」

途切れ途切れの弱々しい声。

「そうだな……っと。その前にコチラから質問だ。竹芝は、ソチラ側に居るのか？」

「さあ、な……」

ベスウェルが笑いながら言う。それが最後の笑いだった。

「そうかよ」

白坂はベスウェルに向かって発砲した。地面に倒れても、弾倉内の弾が切れるまで。

最終局面（18）

『破壊砲』の起動装置の前でエルティは立ち止まっていた。どのスイッチを動かせばいいのか分からない。ベスウェルから説明は受けてなかったのだ。

スイッチはパツと見で三十はある。

取り敢えず、左にあるスイッチから順番に動かしていく。

一番目のスイッチを前に倒す。反応無し。元に戻す。

二番目、三番目と倒していくが、反応無し。元に戻す。

もしかしたら、複数のスイッチが作用して起動するのか……？

そう考えて動かした二十九番目のスイッチ。当たりだった。そしてその考えは外れだった。

キーン、という金属音が当たりに響く。

「やった……」

後はこの『破壊砲』を守り抜くだけだ。行程は一つだが、簡単ではない。

「ん？」

カンカンカン、と。

まるで金属を叩くような音が聞こえる。此はさっき聞いた音だ。階段を登る時に……、

即座に振り向く。人が居た。居るはずの無い、死んだはずの人間が。

「よお、何やってんだ？」

立っていたのは、白坂サトルだった。

何でお前が生きてる？

普通ならそう言うだろう。だが、彼は違った。そんな言葉、脳裏によぎらなかった。

「何をしに来た」

右手に持っていた銃を構える。

最終局面（19）

「ベスウェルは死んだ」

白坂もまた、そんな言葉など発さずに両手に持った銃を構えた。彼は特に驚きもしなかった。分かりきっていた事だった。

「人殺しの計画も、此で終わりだな」

彼は直感した。白坂に何を言ってもどうせ信じない。なら……、「此処でお前を殺すだけだ」

「人殺しに何を言っても無駄、か……。なら此処で終わらせるよ」
彼らは対じした。狭い『破壊砲』を囲むように作られた床の上で。

彼が発砲する。するとその銃弾は……白坂の前で弾き返された。

……魔法だ。

特に驚きはしなかった。

「お前の『魔法を無力化にする魔法』は大して威力は無かった。今じゃ一般人でさえ魔法を少しならば使用できる」

白坂が右と左にある銃を交互に発砲する。

彼は装置の陰に隠れ、銃弾を防いだ。

戦いが始まって五分弱。

白坂は滅多に攻撃魔法を使用しなかった。使用したとしても、威力の低い魔法だった。

防壁などの防御魔法は自衛のために修得していたとしても、攻撃魔法などは日常で使用する機会など無い。だからお触り程度にしか攻撃魔法は修得していなかったのだ。

最終局面（20）

これは彼にとってプラス要素とも言えたし、マイナス要素ともいえ
えた。

攻撃魔法は、当然消費魔力が大きい。しかし防御魔法……防御は
それほど魔力を消費しない。白坂は攻撃魔法を使用せず、防御魔法
だけを使用する。つまり、極端に消費魔力が少ない。白坂を倒すに
はあの防壁をどうにかするしか無い。攻撃を続け、魔力が尽きるま
で待つのが一番の策だが……それはどうやら無理らしい。しかし、
まだ完全に魔法が回復してるとも言い難い。攻撃を続ければ何時か
……、

「さあ、そろそろ諦めたらどうだ？ 新人類と旧人類。勝ちは見え
てるだろう」

白坂が装置に向かって発砲する。

「それに、もしお前が俺を倒したとしてもすぐに俺の仲間が駆けつ
けるぜ」

随分と口調が荒くなったものだ。

確かに、此処で白坂を倒しても無意味だろう。だけど、諦めたく
ない。ベスウェルが、オリが命をかけて達成させようとした計画。
どうせ無理だとしても、まだ諦めたくない。

だからあの防壁を無力化する策を考えなければ成らない。

最終局面（21）

オリがやったようにこのコートを使って攻撃すれば……、

いや、あれは不意打ち限定の技だ。正面からやったっけ呆気無く魔法を集中されて弾き返されるだけだ。

……不意打ち？

いや、出来るかも知れない。

銃をポケットに仕舞い、コートを脱ぎ、肩に掛ける。そして側にあった刀を手に持ち、抜刀し、鞘と刀を両手で持つ。

そして装置の陰から出、白坂に向かって鞘と刀を投げつける。

しかしそれらは防壁で弾き返される。

此処までは予想通りだ。

装置の上に登り、幾つかのスイッチを踏み、白坂の真横を通るように跳躍する。そしてすれ違い様にコートを白坂に向かって投げつけ、床を滑り白坂に向かって銃を抜き、発砲する。背後からの不意打ちをついた攻撃。さすがに此は効いた筈……、

「やれやれ……。随分派手な攻撃だな」

歯を食いしばる。何で……？

「っ！」

銃弾が、コートの前で停止していた。防弾……！

凡ミスだ……。

白坂がコートを地面に投げつけ、両手の銃を足、手に向かって発砲する。

激痛が身体を駆け抜けた。

「さて、何も聞くことは無い」

白坂が胸部を足で押し付け、銃を頭にかざす。

そして……何も発さず彼は銃を発砲した。

魔法の世界

ベスウエルとエルティが死に『破壊砲』の起動が止まる。

ベスウエルの計画は失敗に終わり、人々は安堵した。

だが、それから数日と経たずに、人々は空の……地球の異変に気付く。

それによって人々は『破壊砲』の使い道、そしてベスウエルが成そうとしていた事を知る。

人々はそれを使って空に居る『魔物』を撃破する。

これで世界は救われた。人々は本当に安堵した。

そして人々はベスウエルを、エルティを世界を救おうとした英雄として永遠に讃える。魔法の存在する、それ以外は何もない『魔法の世界』で……。

魔法の世界（後書き）

やっと『魔法の世界』が完結しました。

（執筆時間が）長かったようで（内容は）短かったですね。

読んで下さった皆様、有り難う御座いました。

分かる人も多いと思いますがこのラストはBADです。魔法が回復しているので、魔王が征服するみたいな感じですが。ベスウェルも居ないから倒す人も倒せる人も居ないわけで。

さて、次回作について話したいと思います。次回作は『LH』というホラー（？）系を書きたいと思っています。

魔法の世界は一話500字程度、190話以上と読みにくかったと思うので、次回作は毎週土曜、日曜にまとめて数話投稿（1話2500字程度）としたいと思います。

それでは、また、何時の日か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272j/>

魔法の世界【改定前版】

2011年7月29日03時28分発行